

狐塚遺跡

狐塚遺跡

—福岡県筑後市上北島集落遺跡の調査—

筑後市教育委員会

1970

狐塚遺跡

—福岡県筑後市上北島集落遺跡の調査—

筑後市教育委員会

1970

序

筑後市上北島地区から尾島地区へかけてのこの一帯は古代大集落が形成されていたといわれ、これまでに調査発見された住居跡からは貴重な資料が提供されています。

このたび 上北島、キツネ塚に於て弥生時代から古墳時代にかけての住居跡発掘調査を実施したのであります。

この調査は、国、県の補助を得て、九州大学文学部考古学研究室及び土地所有者の方々などのご指導とご協力を得て調査を実施いたしましたところ、予期以上の成果をあげることができました。

調査結果についても早急に整理がすゝめられ、このたび刊行のはこびとなりました。

幸いにして、この資料が古代文化研究の参考になりますならば、この上ない喜びでございます。

なお本書の発刊にあたっては調査および原稿の執筆を担当された九州大学文学部考古学研究室をはじめ県教育委員会など関係各位のご協力に対し深く感謝の意を表します。

昭和 45 年 3 月 20 日

筑後市教育委員会

教育長 久保田 幹

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1. 調査の経過	1
2. 遺跡の位置と環境	3
第Ⅱ章 各竪穴の調査	5
1. 竪穴の分布	5
2. 第1号竪穴	6
3. 第2号竪穴	12
4. 第3号竪穴	24
5. 第4・5・9号竪穴	28
6. 第10号竪穴	31
7. 第11号竪穴	35
8. 第12号竪穴	40
9. 第13号竪穴	45
10. 第16号竪穴	46
11. 第17号竪穴	50
12. 第18号竪穴	51
13. 第19号竪穴	54
14. 第20号竪穴	57
15. 第21号竪穴	58
第Ⅲ章 総 括	62
1. 竪穴の構造と特色	62
2. 弥生土器から土師器へ	63
付録・周辺の遺跡、遺物	69
1. 常用遺跡	69
2. 裏山遺跡	69
3. 筑後市域の弥生・古墳時代遺物	71
——筑後市郷土室資料——	
狐塚遺跡追補遺物	81
編集後記	82

図版目次

- 図版第一 遺跡全景
- 図版第二 第1号竪穴 上・第1号竪穴全景
下・方形穴内遺物出土状態
- 図版第三 第2号竪穴(1) 上・第2号竪穴全景
下・遺物出土状態
- 図版第四 第2号竪穴(2) 上・土製支脚及び土器の出土状態
下・土製支脚のみの出土状態
- 図版第五 第3・4・5・9号竪穴 上・第3号竪穴全景
下・第4・5・9号竪穴全景
- 図版第六 第10号竪穴 上・第10号竪穴全景
下・土器出土状態
- 図版第七 第11・12号竪穴 上・第10・11・12・16号竪穴全景
下・第11・12号竪穴全景
- 図版第八 第12号竪穴 上・土器出土状態
下・櫛目波状文のある鉢出土状態
- 図版第九 第13・16・20号竪穴 上・第13・16号竪穴全景
下・第20号竪穴全景
- 図版第一〇 第17・18号竪穴 上・第17号竪穴全景
下・第18号竪穴全景
- 図版第一一 第21号竪穴 上・第21号竪穴全景
下・高坏出土状態
- 図版第一二 遺物(1)
- 図版第一三 遺物(2)
- 図版第一四 筑後市常用遺跡

挿 図 目 次

第1図	遺跡付近地図（二万五千分之一「羽犬塚」・「八女」分載）	4
第2図	狐塚遺跡竪穴群分布図（小田・松本・森田・黒野・光枝実測、松本製図）	5
第3図	第1号竪穴実測図（小田・松本・森田・光枝実測、松本製図）	7
第4図	方形ピット内土器出土状況実測図（黒野・光枝実測、貞方製図）	8
第5図	第1号竪穴土器実測図(1)（貞方実測、貞方・岩崎製図）	10
第6図	第1号竪穴土器実測図(2)（貞方実測、貞方・岩崎製図）	11
第7図	第1号竪穴鉄製鋤先実測図（貞方測図）	12
第8図	第2号竪穴実測図（横口・木村実測、木村製図）	13
第9図	第2号竪穴土器出土状態（横口測、木村製図）	14
第10図	第2号竪穴土器実測図(1)（横口測図）	16～17
第11図	第2号竪穴土器実測図(2)（横口測図）	17
第12図	第2号竪穴土器実測図(3)（横口測図）	19
第13図	第2号竪穴土器実測図(4)（横口測図）	20
第14図	第2号竪穴土製支脚実測図（横口測図）	21
第15図	第2号竪穴鉄器・石器実測図（木村測図）	24
第16図	第3号竪穴実測図（真野・与小田実測、真野製図）	25
第17図	第3号竪穴土器実測図(1)（真野測図）	26
第18図	第3号竪穴土器実測図(2)（真野測図）	27
第19図	第4・5・9号竪穴実測図（黒野・光枝実測、黒野製図）	29
第20図	第4・5・9号竪穴土器実測図（黒野測図）	30
第21図	第10号竪穴実測図（高倉・岩崎実測、岩崎製図）	32
第22図	第10号竪穴土器実測図(1)（岩崎実測、高倉製図）	33
第23図	第10号竪穴土器実測図(2)（岩崎実測、高倉製図）	34
第24図	第10号竪穴鉄器実測図（高倉測図）	34
第25図	第11号竪穴実測図（佐田・沢・徳永実測、沢製図）	36
第26図	第11号竪穴土器実測図(1)（佐田測図）	37
第27図	第11号竪穴土器実測図(2)（佐田測図）	39
第28図	第11号竪穴土器実測図(3)（佐田測図）	40
第29図	第12号竪穴実測図（佐田・沢・徳永実測、沢製図）	42
第30図	第12号竪穴土器実測図(1)（佐田測図）	43

第31図	第12号竪穴土器実測図(2) (佐田測図)	44
第32図	第12号竪穴鉢器実測図 (佐田測図)	46
第33図	第13・16号竪穴実測図 (松本・森田実測、松本製図)	47
第34図	第13号竪穴土器実測図 (松本測図)	46
第35図	第16号竪穴土器実測図 (松本測図)	48
第36図	第17号竪穴実測図 (松本・森田実測、松本製図)	49
第37図	第17号竪穴土器実測図 (松本測図)	50
第38図	第18号竪穴実測図 (松本・森田実測、松本製図)	52
第39図	第18号竪穴土器実測図 (松本測図)	53
第40図	第19・20号竪穴実測図 (西・藤口実測、佐田製図)	55
第41図	第19号竪穴、20号竪穴土器実測図(1) (西・藤口実測、西製図)	56
第42図	第19号竪穴土器実測図(2) (西測図)	58
第43図	第20号竪穴西侧溝土器実測図 (西測図)	58
第44図	第21号竪穴実測図 (西・藤口実測、松本製図)	60
第45図	第21号竪穴土器実測図 (西・藤口実測、藤口製図)	61
第46図	西新式變形土器実測図 (福岡市今宿出土) (岩崎・藤口実測、岩崎製図)	64
第47図	雜鉤限出土土器実測図 (藤口測図)	65
第48図	筑後市常用遺跡表採資料(1) (橋口・藤口実測、藤口製図)	70
第49図	筑後市常用遺跡表採資料(2) (橋口・藤口・真野実測、藤口製図)	71
第50図	弥生土器実測図(1) (高倉・西・黒野・岩崎・森田・松本・佐田・藤口・ 宮小路・実測、橋口製図)	73
第51図	弥生土器実測図(2) (宮小路・沢・藤口・橋口実測、橋口製図)	74
第52図	土師器実測図 (佐田・橋口・光枝・真野実測、佐田製図)	77
第53図	須恵器実測図 (真野・貞方・与小田実測、真野製図)	79
第54図	追補遺物実測図 (松本・藤口実測、藤口製図)	81

別添付図 築後市上北島・狐塚遺跡土器編年図 (小田作成)

第一章 序 説

1. 調査の経過

昭和43年6月21日・国鉄鹿児島本線「羽犬塚」駅の南西 900mばかりの国鉄線に近接した西側畠地を地下げ中に多くの竪穴群が発見された。福島高校教諭岩崎光氏を中心となって翌日から八女高・福島高・伝習館高等の高校生クラブ員の参加で発掘が行われた。作業は断続しながら7月26日まで行われた。この間、福岡県教委の視察があり、遺跡の重要性から作業中止と本格的学術調査を要請して、国・県・筑後市から改めて昭和44年度事業として調査費を計上し、九州大学考古学研究室に調査を依頼された。そこで翌年1月、小田が現地を訪れて筑後市教委と協議し、土地所有者が5月末までに水田化を希望しているところから、4月に調査を実施することとした。すでに竪穴は二十数個ほどのほとんどが全掘或は部分掘されていて未掘状態のものはほとんどなかった。さらに発掘が秩序だって行われていないためにかなり究明する上に困難なことも予想された。しかしながら、九州地方で最も研究のおくれている弥生時代終末期の土器を主体とする竪穴群であるところから、その重要性は甚だ大きいと判断されたので、岩崎光氏の調査をひき継ぐことになった。

発掘調査は昭和44年4月19日から30日まで実施し、通じて小田が現地にのぞんだが、便宜上、調査員を前、後二期に分って行った。この間、鏡山・岡崎・森の諸先生も現地を訪れて指導、助言をいたゞき、折から来日中の韓国国立博物館の尹武炳氏の見学もあった。

調査員の構成は次のとおりである。

鏡山猛・岡崎敬・森貞次郎（調査指導）・小田富士雄（調査主任）

〔前期調査員〕

佐田茂・西健一郎・高倉洋彰・松本肇・藤口健二・徳永博行・岩崎二郎・沢皇臣（以上・九州大学）・森田勉（福岡教育大学）

〔後期調査員〕

橋口達也・木村幾多郎・久保山教善・黒野肇・真野和夫・貞方敏（以上・九州大学）・與小田寛光枝房敏（以上・福岡教育大学）

地元調査関係者は次のとおりである。

岩崎光（県立福島高校教諭）

〔筑後市教育委員会〕

下川誠治（社会教育課長）・田中和馬（社会教育課係長）・原口一馬（社会教育課文化係）
なお、八女高・福島高・黒木高クラブ生徒有志の参加があった。

前半は主に弥生終末の竪穴を中心とし、後半は土師器にかかる竪穴を調査することを目度にして4月19日現地に着き、既に削平されて出土している遺物を検討し、発掘調査を始めた。2人1組で

1班をつくり、各班同時に調査する方式をとり、10号、11号、12号、13号、16号、17号、18号、19号、20号、21号竪穴の調査を行なった。また調査中に筑後市常用において遺跡が破壊されているとの報告に、小田・藤口が現場におもむき遺跡の性質、遺物の確認を行なった。各竪穴の概略は次の通りである。削平の為に壁がわずかに認められる程度のものもある。10号竪穴は非常に浅く、方形プランの竪穴でベッド状遺構をもっている。

壺・甕・高塙・鉢・碗の出土をみた。11号竪穴は6m×4.2mでベッド状遺構をもつ。12号竪穴は小規模で日常生活跡かどうかは疑わしく、柱穴を全然認められなかった。16号竪穴は長方形プランである。この4つの竪穴は複合しており、先後関係によって10→11→12号→16号竪穴の順序でつくられている。19号、20号、21号竪穴も複合しているが、削平されている為に壁面が明確でなく、遺構としてははっきりしない部分もある。21号竪穴のピットの中から环部のみであるが、大形の高杯が出土した。

24日に前半組は調査を終り、翌朝解散した。そして佐田が後半組との調査引き継ぎの為に残り、後半組との調査を引き継いだ。

後半は4月25日に現場に集合し、佐田より前半からの引き継ぎを受け、2人1組の班編成を行ないそれぞれの調査分担を決め、既に発掘された遺物を検討して、発掘を開始した。後半に調査した竪穴は1号、2号、3号、4号、5号、9号である。後半の前半は福岡県教委の柳田康雄氏の応援も受けた。

各竪穴の概略は、次のとおりである。

1号は長方形プランの竪穴で床面は擾乱がひどく土器の残存状態も悪かったが、北西隅の方形ピットより、完形に近い土器が出土し、これが最古式の土師器に属し、後半の所期の目的であった最古式土師器調査の目的を果したといえる。

2号は長方形プランの竪穴にL字状のベッド状遺構をもち、既に大半を発掘してあったが、竪穴、土器の残存状態は最も良好であった。弥生終末期のものである。

3号は削平の為に竪穴の壁がわずかに認められる程度であったが、土器も破片ではあるが残存時期を判定した。

4号、5号は住居跡とは言い難く、深く掘り込んだという状態である。奈良時代の須恵器を出土した。9号は5号によって切られており、全体はわからないが、沓形器台を出土し弥生終末期の竪穴であることが判明した。

後半の調査は4月30日に終了し、同日の夜解散し、筑後市上北島狐塚竪穴群の現地調査は終った。

(小田富士雄、佐田茂、橋口達也)

発掘竪穴調査分担者一覧

1号	貞方敏
2号	橋口達也・久保山教善・木村幾多郎
3号	真野和夫・與小田寛

- 4・5・9号 黒野肇・光枝房敏
 10号 高倉洋彰・岩崎二郎
 11・12号 佐田茂・徳永博行・沢重臣
 13・16・17・18号 松本肇・森田勉
 19・20・21号 西健一郎・藤口健二

2. 遺跡の位置と環境(第1図)

筑後市は筑後平野のほぼ中央を占めて東西6軒、南北8軒にわたる市域をもっている。東は八女郡及び八女市、北及び西は三潴郡、南は東西に貫流する矢部川をはさんで山門郡に接している。地勢は市域の中央部を南北に貫通する国鉄鹿児島本線によってほぼ東西に二分される。東半部は八女郡及び八女市域から連続する山塊性丘陵の裾部地域にある。西半部はその西方につづく三潴郡、大川市、柳川市域に展開する筑後川と矢部川によって形成された大デルタ地帯に隣接して低湿地に漸移する地勢を示している。

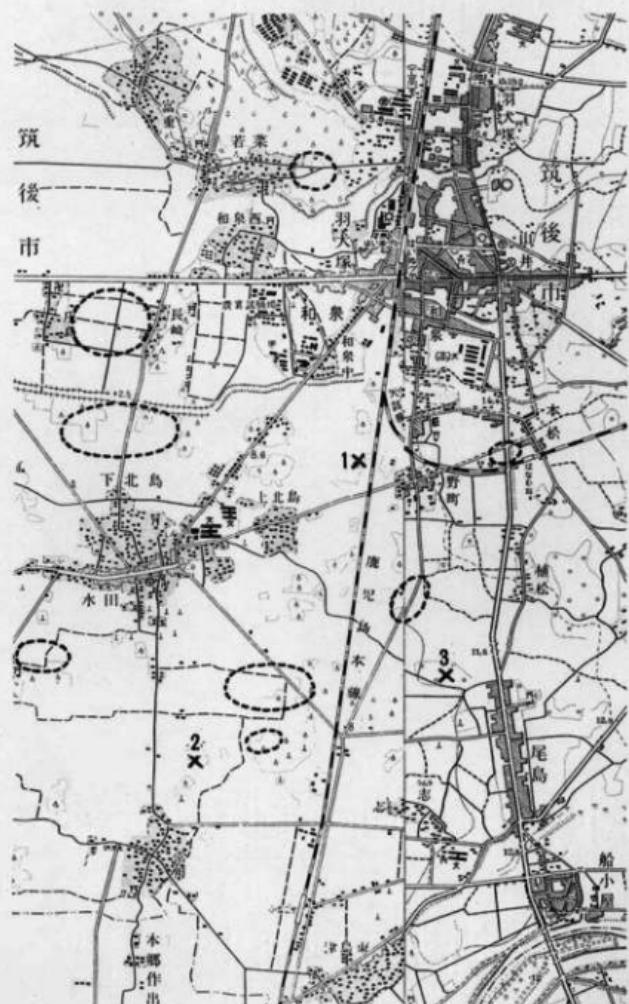
西方につづくデルタ地帯には無数のクリークが網の目のように錯走して南筑特有の景観をつくりだしているが、筑後市西半部はまだそこまでには至っていない。いわば筑後市は山地から低湿地に漸移する境域に位置している。

以上の地勢のなかでも狐塚遺跡は筑後市のほぼ中央部にあって、地勢を東西に分つ接触地点に立地している。遺跡は行政区画上は上北島に属するが、地形上は東方の野町部落がのっている海拔12mばかりの低台地が西にはり出した縁辺部にある。周囲に展開する水田との高低差は1mにも達しない。遺跡の北方400mばかりのところに東西に流れる花宗川があり、南方の矢部川と共にこの付近一帯は氾濫原となり自然堤防地形を各所に形成したのであろう。現在この地域をおおっている阿蘇山系の黒色火山灰系ロームはその後に堆積したものといわれている。筑後市域における弥生時代の遺跡は多くこのようにして形成された低位段丘上に位置している。

地勢上からもこの地域に居住した弥生人達は、稻作農耕に生産活動の主体を依存していたことは疑いないところであり、周囲に広がる水田地帯が農耕地であったことも容易に推察できる。遺跡付近に展開する可耕地の土壤は和泉壤土、若菜壤土、羽犬塚埴壤土と称される壤土、埴壤土であって¹¹⁾農耕地として最適の条件を備えている。この周辺いたるところに弥生土器が包含されていて農村集落が各所に形成されていたと思われるが、上述のような地勢、土壤からみて自然条件に依存するこの多い古代農耕生活には最適地であったであろう。

(小田富士雄)

註(1) 九州農業試験場「花宗川流域土壤調査中間報告」1955



第1図 遺跡付近地図（二万五千分之一「羽犬塚」・「八女」分載）

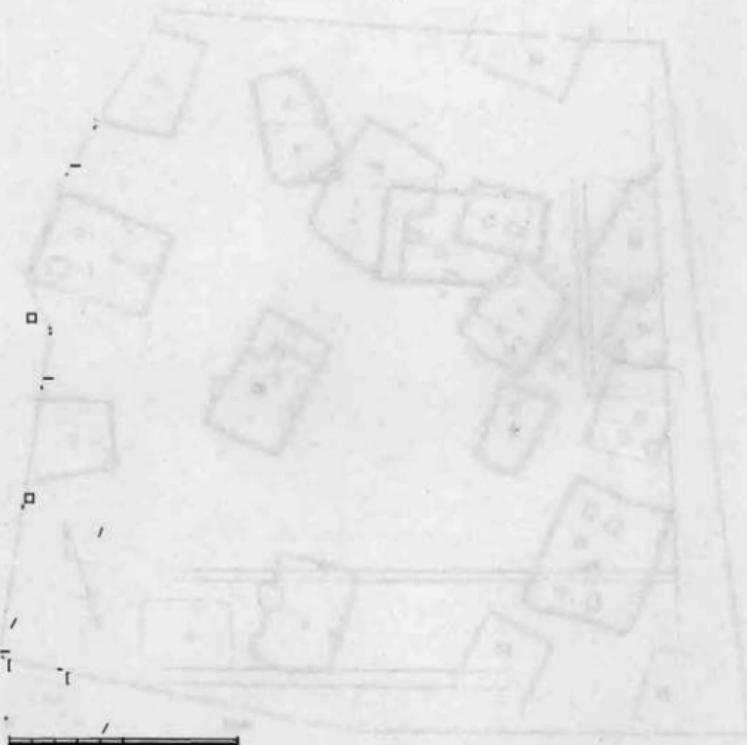
1. 狐塚遺跡 2. 常用遺跡 3. 裏山遺跡

(○) 弥生土器包含遺跡

第Ⅱ章 各 竪 穴 の 調 査

1. 竪穴の分布 (国版第一、第2図)

今回発掘調査を行った地域は低位段丘の北西端にあたる東西27m、南北30mの範囲である。偶々水田化のために地下げを行った範囲に限ったのであったが、竪穴の分布はさらに東方に、南方に広がっているとみられる。



第2図 狐塚遺跡竪穴群分布図

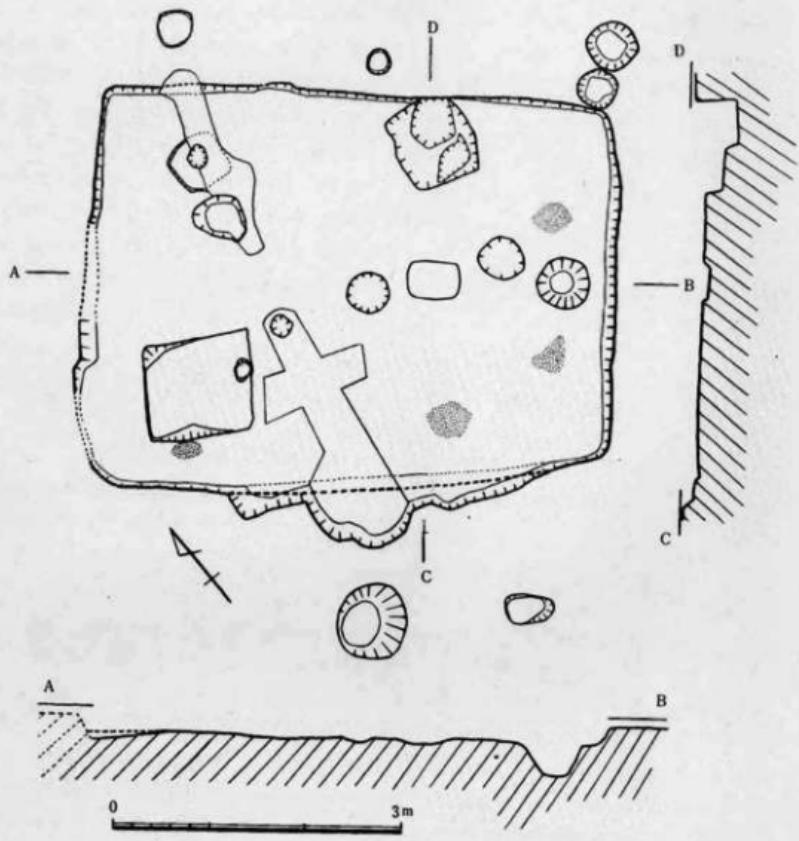
発掘調査区域で確認された竪穴は22個である。北東部寄りにやや密集する傾向があり、重複する状態がみられた。したがってこのあたりでは先後関係の確認にかなりの時間を要し、調査日程の期間に完掘できたのは、第1・2・3・4・5・9・10・11・12・13・16・17・18・19・20・21号の計16個の竪穴である。第6・7・8・14・15・22号の計6個の竪穴については若干の土器片資料によって時期を推定できる程度にとめたものもあるが、未調査のまゝに残された。調査にあたっては北九州地方で空白になっている弥生終末期から土師期初頭の究明を意図していたので、その方針にそって竪穴を選択し、竪穴個々について詳細な検討を行う調査方法をとった。それはあえて限られた時間内で竪穴全部を発掘するという過重な調査方法をとることによって起る調査精度の低下をさけるためである。したがって土器形成が全く同じものはできるだけさけて、異った時期のものを選び、また時間的に明瞭な先後関係の指摘できる重複した竪穴を選ぶことにもなったのである。

(小田富士雄)

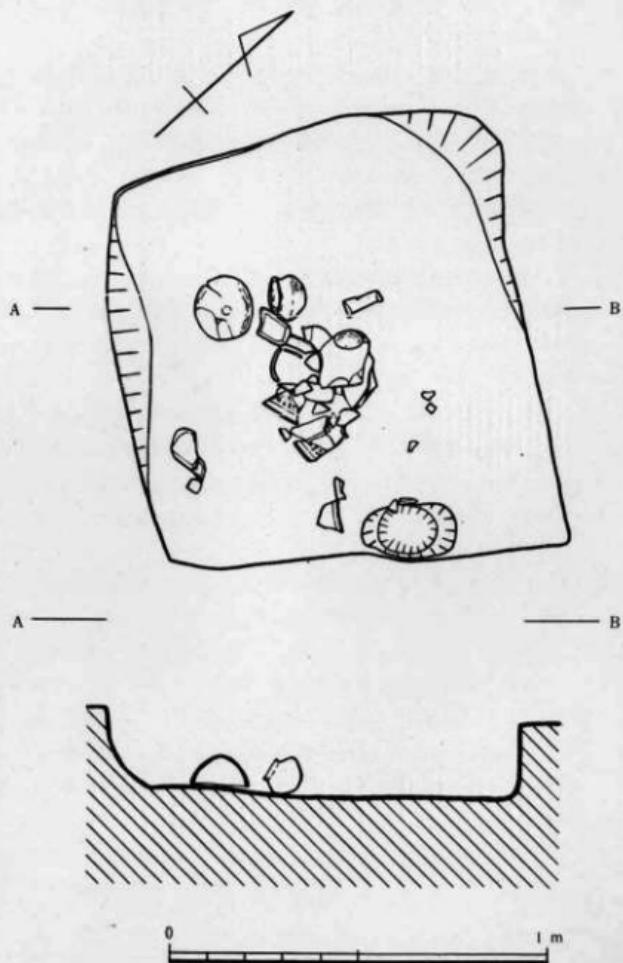
2. 第1号竪穴(図版第二、第3・4図)

第1号竪穴は、竪穴群の西端に位置し長辺5.55m、短辺4m、主軸方位N-41°-Eの長方形プランを呈する。地下工事の為既に周壁の相当部分が削平され、現在最高部で18mを測るにすぎない。また北東壁は後世ぶどう栽培の為掘られた溝によって二カ所にわたる掘込みがみられ、一部で床面に達している。竪穴内床面は大部分黄褐色の硬い粘質地山であるが、南東部の方形ピットの周囲では床上が異り、褐色味の強い粘質土よりなっている。その部分に試掘溝を入れてみると、床より40cm下から無遺物の黒色土層が深く続いていることが確認できた。こうした黒色土層は筑後地方以南にたびたび見られる火山灰質土のレンズ状層であると考えられ、この竪穴の構築に当り床全面を整備する為にこの部分に新たな床土を敷き固めたものと考えられる。

竪穴内中央より南東に偏して長方形の炉跡があり、南西及び南東壁に沿って四カ所の焼土が認められた。ピットは南西部の方形ピットを含めて8コを発見したが、明確な家屋構造を想定することは困難である。南西部方形ピット(第4図)は105cm×112cmのほぼ方形を呈し、深さ20cmある。北西壁は一部ぶどう栽培時の溝で破壊されている。内部からほぼ完形の壺形土器2個、鉢形土器、壺形上器、鐵製鋸先各一個が出土している。ピットの性格は貯藏穴であると考えられる。南東壁に近い円形ピットは内部から黄色及び白色の粘土塊がつまっており、ピット壁との間から壺形土器、壺形土器その他の土器片が発見された。また竪穴の北部隅に近く方形の浅い掘込み(5cm)をもつたピットがあり、内部より奈良時代と思われる土師器の小片が出土していることから、歴史時代の二次的な遺構があったことがしられる。



第3図 第1号竪穴実測図



第4図 方形ピット内土器出土状況実測図

出土遺物(第5~7図)

豎穴に伴う遺物としては壺、塊、甕、高杯、鉢、手すくね土器、器台等の土器及び鉄製鋤先等、がある。

増形土器(1)は小形丸底で、胴部中央にわずかな棱をもち、肩から口縁部にかけてゆるやかに内彎し、口唇部は無理なく外反している。全体に薄手で胎土は精製され焼成も良い。

手すくね土器(2・3)、2は蓋様のもので内面の指なでが頗著である。3は甕の底部と思われ底部外面に指圧痕、内面に薙削りがみられる。

塊(4)は外面に叩きと底部にかけて範削りがあり、内面は刷毛仕上げでその上を泥搔し、底部は蜘蛛巣状の櫛整形がみられる。

鉢形土器(5・6・7)6は完形で胴部中央よりやや高くかすかな棱をもち、口唇部にわずかなふくらみをもつ。外面は横撫でと底に近く縱撫でがみられる。内面は口縁部に近く横撫で、その下は二種の刷毛で整形されている。7は口縁部に近く内反し、内面は刷毛整形で6と共に外面に櫛目がみられる。

高杯(9~13)9は胎土、焼成ともに極めてよく、口唇部から脚との接合部迄わずかに内彎しつつ一気に成形している。全面に撫がみられ、土師器の特徴を示す。10・11ともに胎土、焼成が不良で、11はやや浅い坏部をもつ。12は大形の高杯で、外面黒色を呈する。口縁部の直下に段をもち、脚部へはゆるやかに外彎しつつ続くものと考えられる。13は大形深手のもので、台付鉢に近い。胎土は精製され、焼きも良い。

變形土器(14~20)14は小形の甕で、口縁部はゆるやかに外反する。外面は刷毛、内面は櫛で整形している。15は口縁部がくの字形に屈折し頸の部分に断面半円形の沈線がある。口唇部はや、薄くなり、内面に蒲鉾形の突線がある。16~20はいづれも「く」字形の口縁をもつもので、16の内面には叩きがある。18は口唇部に刻目をもち外面頸部にかけて櫛目がみられる。所謂西新式と考えられる。19は口縁部、胴部ともに直線的で、内外全面に刷毛目がある。20は頸部から丸みを帯びた胴をもち、平底に到る。口縁部は内外面共に横撫で整形で、頸部から5~6cmの間、叩きの上を刷毛で整形している。以下は内外面ともに刷毛仕上げ及び底に近く撫で仕上げがみられる。底部内面は蜘蛛巣状の櫛成形がみられる。

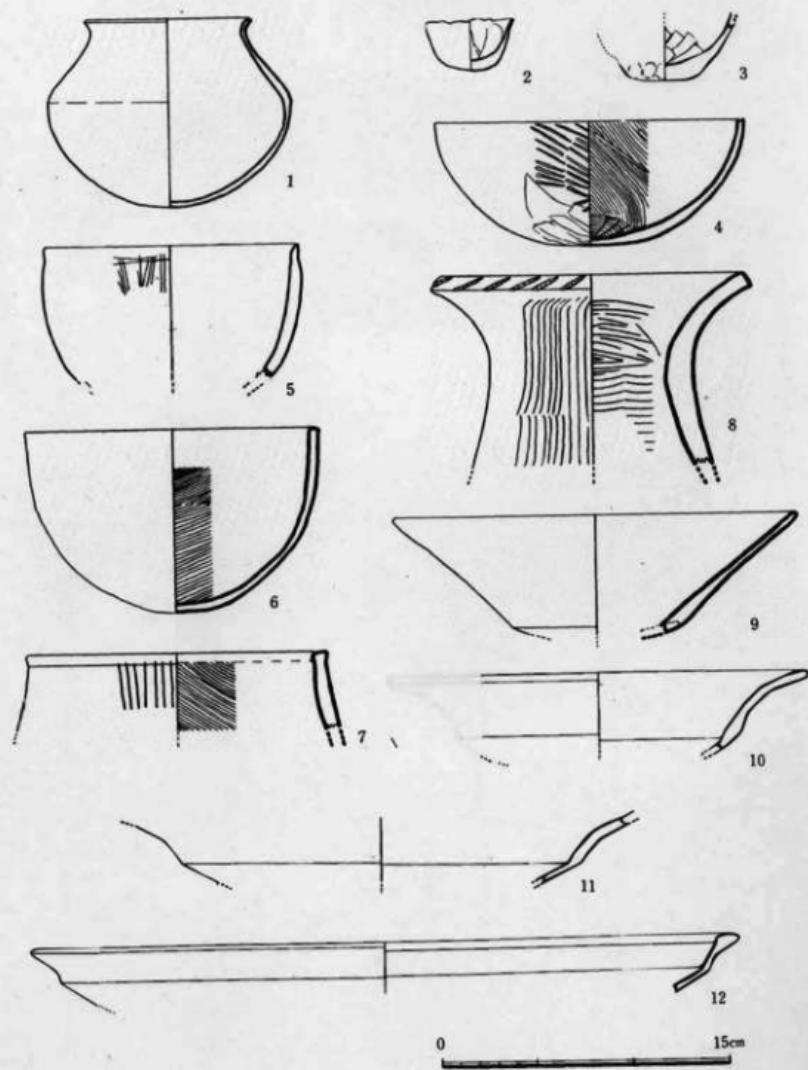
器台(8)は胎土、焼成良好の厚手のもので、下半部を欠くが、もと22~23cm程度の高さがあったと思われる。上面は櫛様のものでつけられた刻目をもち、外表面は刷毛で整形され、内面は櫛で整形されている。

鉄製鋤先(第7図)は鉄の板金の両端を折返すタイプのもので、現存長5.1cm、巾10.9cmを測る。刃先は使用当時に破損したものらしく、一部分刃が折れ曲って残っている。

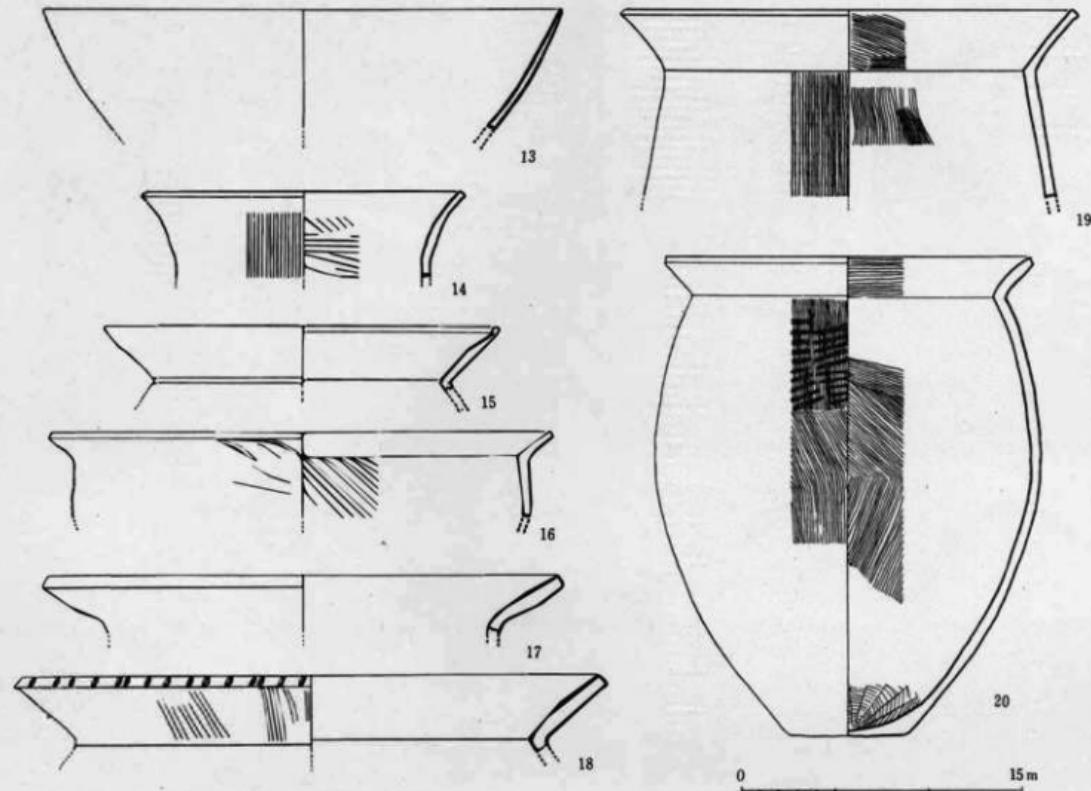
これらの出土遺物中、1・6・20及び鉄製鋤先は南西部方形ピット内の一括出土物である。

ところでこの豎穴の時期であるが、小形丸底壺や高杯、その他土器成形上の技術面から土師器の要素が強く、しかし一方で西新式等弥生最終末の土器も若干含まれていることから、土師器の製作が始められて間もない頃のものであったと考えるのが妥当だろう。

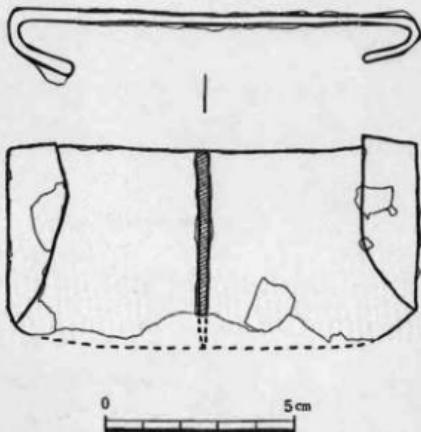
(貞方敏)



第5図 第1号竪穴土器実測図 (1)



第6図 第1号竪穴土器実測図(2)

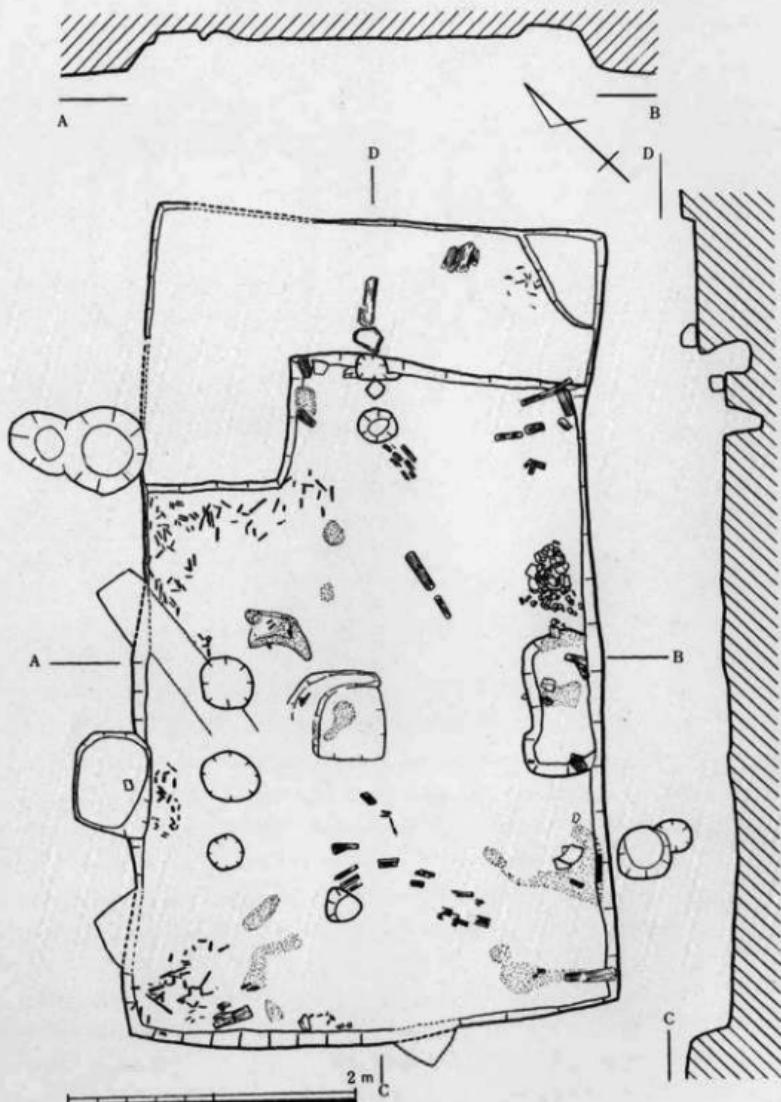


第7図 第1号竪穴鉄製鋤先実測図

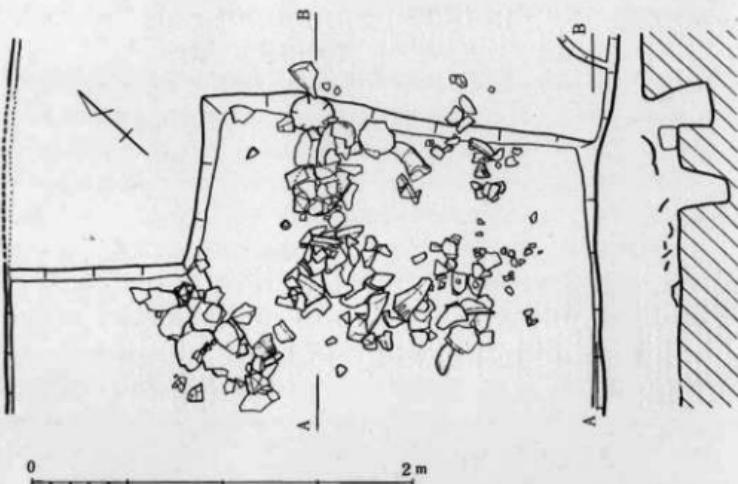
3. 第2号竪穴 (図版第三、四、第8・9図)

本竪穴は、主軸をN-41°-Eにとり、南北に長く長辺 5.8m、短辺 3.4mの長方形プランをなす。竪穴内北側に、巾1mで床面より20cm高いL字状のベット状遺構がある。壁の現存は 20~30cm で、ベット部分の壁は10cm前後である。灯跡は、竪穴中央にあり、一辺50cmの隅丸方形で浅い皿形の凹をなし、北・西側二辺には、カギ形に粘土を6cm程盛り上げ壁を造っている。焼土は少く、東面中央部が焼けている。ピットは、竪穴内外に大小10個検出されたが、明らかに竪穴に附属すると思われるものは、主軸線上に並ぶP₁~P₃である。柱穴の深さは、P₁(-17cm)・P₂(-24cm)・P₃(-19cm)である。P₁・P₂が棟持柱で、P₃はP₂の方向へ傾いていることから、P₂の副柱と考えられる。東壁中央にそって、長さ1m・巾50cm・深さ15cmの長方形のピットがあり、貯藏穴と考えることができる。

本跡も他の竪穴と同様に、上面を削平されている。部分的に後世の掘り込みが認められるが、竪穴全体を窺うには支障がない。竪穴内には、多くの土器が認められたが、ほぼ南半分は、発掘時は岩崎氏によってすでに遺物は取り上げられていた。床面上には多くの木炭・焼土・灰が存在し、竪穴コーナー付近床面には、禾本科系の植物と思われる炭化物が検出された。竪穴北半土器群について土製支脚が出土している。(木村幾多郎)



第8図 第2号竪穴実測図



第9図 第2号竪穴土器出土状態

出土遺物(第10~15図)

土器

壺(第10図-1, 2, 3, 5, 7, 8, 第11図-1, 2, 3, 4, 5, 7, 8)

第10図-1は外反する、厚い器壁の口縁部を有し、肩部以下は口縁部に比べて器壁はうすい。内外ともに櫛で調整しているが、外面の櫛目が内面のものより細い。口縁直下の部分は、外面は指でおさえ、そのあと横になでて櫛目を消す。内面も横になでて櫛目を消している。口縁と肩部の接合部直下の内面は指でおさえられており、この部分は櫛目はない。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含むが、焼成は堅緻である。

第10図-2は、肩部を欠くが、その全形を復原できる。口縁径22.4cm、器高(復原値)42cmを計る大形の壺である。上になるにつれ、器壁の分厚くなる、外反する口縁部をもち、口唇部は上下ともにひきのばされている。口唇部にはヘラでなめに刻目が施されている。肩部には断面三角形の凸帯を貼付け、凸帯下に先端を尖らした竹管で刺突したと思われる刻目が施されている。器壁は肩部へ下るにつれ薄くなり、又底部に近づくにつれしだいに分厚くなっていく。底部は平底を呈している。外面の調整は口縁から肩にかけてほぼ縦方向に櫛目が施され、櫛目方向と同じ方向にへらで沈線を施すところが部分的にある。凸帯の上下は横になでており、凸帯下はややこまかい刷毛で調整され、底部近くの刷毛は肩上部にくらべて粗い。内面は横方向の櫛で調整され、肩下部は指で整形され

とくに底部は指で強くおさえてあり、深くえぐられたようになっている。色調は茶褐色を呈し、口縁部内外、肩部以下の外面には丹塗りの痕跡が認められる。しかし、胎土に極細粒の砂を極端に多くふくみ、焼成も軟弱で、表面はさわると欠落するぐらいである。

第10図-3は、底部を若干消失するが完形品である。口縁径14.8cm、器高（復原値）21.2cmである。口縁は短かくやや外反し、口唇部は内外ともにひきのばしている。調整は内外ともに太目の櫛を用いている。外面は口縁直下はよこになでて櫛目を消している。口縁から肩にかけてはほぼ縱方向に施し、胴上部は横方向に施し、胴下部は右下りに斜行する。内面は口縁直下は横になでて横方向の櫛目が消されている。口縁部と肩部の接合部分は指でおさえている。底部近くは粘土をはりつけ、ななめになで、底部は指で調整した痕がのこる。底部は丸底になると思われる。色調は黄褐色を呈する。胎土は極少量の砂粒をふくむが良質のものであり、焼成は堅緻である。

第10図-5は、下半部を欠いているが、口縁径は21cmで、大形の壺である。口頭部は外反し、口唇部は櫛でぎっしりと刻目が施され、擬似繩文の感じを与える。外面の調整は口縁から肩部にかけて、斜行する櫛目のあとに、縱に櫛目を施す。この縱の櫛目は鋸歯文状を呈する。口頭部下端はよこになでてこれらの櫛目が消される。胴上半部は叩きのあと、櫛で調整するが、叩目が残っている。

胴下部（胴最大径部36.8cmあたりより下部）はたてにへらで削って整えている。内面は肩の接合部に粘土を貼りつけたあとがよくのこるが、この部分にはやや斜行する櫛目が施されており、それより下部はへらで荒っぽく削りながらも、方向をそろえているので整っている。色調は黄褐色を呈し、砂粒をほとんどふくまない良質の胎土を用い、焼成は堅緻である。

第10図-7は底部をのぞき殆んどその全形を復原できる。口縁径19.8cm、器高（復原値）29cmである。器壁は全体に厚い。外反する口頭部は櫛で調整し、その下端は横になでて櫛目を消している。肩部にはややあらい刷毛で調整した上に不整形な櫛目波状文を施し、これと同様の施文具で縱方向にゆるやかに波状を描くかのように櫛目が施された部分もある。胴中央部は櫛でほぼ縱方向に調整され、底部ちかくはややはそい刷毛で縱方向に調整している。内部は、櫛で調整したあとをなでて消しているが部分的に櫛目がのこっている。色調は赤みを帯びた黄褐色を呈し、胎土には砂粒をふくむが、焼成は良好である。

第10図-8は完形に復原でき、口縁径13.6cm、器高29.3cm、胴部最大径23.6cmを数える。口縁はわずかに外反し、胴部上半は器壁は厚く、下半はうすい。この厚薄の境が接合部分ともなっている。外面の調整はこの接合部附近を境にして上部は縱方向の櫛目が施され、下部はへらで削って調整している。内面は口頭部はほぼ横方向に櫛で調整が施され、肩部から接合部附近まで、へらで削ったあと斜めになでており、接合部以下はややあらい縱方向の刷毛で調整され、底部近くはなでて調整している。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒をふくまない良質のものを使用しており焼成は堅緻である。

第11図-1は口縁径10.6cm、器高9.9cmの不整形な手捏ねの小壺である。口縁はほぼ直行し、少しきびれて胴部へつづき、丸底を呈する。外面の調整は口縁部は横になで、口縁部下端より底部まではへらで削っている。内面口縁部分はあらい刷毛で調整し、それより下部は斜め方向になでて整形

している。色調は茶褐色を呈する。胎土には多量の砂粒をふくむが、焼成は堅緻である。

第II圖-2は、口縁部は外反し、口唇部は大きくひきのばされる。調整は内外ともに櫛で施され、外面は縱方向に櫛目がはしつけられている。口縁部に細い線が横に一条引かれている。内面は横方向に調整されているが、口縁部に乱れた波状文を思わせるようなところもある。胴部以下は非常に太目の櫛が使用されている。色調は茶褐色を呈し、砂粒をほとんどふくまない良質の胎土を使用しており焼成は堅くて良好である。

第II圖-3は、外反する口縁端にへら施文の刻目をもつてある。器壁は肩部から胴にかけて分厚くなっている。外面は口縁から肩部にかけてよこになで、その下はやや細い斜行する刷毛目が施されている。内部は肩部を指でおさえたあと、口縁部から肩部にかけて横になでて調整されているが、それより以下はへら削りと思われるが調整は悪くでこぼこしている。色調は赤褐色を呈する。胎土には多量の砂粒を含むが焼成は悪くない。

第II圖-4は肩部に貼付の刻目凸帯を有する壺であるが、口縁部を欠く、凸帯の上下は横になでて櫛目が消されている。凸帯下には縱方向に短い線がへらで不均等な間隔をもって施されている。内面は太目の櫛で横方向に調整されている。黄褐色を呈する土器で砂粒を多量に含むが焼成は堅緻である。

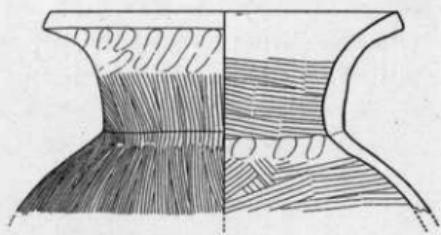
第II圖-5は口縁部、底部を欠き全体の器形はわからないが、台付の壺になる可能性が強い。口縁と肩の接合部直下の肩部に横方向9本の櫛描沈線、その下に6本の櫛目波状文が施されている。胴下部はへらで研磨している。内面は肩部は横になで、その下はほぼ横方向に櫛で調整している。色調は黄褐色を呈し、胎土も良く、焼成も良好である。

第II圖-7、8はともに壺の底部と考えられる。7は底部は若干平底状の感じを残すがほぼ丸底といえる。内外ともに丹塗りの痕跡がある。外はへらでけずり、内面は太目の櫛で調整されている。色調は黄色を呈し、胎土には砂粒をふくみ、焼成はあまりよくない。

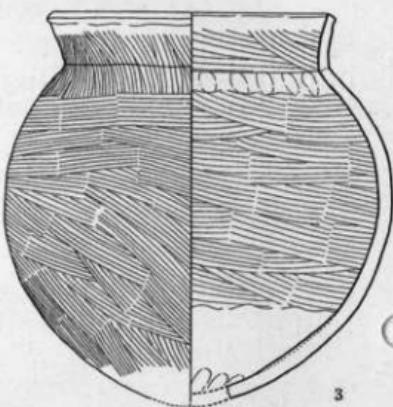
8は平底を呈し、内に丹塗りの痕跡が認められる。外面はやや粗い刷毛が底にまで全面にほどこされている。内面はへらで削ったあとに太目の櫛で調整している。色調は赤黄色を呈する。胎土は砂粒をほとんどふくまない良質のもので、焼成は良好である。

図 (第10圖-4、6、第11圖-6)

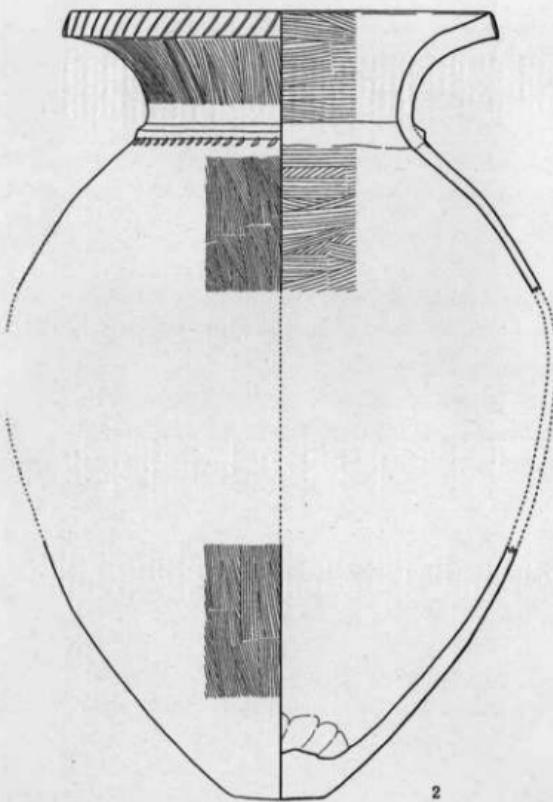
第10圖-4はほぼ完形に復原できる。口縁径17.6cm、器高(復原値)32cmを計り、胴の張りはほとんどなく全体に細長い器形をしている。口唇部下端はわずかにひきのばされており、口縁部から肩部にかけては櫛で調整され、その下部(胴上部)は叩きが消されずにそのまま残っている。それより下部(胴部の半程度にあたる)はへらで削って整形される。内面の調整は口縁部は横方向に櫛目がほどこされ、肩部と底部は指で抑えて整形した痕跡がある。胴内面は櫛で調整の後になでて櫛目を消しており、部分的に櫛目のあとがこっている。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒をふくまない良質の粘土を用いており、焼成は堅緻である。



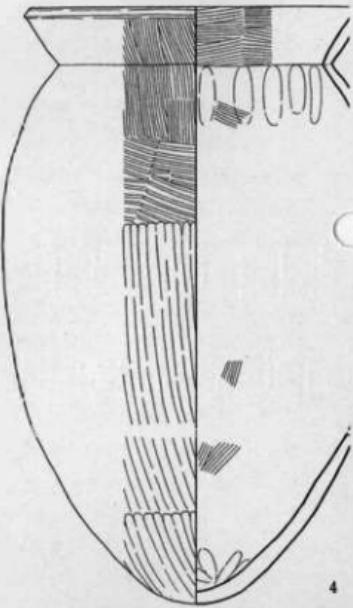
1



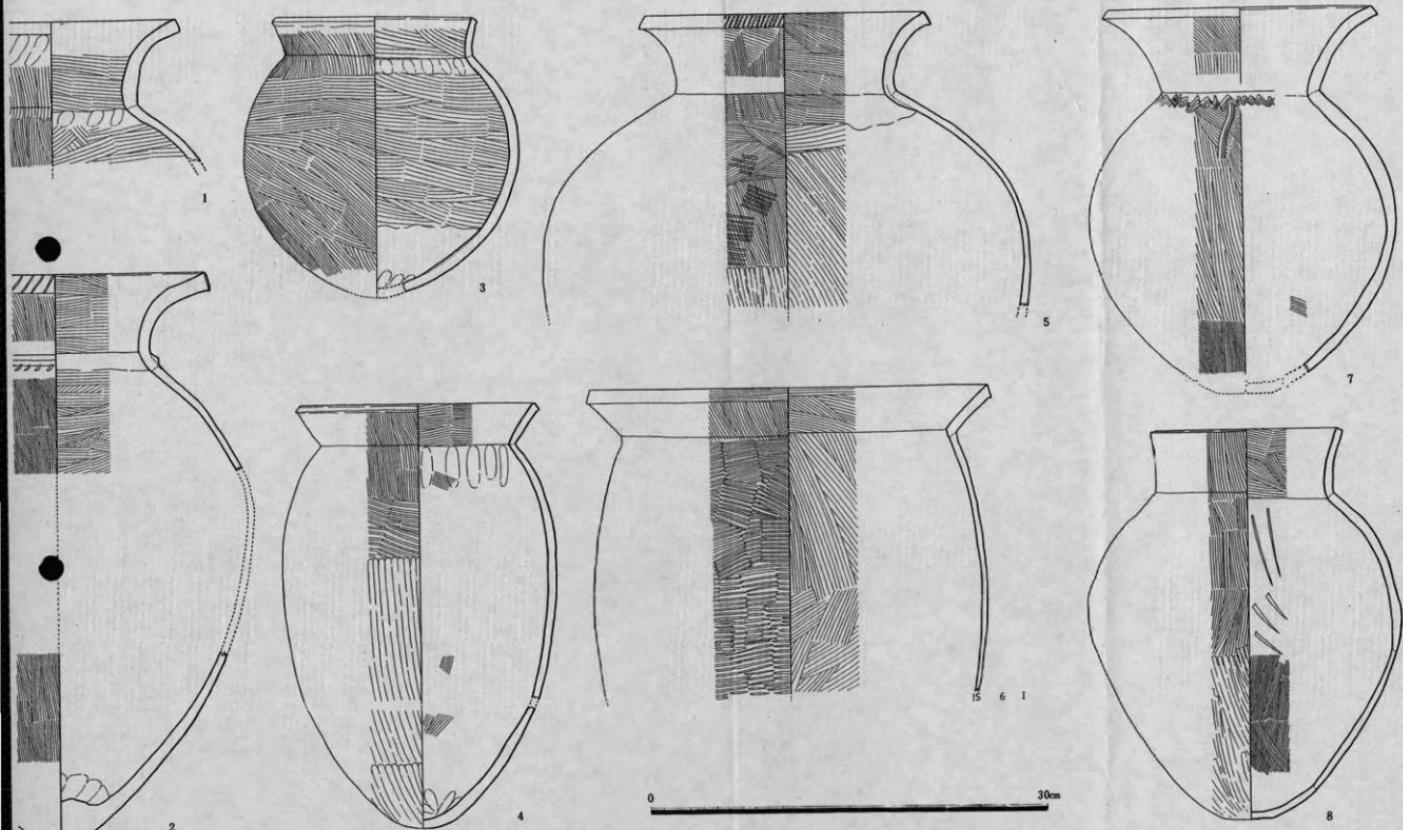
3



2

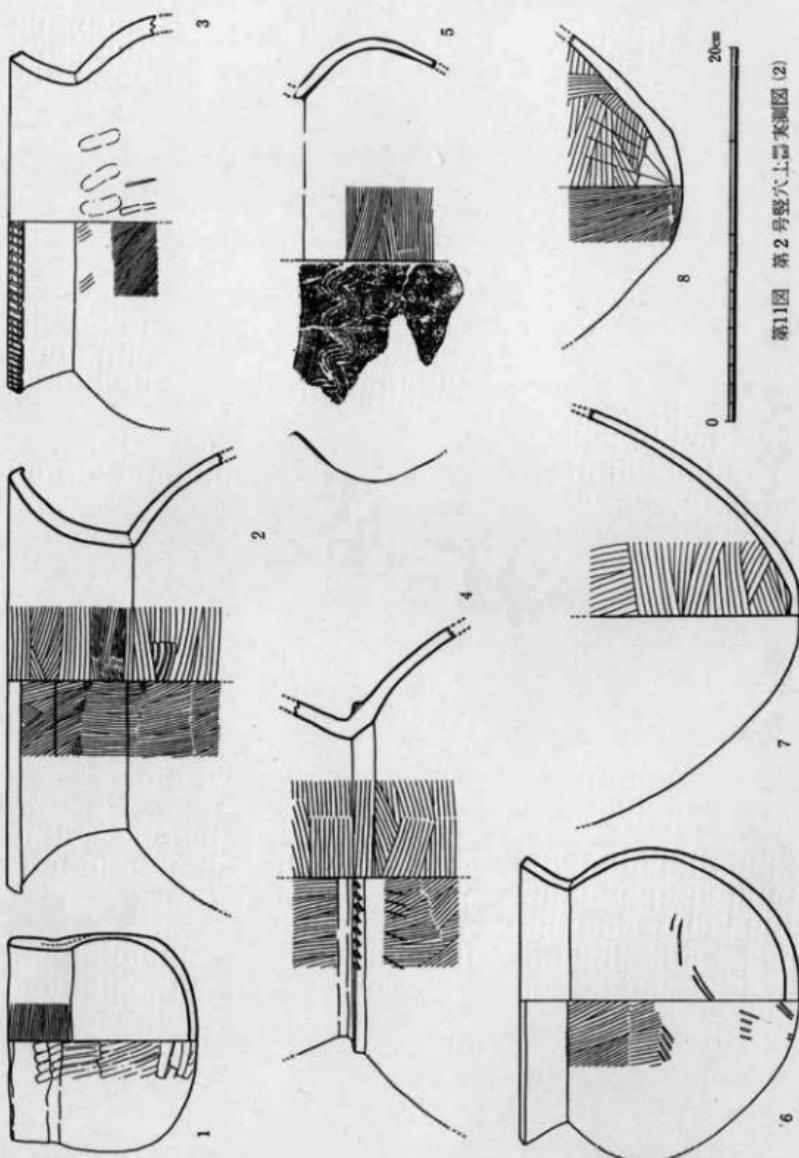


4



第10图 第2号整穴土器实测图(1)

第11圖 第2號豎穴上器測圖(2)



第10図-6は大形の甕であるが、全体として器壁が非常にうすい。外面の調整は、口唇部には横方向に、口縁部には斜行する櫛目が施される。肩部より以下は全面に叩き目が残されており、底部までつづくものと思われる。内面は、口縁部はほぼ横方向に、肩部以下は斜行する櫛目が施されている。色調は赤褐色を呈し胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。

第11図-6は完形品である。口縁径は14.6cmで、胴最大径は16.9cmとやや張るが、器高は14.3cmと低く、鉢ともいえる。胴上部は太目の櫛で調整し、下部は叩き整形の後にへらで削って調整しているが部分的に叩き目が残る。内面はへらで削って調整している。色調は暗い黄褐色を呈し、胎土の粘土は良質のものを使用しており焼成は良好である。

高坏(第12図-1, 2, 3, 8, 9)、台付壺(第12図-4)、台付鉢(第12図-5, 6, 7, 10)

第12図-1はほぼ直立する口縁部をもつ高坏の坏部である。口唇部はへらで削って整形されている。外面は櫛で調整されるが、口縁部より少し下った部分をへらで横に削っている。内面は櫛で調整した後に全面をへらで削って整えているが、一部に櫛目が残る。色調は赤褐色を呈し、胎土には水こし粘土を用いており、焼成は良好である。

第12図-2は朝顔形に開き、接合部で内外ともに段をつくる高坏の坏部である。口唇部に一条の沈線が廻っている。外面は細かい櫛で調整した後に横になでて消しているが、櫛目はよく残っている。内面は上部は横になでて調整し、坏下部は櫛をなでて消している。接合部の段をなす部分は小さいへらで削って整形している。接合部は上下をきれいに組み合してつないでいる。

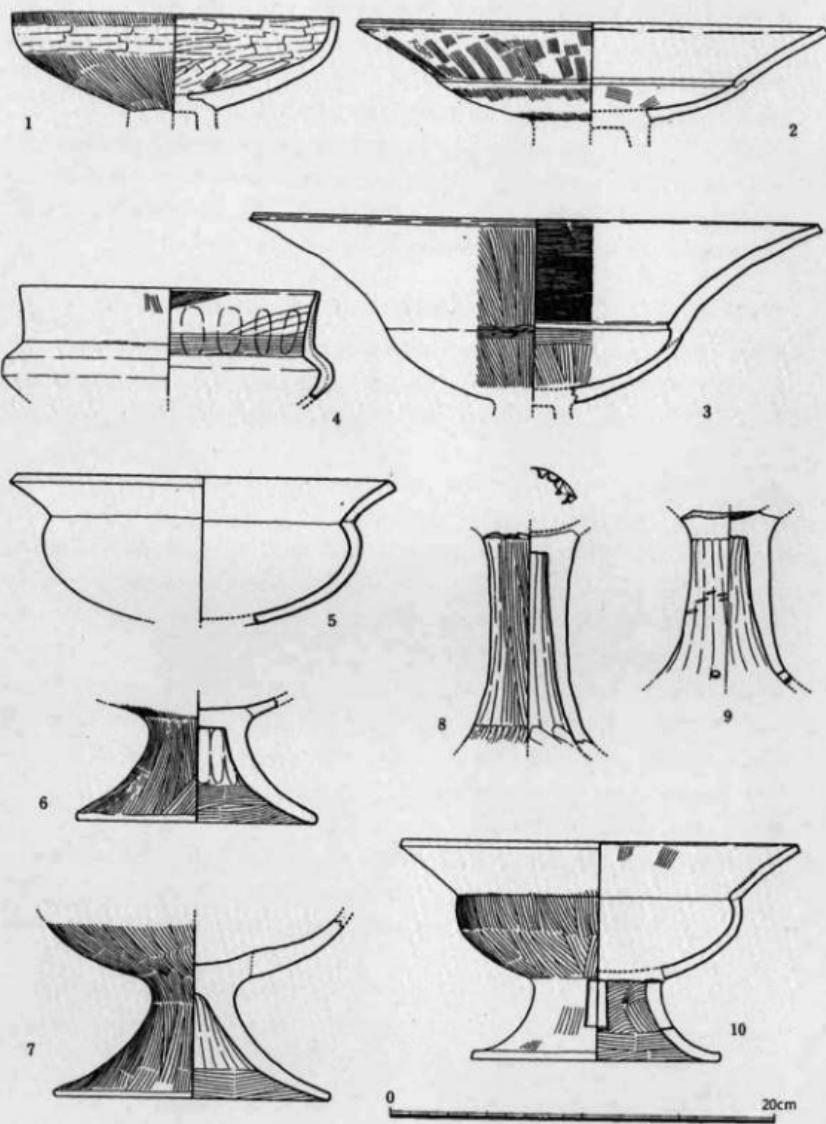
口縁に丹塗りの痕跡があるが全面に丹が塗られていたかどうかはわからない。色調は黄褐色を呈し、胎土には水こし粘土を用い、焼成は良好である。

第12図-3は、2より大形で、口縁はゆるやかに外弯し、口唇部は両端ともに引きのばしている。外面は櫛で調整し、接合部は小さいへらで横に削って整形し、段はあまり明瞭でない。内面は段が明瞭で、上部は細かい刷毛で横に調整し、下部は櫛で調整している。色調は茶褐色を呈し、胎土には細い砂粒をふくんでいる。焼成は良好である。

第12図-8, 9は高坏の脚部である。

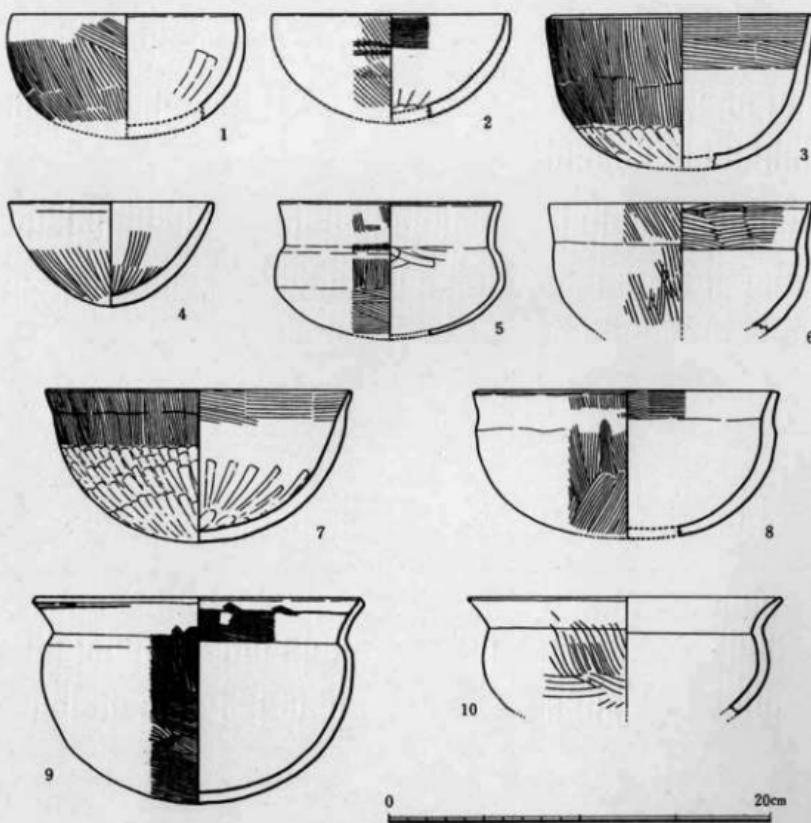
8は外面はへらで縱方向に整形したあとに櫛で調整する。下部は小さなへらで削って整えている。内面はへらで横に削り、下部は斜めに削って整形している。坏部との接合部で破損しているが、接合のためにつけられた凹凸(柄穴)が明瞭である。色調は赤褐色を呈し、胎土は良質のものを用い、焼成は良好である。

9の外面は叩き整形のあとへらで縱に削って整えているが、一部に叩き目が残っている。内面はしづらのあとが残っている。円形の小さな透穴が3ヶ所つけられている。坏部内面は坏底部にみるとぎり櫛で調整している。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は若干砂粒をふくむ水こし粘土を使用し、焼成は良好である。



第12図 第2号竪穴土器実測図(3)

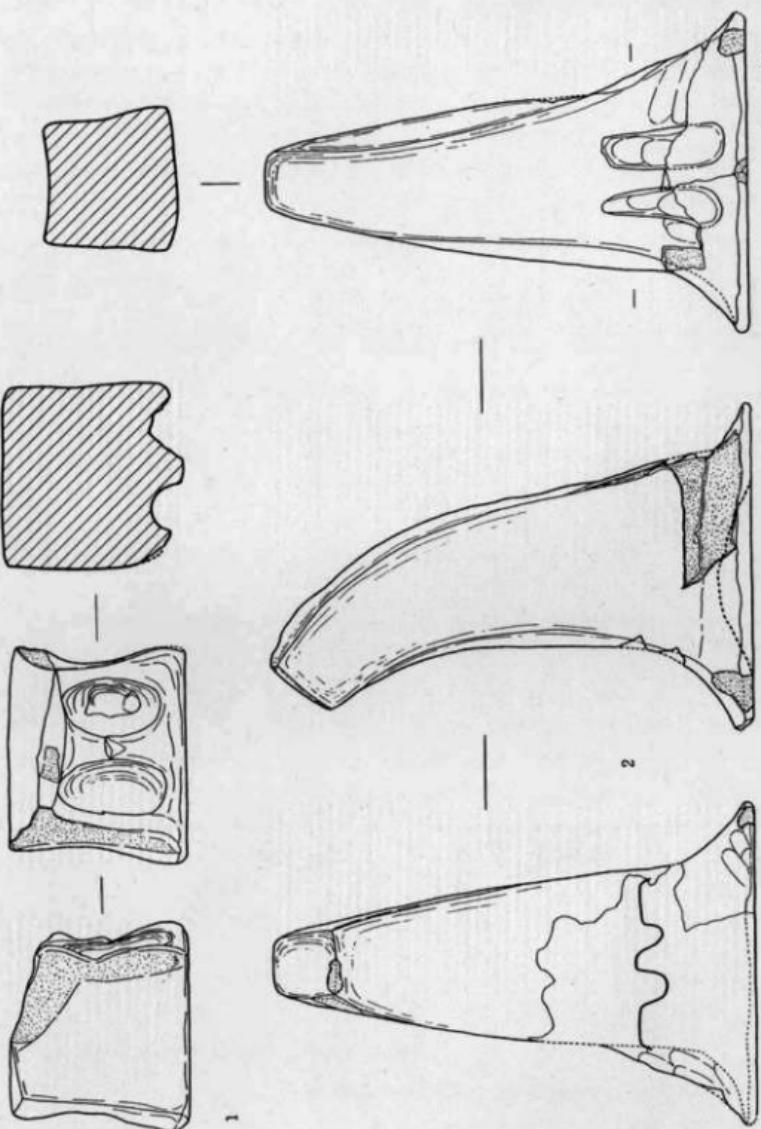
第12図—4は脚がつく可能性が強いものとして台付壺でとりあつかう。非常に良質の水こし粘土を用い焼成も堅緻で、整形もていねいにしあげられている。口縁はやや外反し、浅い胴をもつ。外面は櫛で調整したのちなでて櫛目を消すが部分的に残っている。肩から胴にかけてはヘラで整形し、明瞭に棱がつく、そのあと櫛で調整するがなでできれいに消している。胴下半部はヘラで削っているだけである。口縁部内面は指でおさえたのち上半は細い刷毛で斜めに、下半は櫛ではぼ横方向に調整したのち、中間をなでて、刷毛、櫛目を消している。肩部は横になでて調整している。色調はあかるい黄褐色を呈している。



第13図 第2号竪穴土器実測図(4)

20mm
0

第14圖 第2号竪穴土製支脚実測図



第12図—6、7は台付鉢（塊）の脚部である。

6は、脚部上端をヘラで整形した後に櫛で調整している。内面は指でおさえて整形し、下部は横方向に櫛で調整する鉢内面には丹塗りの痕跡がある。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒をふくみ、焼成はあまりよくない。上は鉢になるか、塊になるかわからない。

7は、上は塊になると思われる。外面の調整は櫛で施される。脚部内面はヘラで削り、下部は太目の櫛で調整している。色調は塊の部分は黄褐色を呈するが脚部は赤褐色を呈する。胎土には砂粒をふくみ、焼成は良好である。

第12図—10は、ほぼ完形に復原できる台付鉢である。鉢口縁部は朝顔形に開き、口唇直下は両端ともにおさえている。外面の口縁部は横になでて調整し、胴部は櫛で調整する。脚部は櫛で調整したあとに横になでて櫛目を消す。内面の口縁部は櫛で調整の後によこになでて消しているが櫛目が部分的に残っている。脚部内面は櫛で調整を施している。脚部には鉢部との接合部直下よりほぼ脚の上半に長方形の透穴がつけられている。3ヶ所であろうと思われる。口縁部、脚部に丹ぬりの痕跡が認められるが全面に塗られていたかどうかは不明である。色調は部分的には黄褐色を呈するが、全体として赤桃色を呈し、良質の胎土を用いて、焼成は良好である。

第12図—5は鉢形土器であるが、台付鉢になる可能性が強い。内外ともに横なでて調整している。色調は暗灰褐色を呈し、細い砂粒を多くふくむ胎土を用いている。焼成はあまりよくない。

塊（第13図—1、2、3、4、6、7）

鉢（第13図—5、8、9、10）

塊は第13図に示すように多様な器形が存在する。1はわずかに口縁部が内寄する半球形をなす。外面は口縁直下をよこになでて櫛目を消しているが、全面にやや斜行する櫛目が施され、内面の口縁直下はよこになでており、ヘラで削った部分もある。色調は茶褐色を呈するが、外面に丹ぬりの痕跡がある。胎土は太い砂粒をふくみ、焼成は堅緻である。

2は口縁はうすくなり直立し、半球形をなす塊である。外面は櫛で調整するが、口縁部と底部はよこになでて櫛目を消している。内面の口縁部は横方向に細かい刷毛で調整し、底部はヘラで整形している。色調は赤褐色を呈し、胎土には細い砂粒を混入しており、焼成は良好である。

3は、口縁部がわずかに外に開き、口唇部は棱が明瞭につく。外面は櫛で調整するが底部近くはヘラで削って整形している。内面の口縁部は横方向に櫛で調整し、それより以下はなでて調整している。色調は赤褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒をふくみ、焼成は堅緻である。

4は、外面の上半部は横になでて調整し、下半部は太目の櫛で調整している。内面も櫛で調整するが上の手は横になでて櫛目を消すが、部分的に櫛目が残る。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒をふくみ、焼成はよくない。

6は、わずかに外反し、うすくなる口縁部をもつ。外面は櫛で調整するが、口縁部を横になでている。内面は口縁部に横方向の櫛目が施される。色調は暗褐色を呈し、胎土には細かい砂粒をふくみ、焼成は良好である。

7は、わずかに外反するうすい口縁をもつ。外面の上部手は縦方向の櫛目が施され、それより下は

ヘラで削って整形している。内面の口縁部は横方向に櫛で調整し、底部は指でおさえ、下半部はヘラで削った後に横になでて調整している。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒をふくむ。焼成は堅緻である。

5は便宜上鉢としたが、小形壺といえるものである。口縁部はわずかに外反し、胴部は口縁径よりわずかに広がり、丸底を呈する。外面は口縁から胴上半部にかけては縱方向の刷毛で調整した後、横になでているが刷毛目はよく残っている。胴下半部は横方向に櫛で調整している。内面は肩部をヘラで横に削っているが、との部分は横になでて調整する。器壁は全体として非常にうすい。

色調は黄褐色を呈し、胎土はわずかに砂粒をふくむが良質のものを使用し、焼成は良好である。

8は外反する短い口縁部をもつ。底は丸底になると思われる。外面はほぼ縱方向に櫛で調整するが口縁下部のくびれ部は横になでて櫛目をけしている。内面は、口縁部を横方向に櫛で調整し、胴以下はなでて調整している。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒をふくみ、焼成は良好である。

9は、完形品で、外反する短い口縁部をもっている。口唇直下の内面はおさえている。外面の口縁部は横になでて調整し、肩から胴上部は細い刷毛を縱方向に施し、胴下半部は横方向に櫛で調整している。内面は、口縁部をやや粗い刷毛で斜めに調整した後に横になでているが刷毛目はよく残っている。肩部以下は刷毛で調整後になでて刷毛目を消している。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒をふくみ胎土は良好である。

10は外反する口縁部をもつ。外面は櫛で調整するが胴下半部は横になでて櫛目を消している。

内面は口縁部は横になで、肩部以下は斜めになでている。色調は暗褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。

支 脚 (第14図—1, 2)

1は前面が高く(9.3cm)、後面が低く(8cm程度)、中が凹むが、全体としてはほぼ立方体を呈する。後面には大きく指でえぐりとった二つの穴をつくり、つまみとしている。黄褐色を呈し、胎土には砂粒をふくまない。性質上火をねにうけているのでもろくなっている。調整は全面に指で行われているが、全面にわら状の痕跡がのこっている。この種の支脚は完形品はこれだけであるが、あと2個体分ある。

2は前面下部を大きく欠失し、又下部は表面の欠落が多いが、一応完形品である。底部は一辺17cm程度の正方形をなし、上になるにしたがい細くなり、鳥帽子形に傾斜する。器高は25.1cmである。断面は整っていないがほぼ正方形を呈する。底部は上げ底で、指で粗く整形しており、又底部には一面にわら状のものの圧痕がある。下部は特に火をうけているようで欠損がはなはだしく、この種の支脚はこの他に4個体分、存在するが、すべて下部を大きく破損するか、上半部だけ残存している。後面には大きく指でえぐりとった穴が2つあり、つまみをつくっている。色調は黄色を呈しているが、下部は焼けて赤茶けている。他のものも黄色を呈するものがあり、又赤褐色を呈しているものもある。

以上2号竪穴出土上の上器の説明を加えてきたが、第10図—7、第11図—5の櫛目波状文をもつ壺形

土器、又、大分県安国寺遺跡に類例が出土している第12図—1の高環などに示されるように、東九州系統の土器の影響を強く受けているものが、この竪穴跡には存在する。

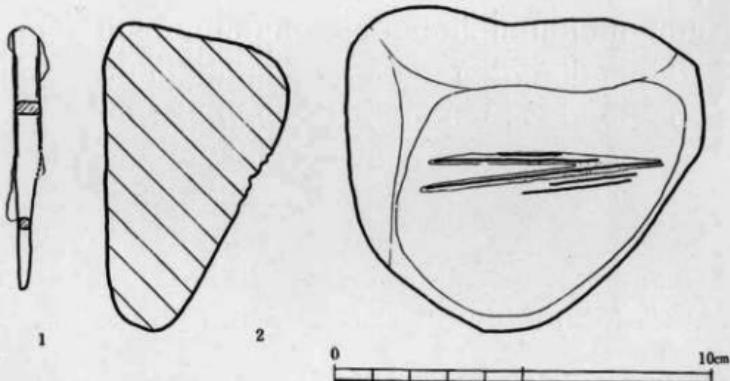
時期は全体として弥生終末期を示すが、なかに第10図—3、第11図—6、第12図—1・4、第13図—5などのように土師器的様相を多分にもつ土器も出現しつつある時期といえる。（橋口達也）

鉄 器（第15図—1）

竪穴内貯藏穴の西南部に近接して検出されたものである。鉄器の基部残欠で残存部の長さは7cmである。巾7mm・厚さ3mmの断面長方形の基部が、先端で断面円形になりすぼまっている。

石 器（第15図—2）

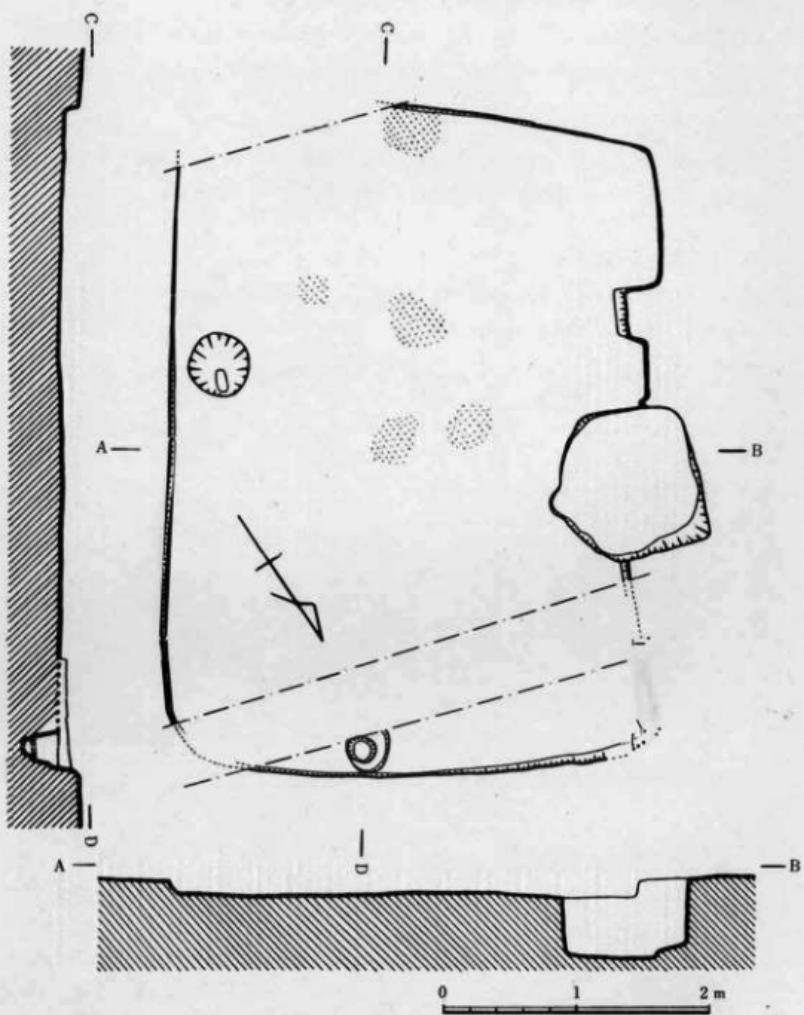
安山岩製で、ほぼ一辺8cmの三角形の平面を2面もち、片方の面上には金属でつけたと思われる數条の溝がある。砥石としての用途も考えられる。（木村幾多郎）



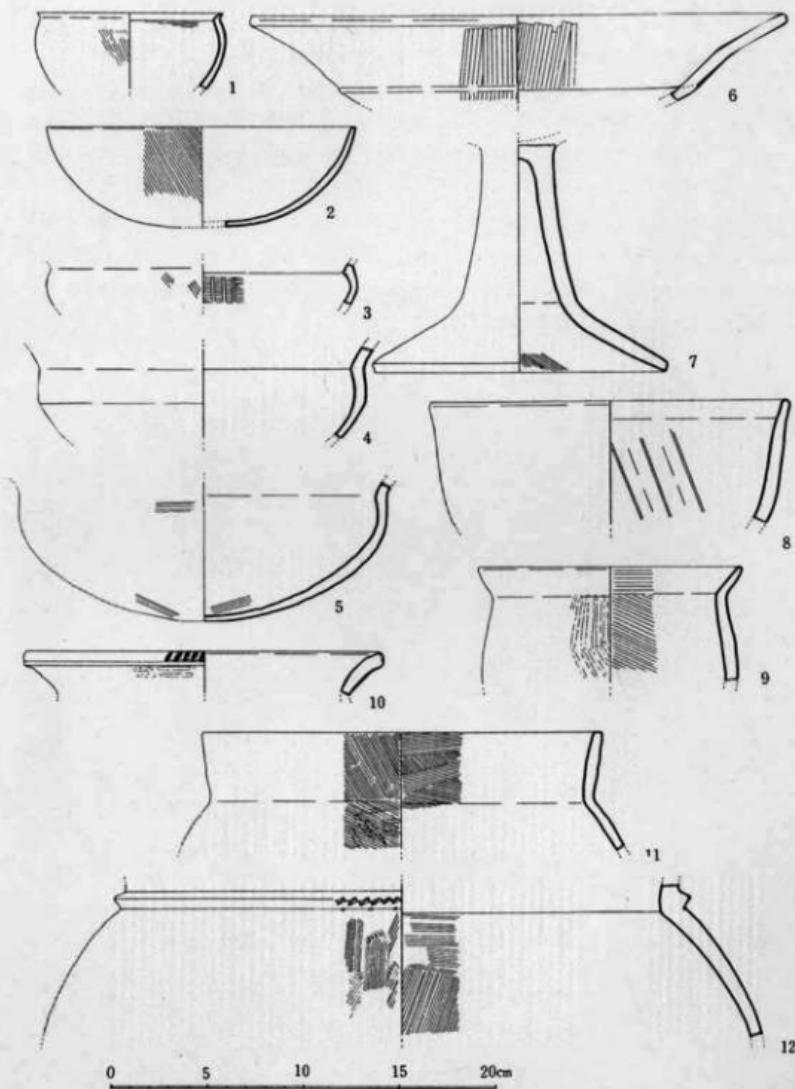
第15図 第2号竪穴鉄器（1）、石器（2）実測図

4. 第3号竪穴（図版第五、第16図）

竪穴は長辺約5.1mの長方形プランを呈し、主軸の方向はN-34°-Eである。表面の削平度がひどいために遺物の残存状態は極めて悪い。壁はほぼ完好的な状態で残っているが西側では、後世ブドウ園となった際に作られたとみられる約1m平方、深さ約0.5mの穴が二ヶ所壁を切って掘られていた。その穴の底部からも土器片は認められているが後の流れ込みであろう。竪穴内部にはベッド状の遺構は認められず、柱穴とみられるピットも北側中央部のもの1個を除いては確認されていない。また数ヶ所に炭火物の散布がみられるが炉跡と思われる焼けた部分は確かめられていない。竪穴の北側と南側で一部後世の溝によって切られている。



第16図 第3号竪穴実測図



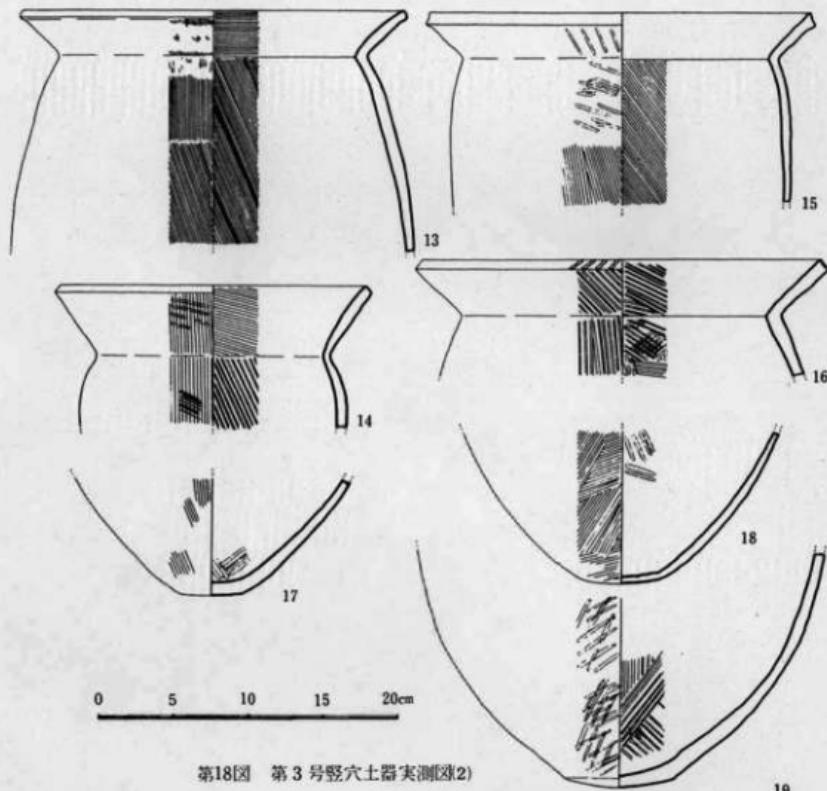
第17図 第3号竪穴土器実測図(1)

出 土 遺 物

第3号竪穴にともなう土器群には鉢・高壺・壺・甕などが出土している。

鉢形土器には口縁部が外反するもの（1・3・4・5）と外反しないもの（2・8）がある。色調は黄褐色ないし赤褐色を呈しているが、(1)のみ細粒を含まない精良な胎土を使用している点で異なっている。手法的にはほとんどの場合横方向または縦方向の刷毛目が認められ、なかには体部をヘラ削りしたもの（4・8）もある。

高壺形土器（6・7）は脚部は3個体分の出土があったが壺部は1点のみである。壺部・脚部ともに入念な縦方向の細いヘラ削りが施されており、とくに脚部ではほとんど平滑に仕上げられている。脚部内面の屈曲部にはわずかに核が認められ壺部内面には若干斜方向の刷毛目が観察される。色調は淡黄色を呈し精選された粘土を使用している。



第18図 第3号竪穴土器実測図(2)

壺形土器は直立ぎみの口縁部をもつ小形のもの（11）と、口縁部を欠失しているが厚手大形のもの（12）とがある。大形のものには胴部と口縁部との境に突帯をもうけこれに斜の刻目を入れている。どちらの場合も叩きの上を刷毛で調整している。（12）ではさらにその上を撫でによって仕上げている。

變形土器は、ほとんどの場合「く」字形に屈曲する口縁をそなえており小形のもの（9・10）と大形のもの（13-16）がある。（10・16）にみられるように口唇に刻目を有するものもあるが数は多くない。形の上からは、（14）では胴部最大径が高く位置しており、また口縁部の形態では（4）のようにやや内弯ぎみで上端が丸くつくられているものなど若干の差異がみられる。口縁部・体部ともにほとんどの場合叩きが認められその上を刷毛あるいは櫛（14-16）によって調整されている。暗黄褐色を呈するものが多く、すべて胎土に砂粒を含む。

底部は安定の非常に悪いもの（19）もあるが、すべて平底の系列に入れられるべきものである。叩きによる成形のあとは胴上部ほど、入念な調整はほどこされていないが、内面には撫でが顕著である。

以上からみて、第3号竪穴の年代を考察するならば、鉢形土器・高環形土器・變形土器の形態において第2号竪穴出土土器群と非常に近い関係にあることが推測されるが、その土器群に含まれる組み合せからみて、第3号竪穴では長く発達した口頭部をもつ鉢形土器、および丸底を呈する壺を有しない点からみて第2号竪穴よりは古い様相を示していると思われる。どちらの竪穴からも古式土師器の様式とされる小形の土器群の存在は知られておらず、したがって弥生時代最終末に位置するとみられる。（真野和夫）

5. 第4・5・9号竪穴

(A) 4号竪穴（図版第五、第19図）

竪穴、北壁で長さ3m、竪穴の南は5号竪穴と重複するため南北の長さ不明であるが方形プランを呈するようである。地山よりの深さは30cm、壁面や床面は小さな凹凸が多数あり住居跡とは認めがたい。住居以外の目的のために作ったものと思われる。竪穴内部やその周辺に柱穴はみられなかった。

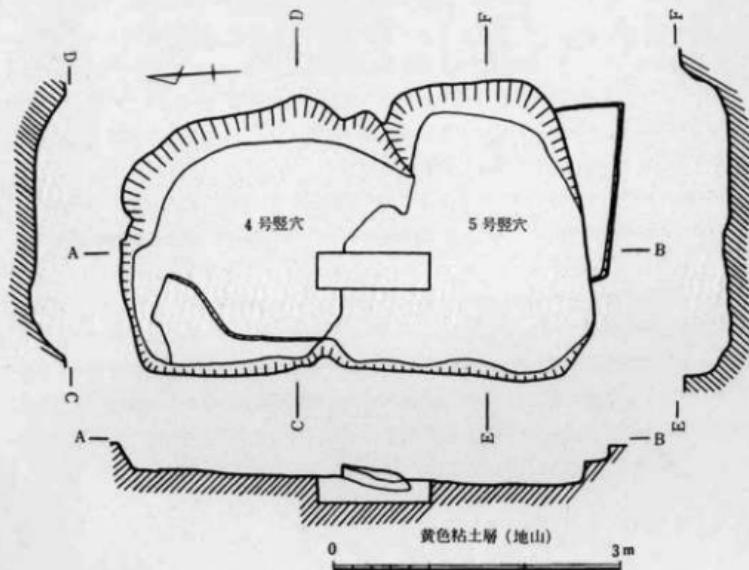
出土遺物（第20図）

この竪穴につく遺物としては須恵器と土師器がある。須恵器¹¹⁻¹²は口縁部の小破片であるが復原径11.6cmで焼成の堅緻なものである。土師器には壺（1-3）と甕（4）とがある。壺は直径約12cm、高さ約3cmで器壁は磨研され焼成良好なものである。甕は口縁部の破片で直径15.4cm、外部に煤が附着している。

その外に混入したものに弥生式終末期の土器がある。¹⁵は広口壺の胴部であり、¹⁶は器台である。表面は刷毛目仕上げの上に叩き目が見られ、内面及び底面は櫛目仕上げである。

(B) 5号竪穴(図版第五、第19図)

9号竪穴の大部分を破壊して作られたもので、この竪穴の北側は4号竪穴と重複している。竪穴の構造は4号竪穴と同様である。遺物は土師器が、南壁では9号住居跡に属するものと思われる弥生式末期の支脚が出土した。



第19図 第4・5号竪穴 9号竪穴実測図

出土遺物(第20図)

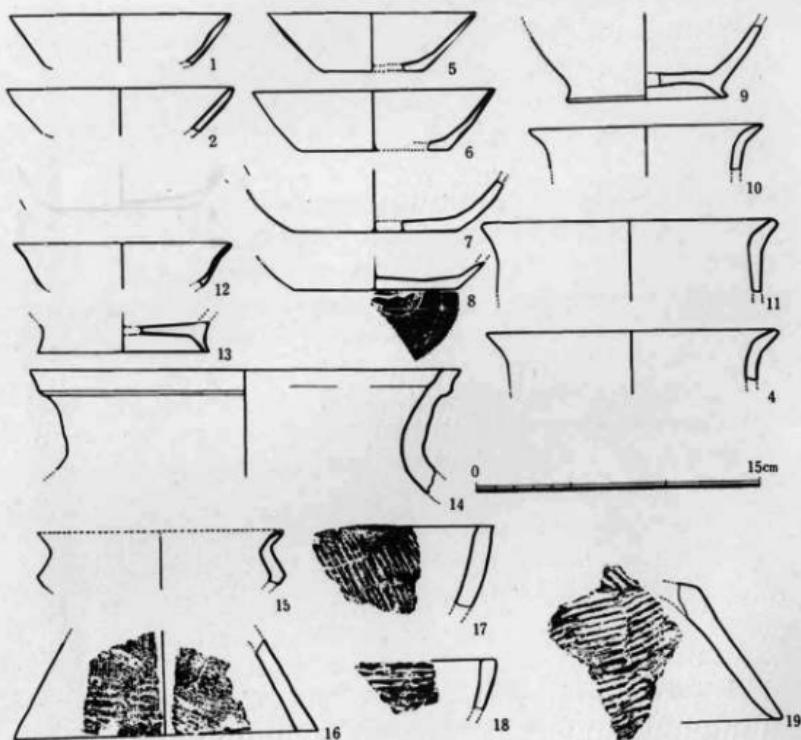
この竪穴に属する遺物は土師器の环、塊、甕がある。环(5~8)は口径12cm高さ3.5cm前後のものと、これよりやや大型のものと二種類がある。甕(9)は高台を有する底径8.6cmのもので口縁部を欠く、甕(10、11)いづれも口縁部の破片で「く」字状に外反し器壁には煤が附着している。

混入の弥生式土器の支脚(12)は全面に叩きが施され、叩きにより稜が出来多角形をなす。

岩崎氏の調査された資料に弥生式土器と須恵器がある。弥生式土器は鉢形のもので(13)には煤が、(14)は叩き目がみられる。須恵器には甕と塊があり甕(14)は焼成堅緻であり、塊は高台の部分で淡褐色の焼成のやわらかいものである。弥生式土器は9号竪穴に、須恵器は4或は5号竪穴に属するものと思われる。

4、5号竪穴は出土遺物より奈良期のものであり4、5号竪穴の前後関係は、その接する中央部に入れたトレンチにより、先づ4号竪穴が統いて5号竪穴が掘られた事が判明した。両竪穴の遺物は

同じ型式であるので4号竪穴が破壊されたあとあまり年代を隔てて5号竪穴が作られたようである。



第20図 第4・5・9号竪穴土器実測図

(1~4, 12, 15, 16, 4号竪穴出土 5~11, 19竪穴出土 13, 14, 17, 18調査前の資料)

(C) 第9号竪穴 (図版第五、第19図)

5号竪穴に大部分をきりとられてしまって南壁と東壁の一部分が残っているに過ぎない。南壁の長さは1.9m、地山面より床面までの深さは28cmで、竪穴内及び周辺に柱穴は認められなかった。

出土遺物

弥生式土器の胴部破片が少量出土したが器形のわかるものは無かった。又土師器の壺の底部片があったが、これは5号竪穴に伴うものが9号竪穴をきりとった時に混入したものであろう。第20図15~19の土器は恐らくこの竪穴に伴うものであろう。竪穴の床面上より長さ2.9cm、径0.5cmの鉄製品が出土したが用途不明である。(黒野肇)

6. 第10号竪穴(図版第六、第21図)

長辺約6m、短辺約4mの長方形プランを呈する。地下げのため上部がカットされたため壁高は不明であるが、残存する高さは10cm内外である。柱穴らしきものが2個ある。Pit 3は深さ約18cm、Pit 4は約48cmである。Pit 2は内部につまつた土の状態から後世の掘込みと考えられる。また北隅ちかく貯藏穴とみられる約60cm四方、深さ約30cmの方形の掘込みがある。床面の保存状態は悪く、全面にわたって炭化物でよごされ、各所に焼けた痕跡が残っており、火災にあった可能性も考えられる。

西南辺から西北辺にかけて、幅約1mのL字状の部分は、粘土ブロックがつまっており、若干の小片は出るが土器はほとんど出土しなかった。この部分に向って上昇する傾斜をもつ焼土も残っており、この部分には、張りつけによるベッド状造構があつたらしいが、地下げのおり上面がカットされており、確認することはできなかった。

11号竪穴の壁が一部10号竪穴の区域内に観察された。即ち10号竪穴が放棄され、埋没した後に11号の竪穴が一部10号をカットして掘られたと思われる。また、5号、9号竪穴も10号の西北辺を切って掘りこまれており10号より新しいことができる。

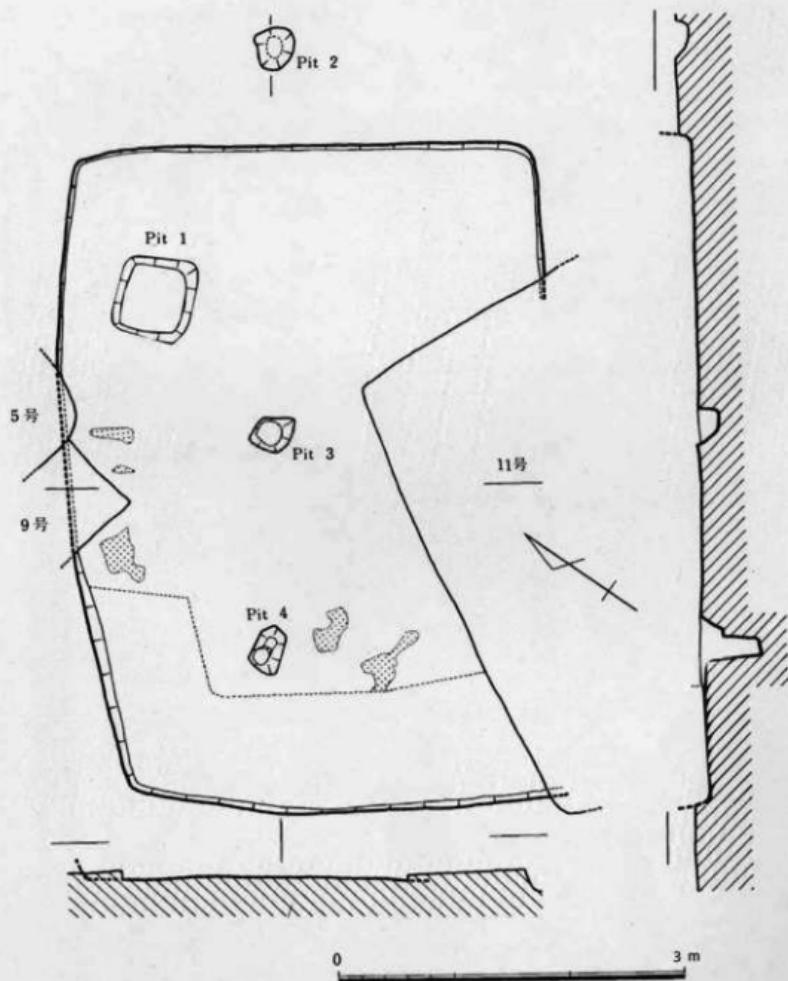
(岩崎二郎)

出土遺物

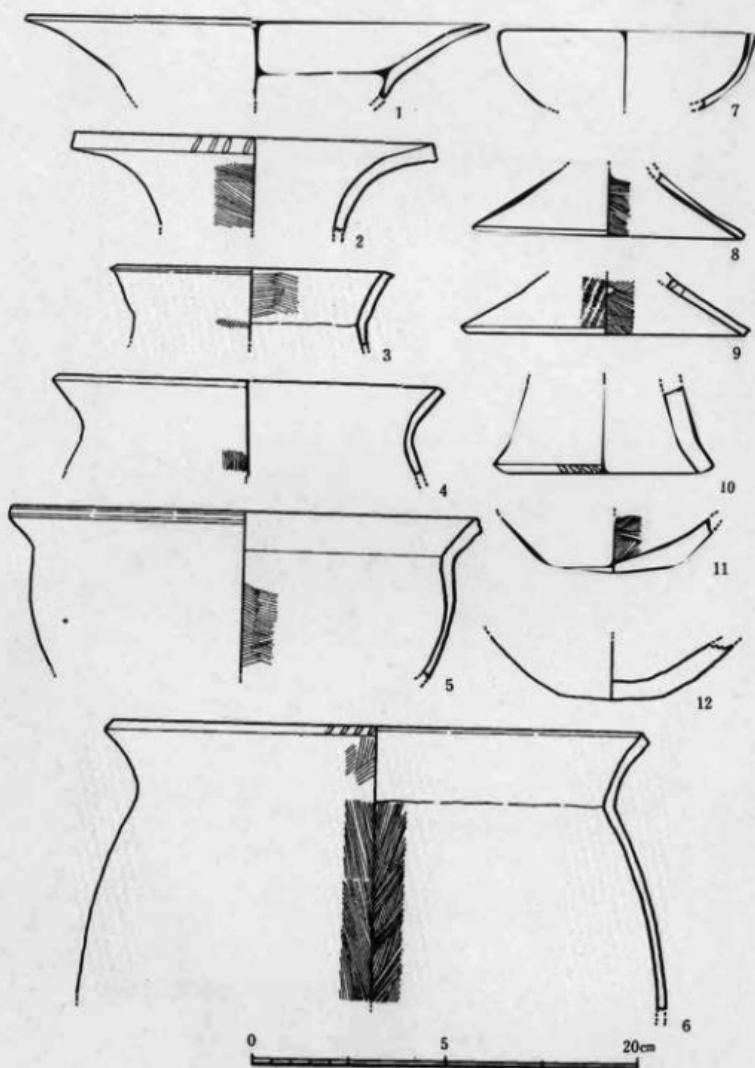
土器(第22図、第23図13)

10号竪穴は床面近くまでカットを受けていたため、完好的な土器を得ることはできなかった。しかし、いずれも床面に接していたため、竪穴の時期を決定する資料となる。

出土の土器には壺、甕、高環、鉢、台付鉢、器台がある。壺は口縁部が頸部にくらべて開き、口縁端に櫛で刻み目を入れるもの(2)と、頸部がゆるやかに立ちあがるもの(3)の二種がある。いずれも内面を刷毛、外面を櫛で調整している。甕は口縁端に刻みをもつもの(6)と、刻みのないもの(4)とがあるが前者が多い。(4)は内面を櫛で調整し、さらに刷毛で調整している。高環1)はかなり精選された胎土を使っているが、器表の調整はかなり粗い。接合部には明顯な段がつかない。鉢は「く」の字状に外反する口縁をもつもの(5)と、底部から抜がったままのもの(7)とがある。(5)は内面を櫛で調整している。台付鉢(8、9)は脚部のみ出土している。反りをほとんど持たない直線的な抜がりをもつ。(9)は横方向の櫛目調整の上を、さらにヘラで消して一種の文様をなしている。孔を有するが、小片のため個数はわからない。器台10)は底部に刻みをもつ例がある。底部(11、12、第23図13)



第21図 第10号竪穴実測図



第22図 第10号竪穴土器実測図 (1)

はいずれも痕跡的な平底を有しているもののむしろ丸底に近い。(13)は表面の叩きを櫛で消している。

出土の土器はやや暗い色調を呈し、胎土に細砂を含んでいる。内面は櫛乃至刷毛で調整し、ヘラ削りはまだなされていない。11号 竪穴 出土の土器と類似しているが、竪穴相互の切り合い及び製作手法の違いなどから、いわゆる西新期でもやつ古いタイプに属する土器といえよう。

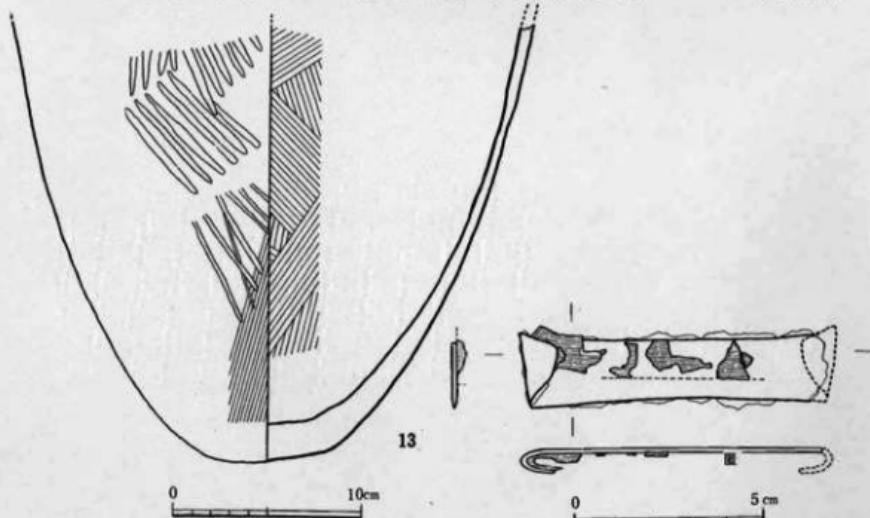
鉄鎌 (第24図)

竪穴のほぼ中央部の床面に接して鉄製品一個が出土した。その形状及び残存する木柄の着装法によっていわゆる手鎌であることが知られる。

手鎌は板状の鉄材の左右両端を折り曲げて作られているが、その右側の折返し部分を欠き、横幅残存長 7.4~8.0cm、縦1.55~2.0cm、背厚0.15cmを計測する。刃部が内弯するが、これは研ぎ減りによるものであろう。

木柄がわずかであるが残存し、その木目の方によって横材を使用していることが知られる。残存厚は最も厚い部分で約 0.3cm であるが、袋部の幅からして本来 0.4cm の厚さの木柄を着装していたと考えられる。木柄は手鎌の背にかぶることはない。

手鎌は異論のあるものの石包丁的性格を与えられてきたが、これまで前期古墳以降にしかその例を認めることができず、石包丁使用の下限とに断絶があった。しかしながら、最近の調査によって、福岡県津古遺跡、福岡市拾六町湯納遺跡等の弥生時代終末期遺跡から手鎌と考えられる鉄器が知られるようになり、「手鎌」としての性格がより明瞭になったと言えよう。 (高倉洋影)



第23図 第10号竪穴土器実測図(2)

第24図 第10号竪穴鉄器実測図

7. 第11号竪穴(図版第七、第25図)

第11号竪穴は第10号竪穴・第12号竪穴とともに、すでに表土は排除され、地山に黒色土の落ち込みがよくみとめられる状態であった。調査の進行にしたがい、第11号竪穴はL字形のベッド状造構をもち、東西に長い主軸の方向をN—65°—Wとする長方形プランであることがしられた。

第11号竪穴は第10号竪穴を切って作られている。また第11号竪穴の覆土中に第12号竪穴の張り床が存在した。このため、第10号→第11号→第12号の順に新しいことがわかる。

規模は、長辺6m、短辺4.2m、壁の現存高20cmを計る。西壁に接し、北壁の一部に接する幅1m、床面より18cm高いL字形のベッド状造構をもつ。内部にやや不整形な3個のピットをもち、西壁ベット状造構に接するものは、長径80cm、短径70cmの方形に近く、深さは20cmを計る。上面は一部張り床状になっているが、性格はわからない。南壁中央付近に接するピットは長径66cm、短径50cmのこれも方形に近く、深さは20cm、底は径14cmの円形を程する。東壁近くのピットは長径1.2m、短径80cmの卵形に近い形状をもち、深さは20cmで、内部よりわりと土器片が出土した。外部には南壁やや中央付近に径20cm、深さ10cmのピットが存在したが、この竪穴に伴うものかどうか不明である。その他、柱穴と思われるピットは発見し得なかった。

床面はよく固められており、中央付近に南北60cm、東西30cmの不整形の焼けた部分が存在し、あるいは炉跡とも考えられる。

東壁中央付近には張り出し部があり、焼土と土器一個体分(第26図7)が検出された。

遺物は、竪穴内にまんべんなく出土したが、特に中央よりやや南側に多く出土した。ベッド状造構の東側、南壁に接して、手捏ね土器なども出土したが、これは調査中盗難にあり、紛失した。

(沢 皇 臣)

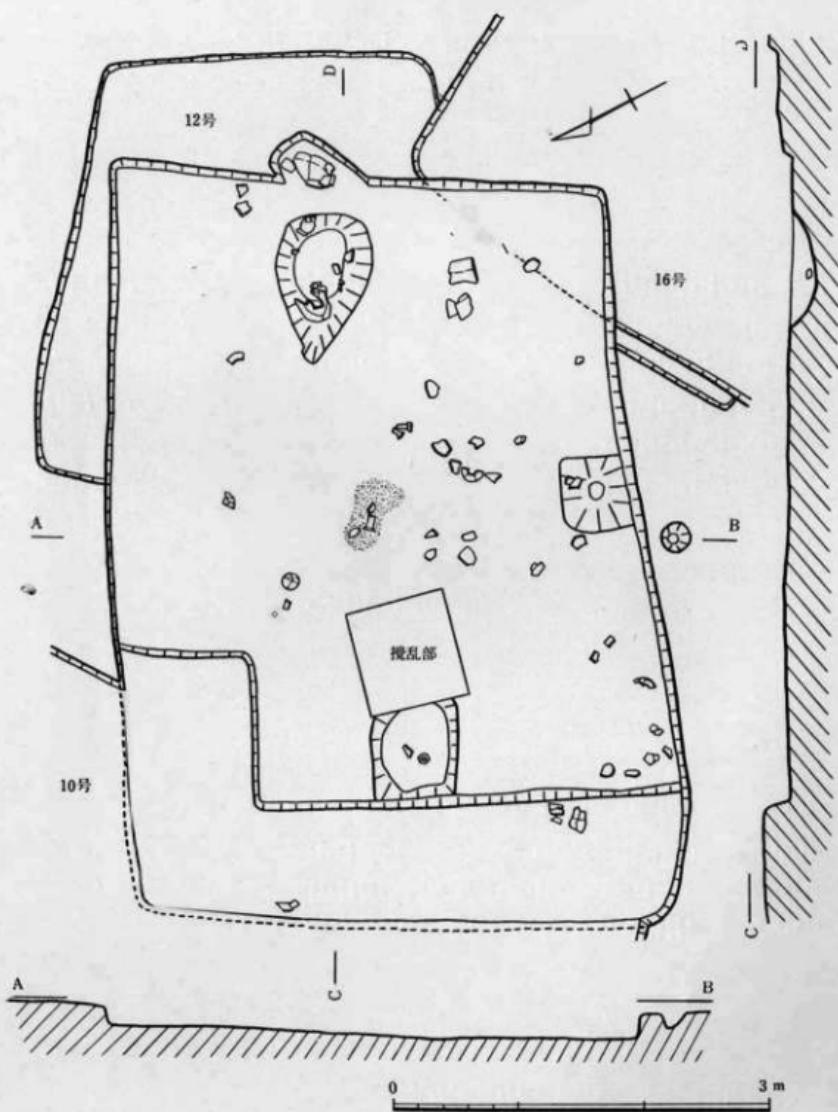
出土遺物(第26~28図)

I. 土器

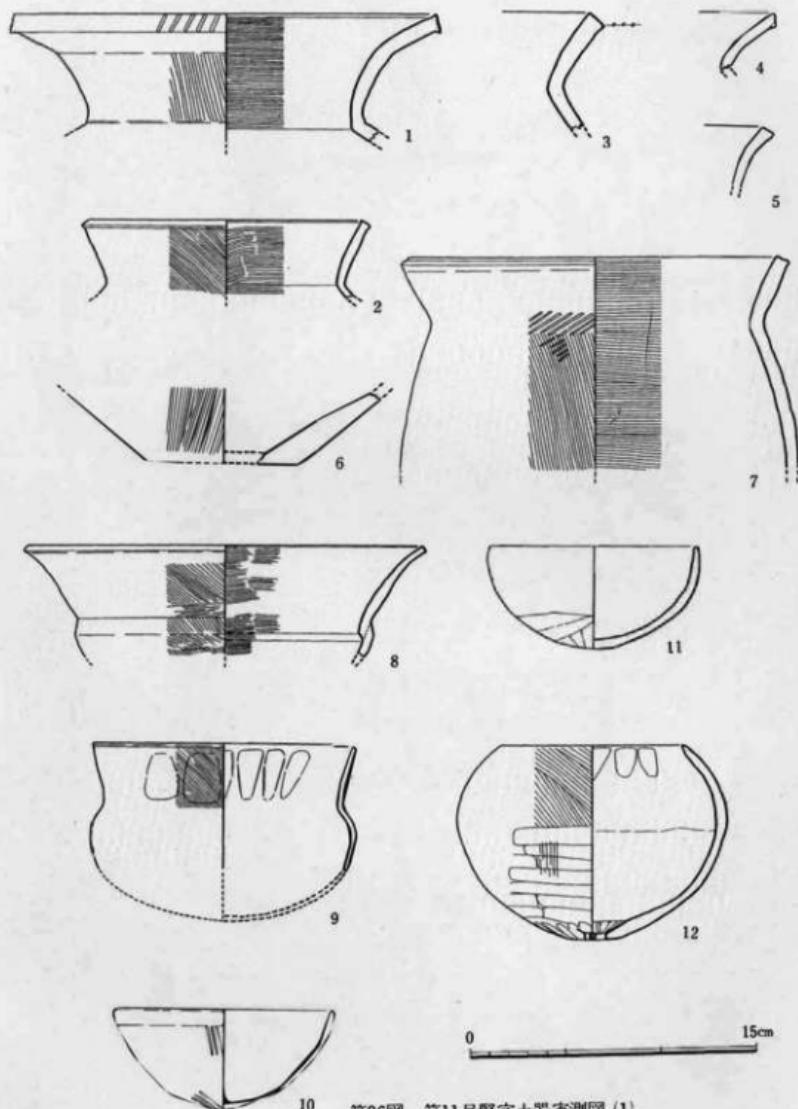
土器の出土状況は非常に不規則であったが、その大部分は床面近くから出土した。このことから全てこの竪穴に伴なう時期のものと考えてよい。出土土器は全て破損した状態で、全体の形を知ることのできるものは少ない。その種別を示せば、壺、甕、鉢、塊、高坏、器台となる。

(1)、(2)、(3)、(4)は壺形土器の口縁部である。

(2)は頸部で鈍角に折れ、そのまま真直ぐに口縁部に至り、口唇部は内外にわずかに張り出している。口縁部径15.1cmを計る。器面は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、内外面とも刷毛が認められる。(1)は他に比して口頸部が高い。頭で鋭く折れ、丸く外弯して口唇部へと続く。口唇部はフラットで内外に引き出している。口唇部にはヘラによって5mm間隔に刻みを入れている。口縁部径22.6cm、頸部で14.8cmを計る。内外面には櫛目が認められるが、櫛目の間隔が異なり、外面が粗い。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含み、焼成は悪い。(4)は口縁部の少片であるが、口縁部外面には粘土を貼りつけている。(3)は口唇部になるに従い厚くなり、口唇部下端に小さな刻み目を有



第25図 第11号竪穴実測図



第26図 第11号竪穴土器実測図(1)

し、内外とも刷毛で仕上げている。

(5)、(7)は變形土器である。(7)は短かい口頭部に、張りの余りない細長い胴部が続く。口縁部径20.4cm、頭部の高さ3.5cmを計る。口唇部は中がくぼみ、外にわずかばかりの引き出しが認められる。器壁外面は叩きによって調整し、刷毛で仕上げている。(6)は變の底部である。平底で底部径3.9cmを計る。器壁は内外面ともへラ削りであるが、外面はその上を刷毛でなでている。(第28図)は大形の變である。破片が12号竪穴からも出土しているが、11、12号竪穴は複合しており11号竪穴に伴なうものであると考える。口縁部径は50.0cmを計る。口唇端は外にわずかだが引き出し肥厚している。口縁部は外弯し、ゆるく肩部へ続き、胴部は余り張らない。肩部には台形の突帯をもち、その上に刻み目をもつ。刻み目は口唇部にも施され、その刻み目は不規則であるが、同様の刻み目である。刻みは櫛で行なっており、櫛目が明瞭である。器壁内外面とも櫛で仕上げているが、内面は横方向へ、外面は継方向である。これにつく底部が(第28図)であると考える。いわゆる西式の特徴をもっている。

(8)、(9)は鉢形土器である。(8)は口縁部は途中でわずかに内弯し、その後外弯し口唇部に続く。口唇部は薄く、内外にすこし引き出している。立ち上がりと受部には粘土帶の織ぎ目が明瞭に認められる。この器形からすれば脚がつくと考えられる。内外とも刷毛で仕上げられており、器壁は黄色がかかった茶褐色を呈し、胎土も普通であるが、わずかばかり大粒の砂粒を含んでいる。(9)はわずかに内弯した口縁部からゆるやかに肩部に続き、肩は張り、底部は丸底になると見える。口縁部径13.7cm、推定器高9.4cmを計る。器壁は薄く、非常にもり。胴部の器壁内外面はなでているが、頭部内外面には指当て痕が認められるが、その上を刷毛でなでている。

(10)、(11)は壺形土器である。共に半球状を呈するが、(11)の方が丸みをもっている。(10)は径11.6cm、器高5.4cmあり、口縁部が厚くなっているが、全体に薄い。成形の為にヘラを使用しており、その為に器壁に棱をもつ。さらにその上を叩いており、叩きが部分的に認められるが、保存状態が悪くあまり明瞭ではない。胎土も悪く、砂粒を多く含んでいる。これに比して(11)は焼成が良くない為に黄白色を呈するが、胎土は普通である。径11.1cm、器高5.5cmを計る。内外とも指あてによって整形し、指なで技法で仕上げている。しかし底部附近はへラ削り仕上げである。

(12)は球状の物体の上部をカットしたような形態を呈し、底部には大小2孔を穿っている。口縁部は次第に薄くなり、胴部が幾分張っている。口縁部径9.4cm、高さ10.5cm、胴部最大幅14.2cmを計る。器壁内面はへラ削りののちで仕上げであり、口縁裏面は下から上へ指をあてている。外面は全面へラ削りののち、胴部最大幅より上を櫛でなでている。下半部でも部分的に櫛を使用している。胎土は精成されており、赤褐色を呈する。底部が黒っぽくなっていて、孔をもつところからコシキとして使用されたのかも知れない。

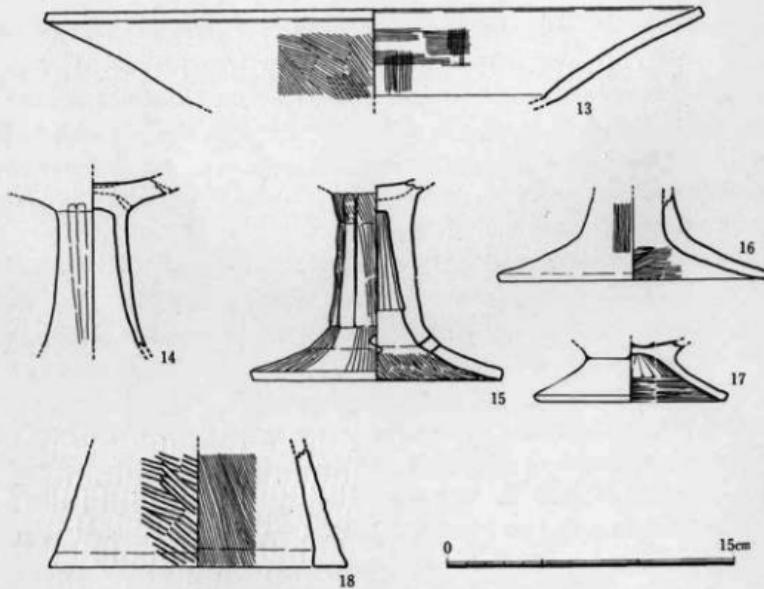
(13)、(14)、(15)、(16)は高壺形土器である。(14)、(15)ははゞ形であるが、器壁の厚みが異なる。ことに壺部と脚部の接着方法が異なり注目される。すなわち(14)は壺部と脚部を別につくり接着しただけであるが、(15)ではその過程で粘土を附加して強化している。(15)の成形技法は筒部内外ともへラ削りで外面はその上を刷毛でなでている。裾部は内外とも刷毛で調整しているが、外面の方が粗い刷毛で

ある。孔は3孔を有する。14の外面はヘラ削りである。

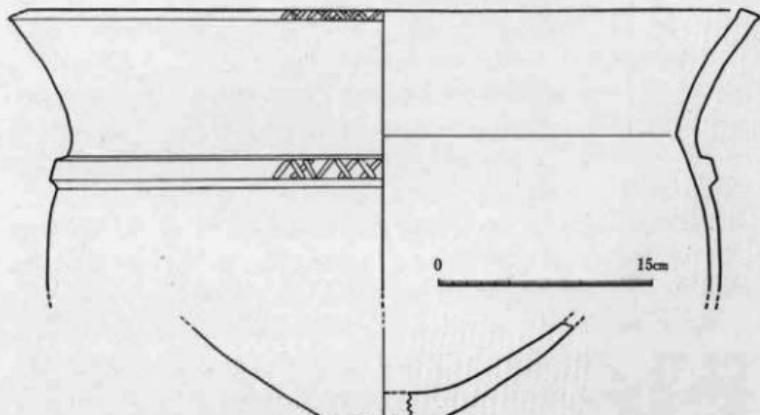
10は裾部のみであるが、折れる部分が一番厚く、裾端は丸みをもっている。内外とも刷毛で仕上げている。

18は器台の脚下半部である。端部で肥厚し、底面は平らである。器壁内面は刷毛目が施されているが、外面はタタキである。

当 竪穴 が日常の生活跡であったことは間違いないが、10、12号竪穴と複合したために不明な点も多い。しかし遺物を編年する上では大きな手懸りを与えてくれる。10号→11号→12号という順序で作られているので通念から云えば出土遺物も同様になる。土器も全般的な傾向からいえば 10号 竪穴より新しく、12号 竪穴よりも古い。
(佐田 茂)



第27図 第11号竪穴土器実測図(2)



第28図 第11号竪穴土器実測図

8. 第12号竪穴 (図版第7、8、第29図)

第12号竪穴は、第11号竪穴の東側上面に所在する。第11号竪穴の項でも述べたように、この竪穴は第11号竪穴より新しい。また第16号竪穴に南側の一部を切られていた。

やや東西に長い主軸を N-60°-W の方向にもち、長辺 3.7m、短辺 3m、比較的小型のややゆがんだ方形に近い長方形プランを呈するが、第11号竪穴の上面の部分、すなわち西壁の一部と東壁の一部は、明確には検出できなかった。壁の現存高は 10-18cm で、北・西壁に接する床面はやや高くなっていた。

柱穴、その他のピット、および炉址と思われるものは、何も発見できなかった。

遺物は、破損した状態で多数出土したが、ほとんどが、第11号竪穴上の張り床の部分から出土した。(沢臣)

出土遺物 (第30~32図)

I. 鉄器 (第32図)

現存長 5.6cm、最大幅 1.8cm、厚さ 0.15cm を計り、先端に行くに従い細くなるが、先は欠失している。一方の端には幾分反りが認められる。刃部は認めることができないが、先端が細くなっているのは磨滅したのかも知れない。幅の広い端部には装着痕らしきものが残存している。これが何に使用されたか定かにしがたいが、全体の形状からして鎌ではないかと考える。

II. 土器 (第30、31図)

出土した土器は全て破損した状態であり、完形をとどめるものは 1 個もみられない。その種別を

示せば次のようになる。壺、甌、鉢、塊、高坏、器台、手捏ね土器である。

壺形土器には口縁に刻み目をもつものと、もたないものと二通りある。(3)は全体に厚く、口唇部が凹み上下二段に刻み目が入っている。(2)は口唇部を外に折り返し、その上にヘラで細めの刻み目を約6mm間隔で入れている。(2)は頸が短かく、くびれで丸く外弯し、幾分厚くなって口唇部に続き口唇部は外に折り返している。胴部内面は櫛目、他には刷毛目が施されている。(1)は他に較べて頸の長いもので、くびれで割合い鋭く折れ、ゆるやかに外弯している。口縁部径19.6cmを計る。口唇部は外にわずかに折れていて、器壁内外とも櫛で仕上げている。

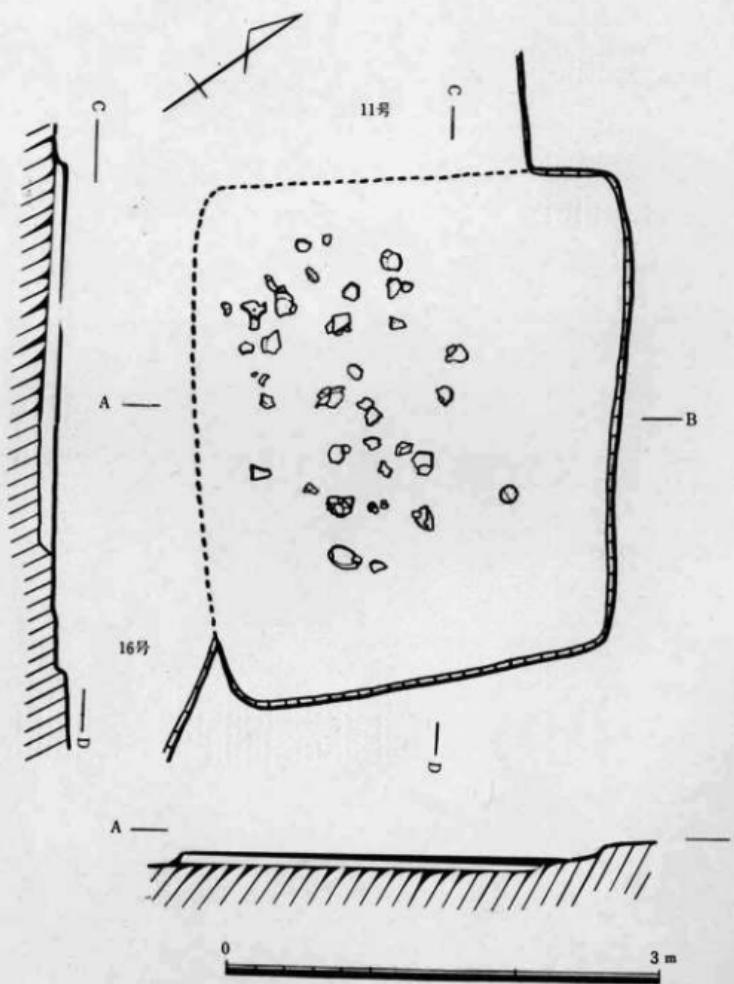
(4)、(5)は頸部のみであるが、ともに肩部に突帯を設けている。肩部はゆるやかに膨らみ胴部へ続くものと思われる。突帯には刻み目を有しているが、(4)は突帯上面に、(5)は突帯下面に認められる。(4)は櫛で仕上げているが、器壁外面は縱方向、内面頸部は横方向、肩部は縱方向である。

(6)、(7)、(8)、(9)は甌形土器である。(6)は口縁部のみであるが、径20.4cmを計る。頸部が余りしまらずに口縁部に続き、口唇部は内側をつまみ上げている。口縁部と肩部には粘土帶の継ぎ目が認められる。器壁内外面ともヘラ削りによって整形し、その後内面は撫でによって仕上げているが、外面は櫛によって肩部は横方向に、口縁部は縱方向に撫でている。ことに口縁部は器体を回転させて頸部から口唇部に向って調整している。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含んでいる。(7)は口唇部の内外ともにつまみ出している。器壁内外面とも斜めに櫛目がはいっている。(8)は器壁が薄く肩の張りがない、口頭部の短かいものである。口縁部の径は14.4cmを計り、器壁の外面には叩きが認められ、土師的様相が強い。(9)は異形の土器で、わずかに開いた口縁部から膨らまずにそのまま、胴部へと続く、尖がった底部となる。口縁部径12.9cm、器高14.4cmを計る。口唇部は平らで、器壁は内外ともヘラ削りで全体に整っている。器体下半部には底部を中心として放射状に櫛描き文様がはいっている。文様は不規則で、縱方向に波状、曲線が狭い7本の歯をもった櫛で施されている。櫛描文は大分県安国寺出土の弥生終末の土器や同県白瀬出土の土器などに見られ、この土器にもその方面的影響が考えられる。

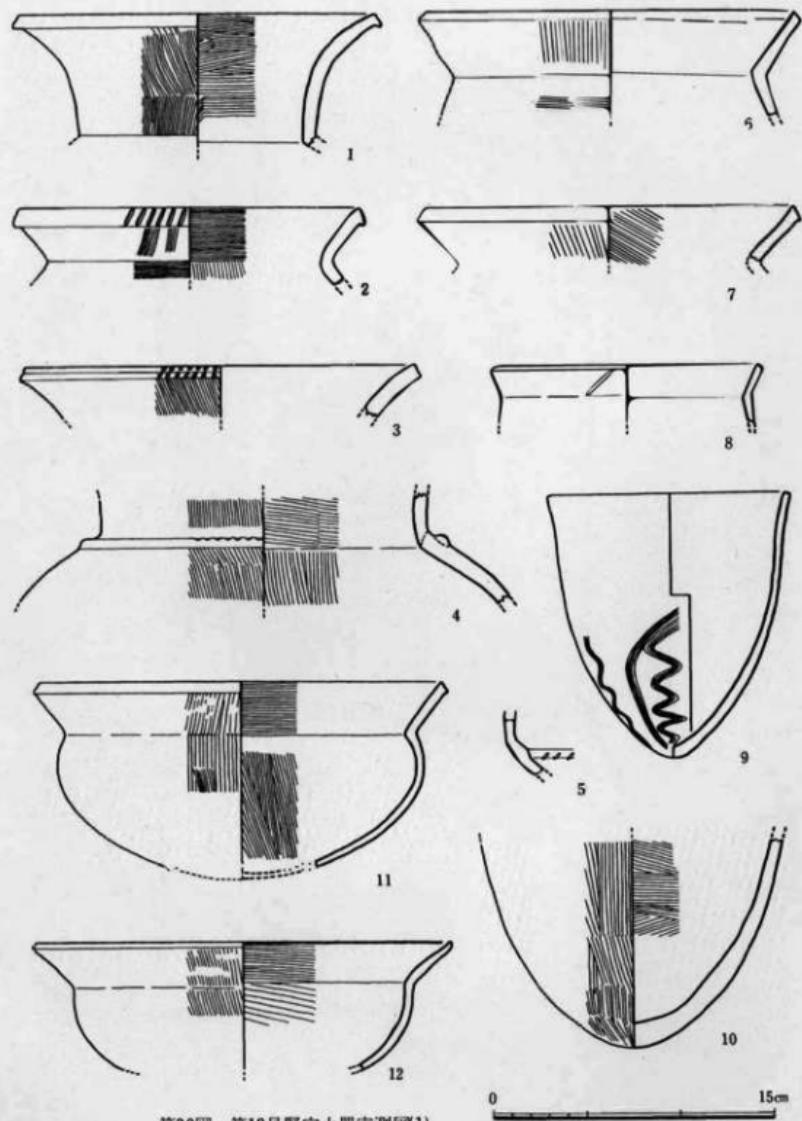
(10)は甌形土器の底部である。器壁の厚い、尖り気味の丸底である。内外面ともヘラで削った後、櫛で仕上げている。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成も悪く、非常にもろい。

(11)、(12)は鉢形土器である。(11)は直ぐに外へ延びた口頭部にわずかに張った胴部がつき、そのまま、丸く底部へと続く。幾分底くぼみの口唇部はわずかに外に返している。口縁部径22.0cm、器高推定10.7cmを計る。胎土は割合い精成されており、器壁はなめらかである。内面は刷毛によって仕上げられているが、胴部の上端に横撫でが認められる。外面は11頭部と胴部上半は刷毛で仕上げ、部分的にその上を撫でているが、胴部下半、底部はヘラ削りによって仕上げている。(12)は口縁部でわずかに内弯し、膨らみをもたずに胴部から底部へと続く。11縁部径22.3cmを計り、器高は(11)に較べて低い。脚がつくものと思われる。整形技法は(11)と殆んど同じであるが、胎土には砂粒を含み、全体に雑である。

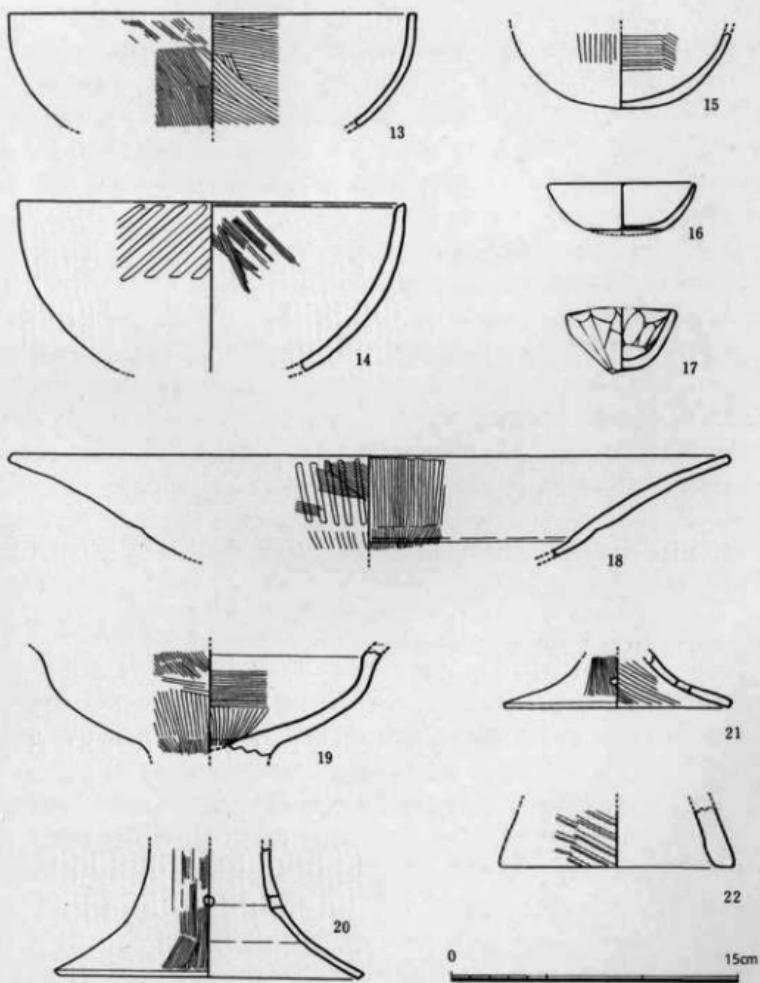
(13)、(14)、(15)は塊形土器である。(14)は11縁部径20.4cmで、幾分厚い器壁をもち、半球状を呈す。口唇部には段を設けている。器壁の外面上半には叩きが施され、下半はヘラ削りである。内面は刷



第29図 第12号竪穴実測図



第30図 第12号竪穴土器実測図(1)



第31図 第12号竪穴土器実測図 (2)

毛で仕上げているが、刷毛目は非常に不規則である。(13)は口縁部径21.4cmの口唇部が平らな浅い半球状を呈する。器壁は薄く、内外面とも刷毛で仕上げているが、刷毛の種は異なり、内面の方が粗い。

(18、19、20、21)は高環形土器である。(18、19)は環部で(20、21)は脚部である。(18)はわずかに段をもち、大きく外に開く大形の高环である。内外面ともヘラ削りによって成形され、器面は非常になめらかで、その上を刷毛でなでて仕上げている。21号竪穴出土のものと同種で、野辺田式土器に類似している。(19)は環部下半のみであるが、赤褐色を呈し、全面に櫻目が強く残っている。櫻は二種を使用しており、下の部分が粗く、上の部分が細かい。脚には長脚のもの(20)と短脚のもの(21)の二種があり、(20、21)は胎土も精成されており、丸い透しをもつ。

(22)は器台の下端部である。下端部内側でわずかに肥厚しており、内面は指あてで、外面には叩きが施されている。筑後市郷土宝蔵の器台に類似している。

(16、17)は手捏ね土器である。(16)は口縁部径7.8cm、器高推定2.8cmである。内外とも指で調整しているが、仕上げがよく、いわゆる手捏ね土器とは趣きを異にしている。(17)は古墳時代の祭祀遺跡に見られるようなもので、口縁部も不ぞろいで、器壁も厚く、器面には指あての痕跡が明瞭に残り、器面はでこぼこである。口縁部径5.8cm、器高3.5cmを計る。

竪穴は前述したように小規模であり、柱穴を全然持たない。このことからどういう性格の竪穴であったか決定することができなかった。しかし竪穴の切り合いによって11号竪穴よりも新しいことは解る。出土土器についても、その製作年代は知り得ないけれども、使用を終った時期は前後関係によって知ることが出来る。上器の時期は弥生式土器の影響を受けているが、上部器的な様相を帯びる弥生最終末とすることが出来る。

(佐田茂)

9. 第13号竪穴(図版第九、第33図)

本竪穴は、16号竪穴を清掃中に発見されたもので、整地作業により東北部半分は完全に削平され、南西部半分しか検出することが不可能であった。しかしそれも、16号竪穴により当時のおもかげはほとんど失なわれている。現在わずかに東南壁2m20cmと、北西壁1m20cmとが残こされているのみで、壁の現高も平均5cm程度である。この竪穴を復元してみると、長辺は3m90cm、短辺が2m80cm程度の小規模のものであったろうと考えられる。主軸はN-40°-Eを指す。出土遺物は、上記の様な状況で皆無ではあるが、16号竪穴の東隅で、13号竪穴の床面と同一レベルより杏形器台片が1個検出された。

出土遺物(第34図)

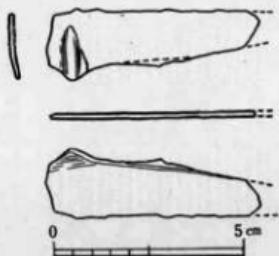
(第34図)は杏形器台である。脚部の一部分のみであるが、外面は叩きを使用し、内面には、指圧整形の痕跡を残している。脚端の内面を引きのばしておりかえし、上面には部分的ではあるが、指圧痕が残こっている。

この器台は、昭和43年度の福岡市教育委員会による「有田遺跡」の調査報告書中の、福岡市羽根戸

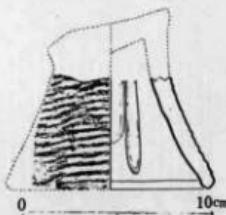
より出土した沓形器台に酷似するのでそれにより復元した。

(第33図)にみるよう、13号竪穴が廃棄された後にその床面を切って16号竪穴が造られているので、当時の状態や遺物は不明であり、16号竪穴より13号竪穴の方が時期的に古いことは確実であるが、12号竪穴との切り合いは、整地作業により削平されているので新旧関係は不明である。16号竪穴出土の他の遺物は、すべて床面に付着しているが、沓形器台のみ浮いた状態で出土している点は、古い竪穴の残遺物もしくは、落ち込みによるものであるまいかということが考えられるので、この竪穴のものとして取り上げた。唯一の遺物ではあるが、この竪穴の構成されていた時期は弥生式終末期に比定されると思う。

(松本 肇)



第32図 第12号竪穴鉄器実測図



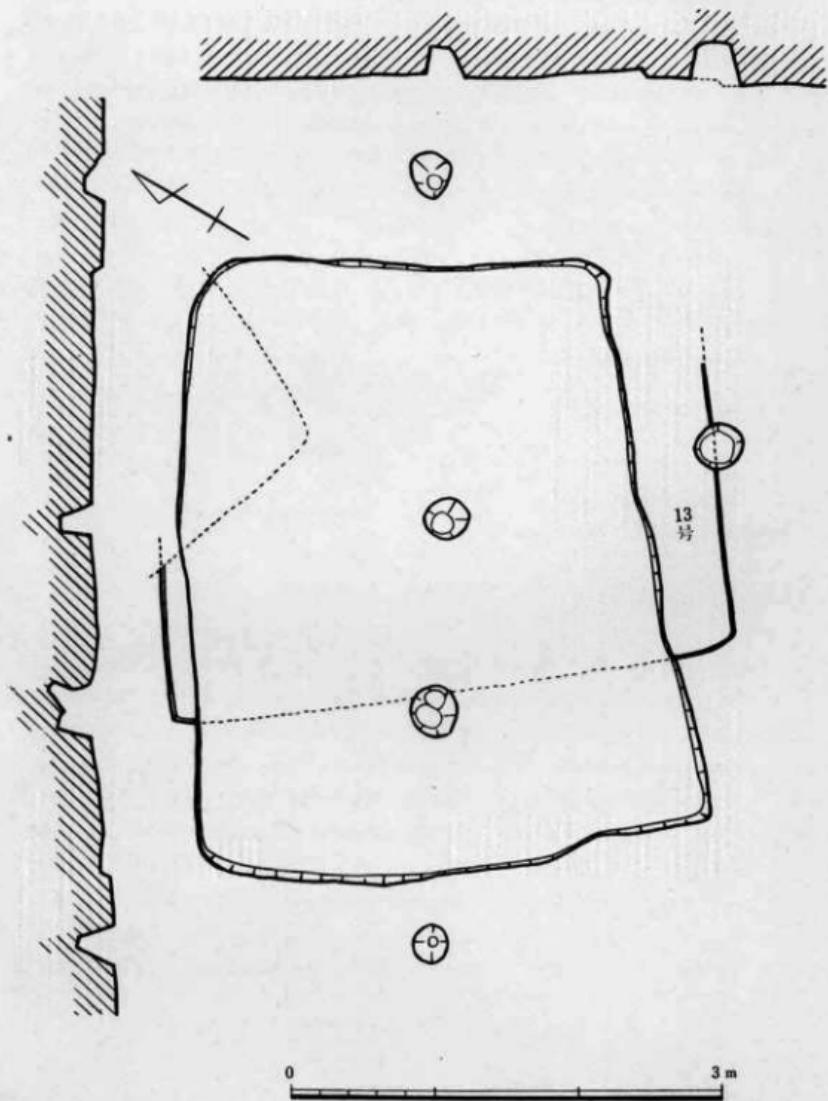
第34図 第13号竪穴土器 実測図

10. 第16号竪穴 (図版第九、第33図)

本竪穴は整地作業により上面を削平されているので、図でみられるようなプランがすでに現われていた。長軸 4 m 30cm、西辺 3 m 60cm 東北辺 2 m 70cm の台形状をなすプランを示し、主軸は N-53°-E の方向を指す。床面の堅さは不統一であり、二次的に掘られた形跡が部分的にはある。壁の現高は、一番残っている所で 10cm 程度しかない。北隅は 12 号竪穴と重複している。12 号竪穴の壁を取り去り、その床面上に黒褐色土を積み込み、黄褐色粘土を混ぜて張り床を行なっている。壁も黒褐色土に黄褐色粘土を混ぜて構築している。柱穴は、主軸線上でほぼ等間隔に、竪穴内 2 個、外側各々 1 個づつ存在し、直交して東側外に 1 個認められるが、いづれも床面よりの深さは 20cm 内外である。この竪穴は、主柱を一線上に 4 本建て棟をのせたものと考えられる。がらしき焼土も炭化物も認められなかった。出土遺物は、いづれも竪穴内の柱穴付近より、床面に付着した状態で出土している。ただ 13 号竪穴でのべたように、沓形器台のみが出土状態を異にしているので、13 号竪穴に伴うものとみた。

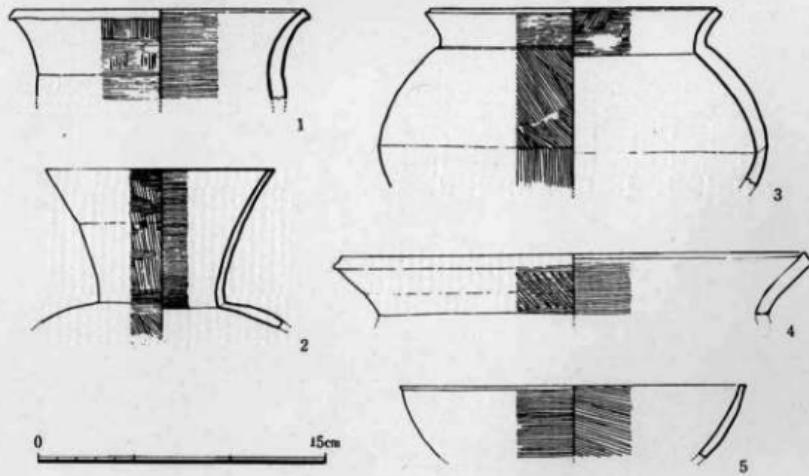
出 土 遺 物 (第35図)

(1)、(3)は壺形土器である。(3)は、口頭部が極端に短かく外反している。口唇部では、口縁端の内側をつまみあげて引きのばし、上面では中央部を横なでにより凹みが生じている。肩部の接合部で



第33図 第13・16号竪穴実測図

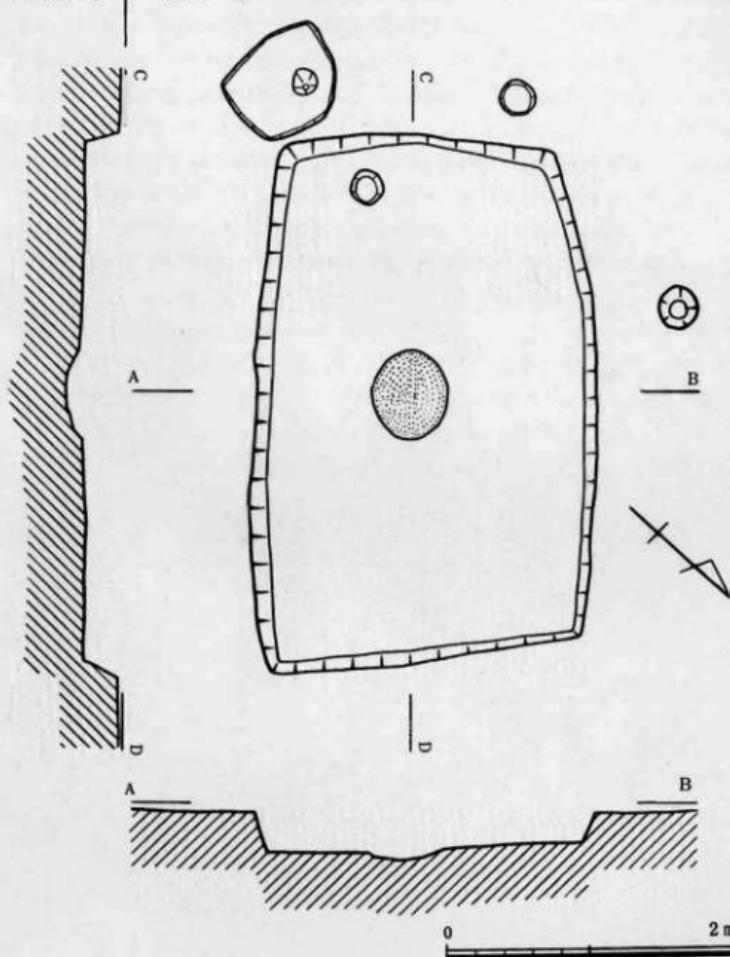
は、外面を横なでにより平坦面を持つ。胴部の中央よりやや上方で最大径となり縁が着いている。この点で接合していることは明瞭である。整形は、内面では口頸部のみであるが、斜めの粗い刷毛の上から横に細かい刷毛を使用している。胴部・接合部で指圧痕が残っているようにみうけられるが明らかでない。外面は、口頸部に細かい刷毛を横に使用している。肩部から胴部接合部にかけ粗い刷毛を方向は一定でないが使用している。それより下は同様な刷毛を縱に用いている。肩部の接合部に細かく刷毛を縱に用いている。(1)は、口頸部のみであるが、長くて直立し、口唇部にかけて外反が急になる。口縁端を内外共に引き伸ばしている。上面は横なでしている。整形は内面は細い刷毛を横に用いている。外面は縦の粗い刷毛の上を、細かい刷毛を横に使用して部分的に消している。(2)は長頸壺形土器である。この土器に共通な非常に薄手で、精製された良質の粘土を使用し焼成も良好である。口頸部は外反し、口唇部上面を横なでて面を取っている。整形は、内面を細い刷毛を横に用いているが、外面では、粗い刷毛を斜に使い、その上より細い刷毛で消している。肩部で接合しているが、接合部は横なでてわずかに平坦面を作っている。口縁径12cmあり胴部中央で最大径となり、底部は丸底となる大形のものではないかと考えられる。(4)は彫形土器の口縁である。口頸部は大きく外反し、壺形土器と同様に口縁端を内外に引き伸ばしている。上面は、横なでをしてわずかにへこんでいる。内面は、細かい刷毛を横に用い、外面は、叩きを施して器面を整形し、その上から細かい刷毛で調整している。(5)は塊形土器である。良質粘土を使用して製作しているが、焼成が悪い。口縁径18cmもある大形のものであり、口縁端を外に向けて引き伸ばした後に上面をハラで削ぎっている。整形は、内面を粗い刷毛を斜に用いているが、外面は細い刷毛を横に使い仕上げている。



第35図 第16号竪穴土器実測図

以上述べたようにセット関係及び製作技法に土師器的な要素が多く、竪穴でもふれたように、明らかに16号竪穴が13号竪穴及び12号竪穴を切って当竪穴を造っているので、この3軒の中では一番新しい時期に設定されたものと考えられる。なお12号竪穴との重複後部分で床および壁に粘土を混ぜて構築していることから、12号竪穴が、廃棄されて後、まもない間に16号竪穴が造られたのではないだろうか。

(松本 肇)



第36図 第17号竪穴実測図

11. 第17号竪穴(図版第一〇、第36図)

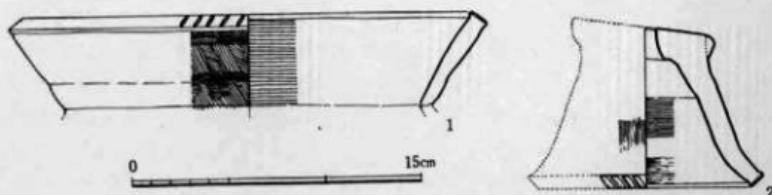
この竪穴は、長辺3m80cm、短辺2m30cmの隅丸長方形プランを呈す。主軸はN-36°—Eを示す。中央に長径60cmの楕円形の炉と思われる深さ10cmの焼土のくぼみが認められる。柱穴らしいものは竪穴内外に4個あるが、いづれもこの竪穴に伴なわない後世のものようである。壁の高さは現高で30cm内外である。出土遺物は、菱形土器片1個と、杏形器台片1個とを検出したのみであったが、以前一度調査されたところでもあり、またその時も非常に少なかったということである。

出土遺物(第37図)

(1)は菱形土器である。口頭部のみの破片であるが^g、直径23.2cmであり、口頭部は大きく外反し、口縁端を引き伸ばしている。口唇部上面には、この時期の特徴である刻目文を入れているが、これは、櫛状の施文具を使用している。整形は、内面に明瞭に櫛目を残していたが、外面では、方向は一定していないが、粗い刷毛の上を細かい刷毛を横に使用して調整している。(2)は杏形器台である。器形は、脚端径11cmで受部の一方が高くなり、受部の中央付近に小孔を有す。受部の周囲に粘土紐を張り付けて広げている。脚端部で外反がきつくなり、縁を内外に引きのばし、脚端面にへらで幅広い刻目文を施している器面全体に、二次的に火を受けたように赤変し剥落がはなはだしい。整形は、内面を接合部とおぼしいところより下に櫛を横に用いているが、それより下方は細い刷毛を横に使っている。外面は、同様に細い刷毛を横と縦とにわけて使用している。

13号竪穴出土の杏形器台も同様ではあるが、受部の一方が高ければ、数個組み合せなければ土器をのせることは無理であり、ここのように2次的に焼けていることなどは、火にかけるための支柱か支柱としての使用であろうと考えられる。その場合受部の小孔は、火をあてた場合にはじけることを防ぐことは容易であろう。この竪穴は削平されたことを考慮に入れると壁はかなりな高さになり、狭くて深く、土器の出土量が非常に少なく、柱穴は存在しない。炉は以前の調査での状態が不明なのが残念ではあるが、その時々に応じた簡単な工房的なものとして使用したのではないかということも考えられる。時期は弥生式終末期に比定される。

(松本 肇)



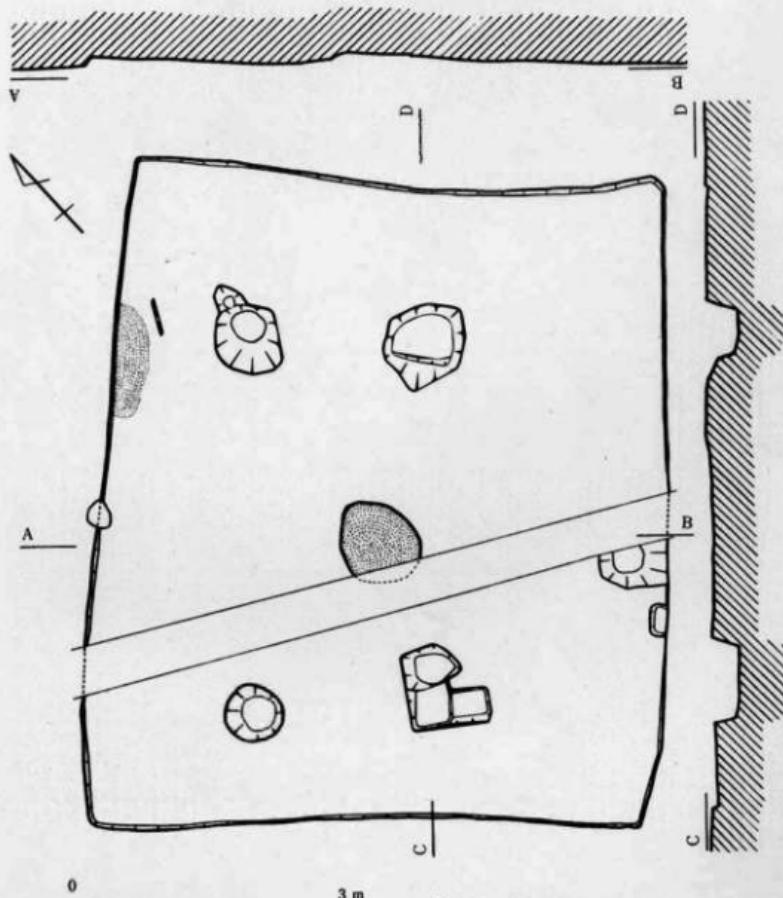
第37図 第17号竪穴土器実測図

12. 第18号竪穴(図版第10、第38図)

長辺 5 m 60cm、短辺 5 m の方形プランを呈し、主軸は N—46°—E を指す。現存する壁高は 5 cm 内外であり、完全に整地作業により竪穴の上面は削平されてしまっている。また中央よりやや西南側において、西北から南東にかけて、幅 20~30cm の耕作用排水溝らしき溝が走っている。主柱穴と認められる柱穴は、4 個共竪穴内にあり、全体的に北西側によっているが、柱穴間の距離は、長い方で 3 m 50cm、短い方で 1 m 50cm であり、竪穴のプランとは相違する長方形状を示す。共に床面より 30cm 内外の深さである。炉は中央部附近に存在し、径 70cm もあるが非常に浅くくぼんでいるだけで、それほど強く火を受けた様子もないような焼土の状態である。他に二ヶ所焼上のかたまりと板状木片の炭化物が認められた。土器は、それぞれの柱穴内及びその附近と炉内で出土し、同一になる個体の破片が床面上で散乱している。

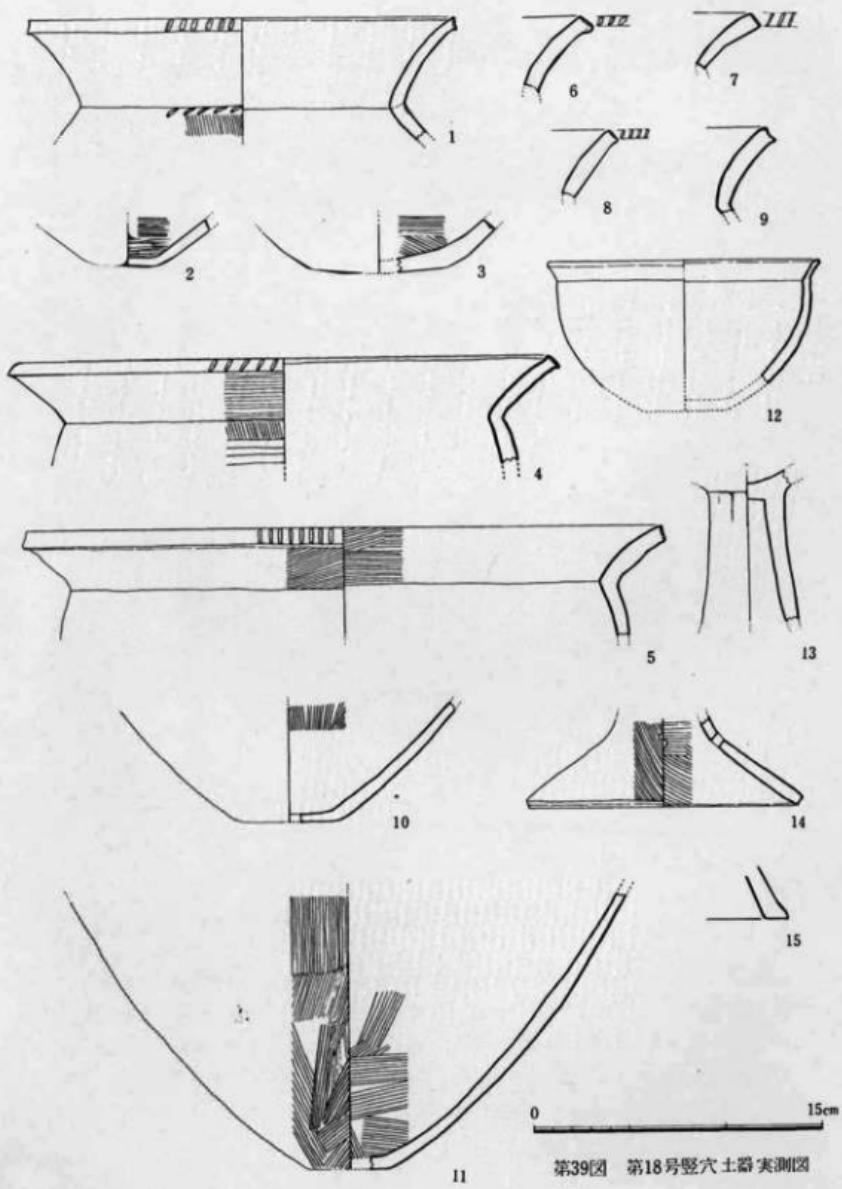
出土遺物(第39図)

(1)・(2)・(3)は壺形土器である。(1)は口頸部であり、胎土・焼成共に粗雑で剥落がはなはだしく、調整法は不明である。口頸部は外反し、わずかに引き伸しがある。口唇部上面には、櫛形の施文具により刻目文を施している。肩の接合部下端には、竹を割ったもので、半弓状に施文している。肩部は全体に細かい刷毛を斜めに使用している。(2)・(3)は底部である。(3)は、底径 7 cm であるが、中心部でわずかな平底となるが、内面には平坦部が存在しない。肥厚約 1 cm で当竪穴内では一番厚手となっている。内面には櫛と粗い刷毛とを用いた整形のあとがある。(2)は、薄手で底径 3 cm の平底が、わずかに残っている。下底部には外面に底をつけた時に出来たと思われる、圧えた痕があるがハケにより消している。底部内面にも平坦面をのこし、細かいヘラと刷毛により整形している。(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(11)は壺形土器である。(4)・(5)・(6)・(7)・(8)は口唇部にヘラによる刻目文を有する。いづれも口頸部は外反している。(8)は口縁端の外側を引き伸ばしている。内面は細かい刷毛を横に使用して整形している。(7)は口縁部に近づくにつれて肥厚し、内面は細い刷毛を横に用い、外面は粗い刷毛を斜めに使用して整形している。(5)も口縁端の外側を引き伸ばし、内面は粗い刷毛を使用しているが、一定方向にではない。外面は、細い刷毛を斜めに用いて整形している。(4)は、胎土・焼成共に非常に粗雑である。口縁端は、内外を引き伸ばしている。整形は、口頸部外面に粗い刷毛を横に用いているが、接合部下端には同様の刷毛を斜めに使用している。その 1 cm ばかり下からは、胴部全体であろうと思われるが、施の間が広い櫛状の施文具を横に引いて用いている。(6)は口縁端の内側を引き伸ばし、外側には周囲に粘土紐を張り付けている。整形は口頸部外面の上部は櫛を用い、肩にかけて細い刷毛を横に使用している。(9)は口縁端の外側を引き伸ばし、上面を横なでしている。口頸部は外反し、櫛を斜めに使用し、その上から細かい刷毛を横に用いて整形している。(10)・(11)は底部である。(11)は、底径 4 cm ほどの平底がわずかに残し、内面も平坦面を持つ。薄手ではあるが、大形の壺形土器になると考えられる。整形は、内外面共に櫛を使用しているが、外面のみに胴部は細い刷毛を縱に長く用いているものと思われる。(10)は、底径 5 cm の平底が残



第38図 第18号竪穴実測図

る。平底は非常に薄くなっている。外面に一部2次的に火を受けて黒変し、煤が付着している。内面では櫛により整形している。(4)と(6)、また(5)と(11)は同一個体になると考えられる。(12)は鉢形上器である。砂粒を多く含くみ、胎土が非常に粗い。全面に2次的に火を受けて赤変し、剥落が激しい。口縁径14cmあり、口頸部は外反する。整形は口縁端上面は横なでしている。内面は細かくヘラを二段に用いて削ぎっている。径4cm程度の平底を有し、器高8cmの浅鉢になるものと考えられるが、明瞭な平底とはならないだろう。



第39圖 第18號竪穴土器實測圖

(13)・(14)は高環形土器である。(13)は脚部の円筒柱のみである。内外共に剥落がはなはだしいが、外面には、部分的に幅8mmのヘラ削りの痕跡を残している。环の部分と脚の部分を別々に作製し、後で貼り付けているようだ。(14)は脚部の裾にあたる部分のみであるが、脚端径14cmで小孔を3ヶ所に有する。小孔の上部で接合させたのか急に外反する。脚端部の内側を引き伸ばし段を付けている。脚端面は横なでし、内面を粗い刷毛を横と斜めとに使用している。外面は細い刷毛を斜めに用いて整形している。

(13)と(14)とは、胎土・焼成・色調共に同一であり、欠損箇所の径・厚さ共に近似があるので同一物ではないかとも考えられる。

(15)は器台形土器の脚端部の小片であるが、直形器台になると想われる。横なで調整を行なっている。

この豊穴の時期は弥生終末期に比定されると考えられる。以上のように、壺形・變形・鉢形土器等の底部は、小さく平底が残っているが、完全な棱を付けて区別するほどではないという共通性を持つている。整形法も刷毛・櫛・横なで等の手法があり、特に壺形・變形においては、口唇部に施文具により刻目文を入れている等のこの時期の特徴を多く示している。しかし口縁端を引き伸ばしているものと、そうでないものとの二通りあるのは、ただ単に製作技法上の差だけの問題であろうか。

(松本 翠)

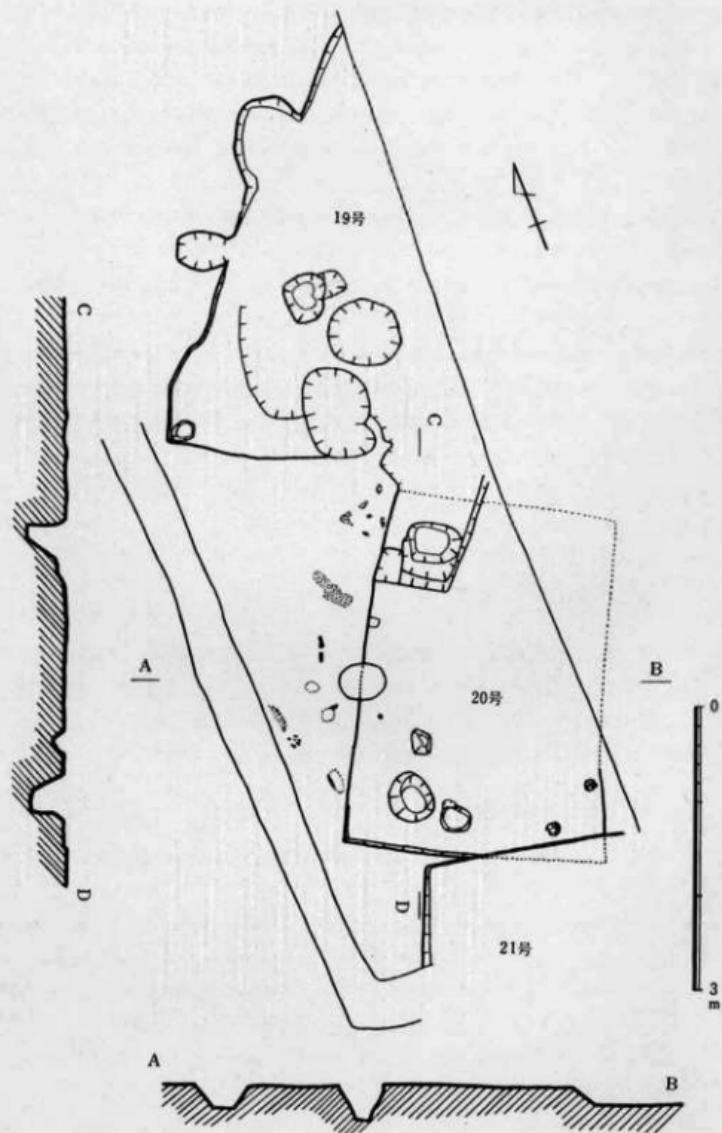
13. 第19号豊穴 (第40図)

発見当初、すでに岩崎光氏により発掘調査された豊穴で、西南角に統く豊穴壁が小部分残存し、わずかに方形プランの豊穴であることを窺わせるのみである。南、北東角および北西角附近は最近の溝により、切取られている。豊穴の主軸は、N-40°-Eである。西南角と西壁に沿ってピット、または浅いくぼみがある。20号豊穴との関係は、不明である。

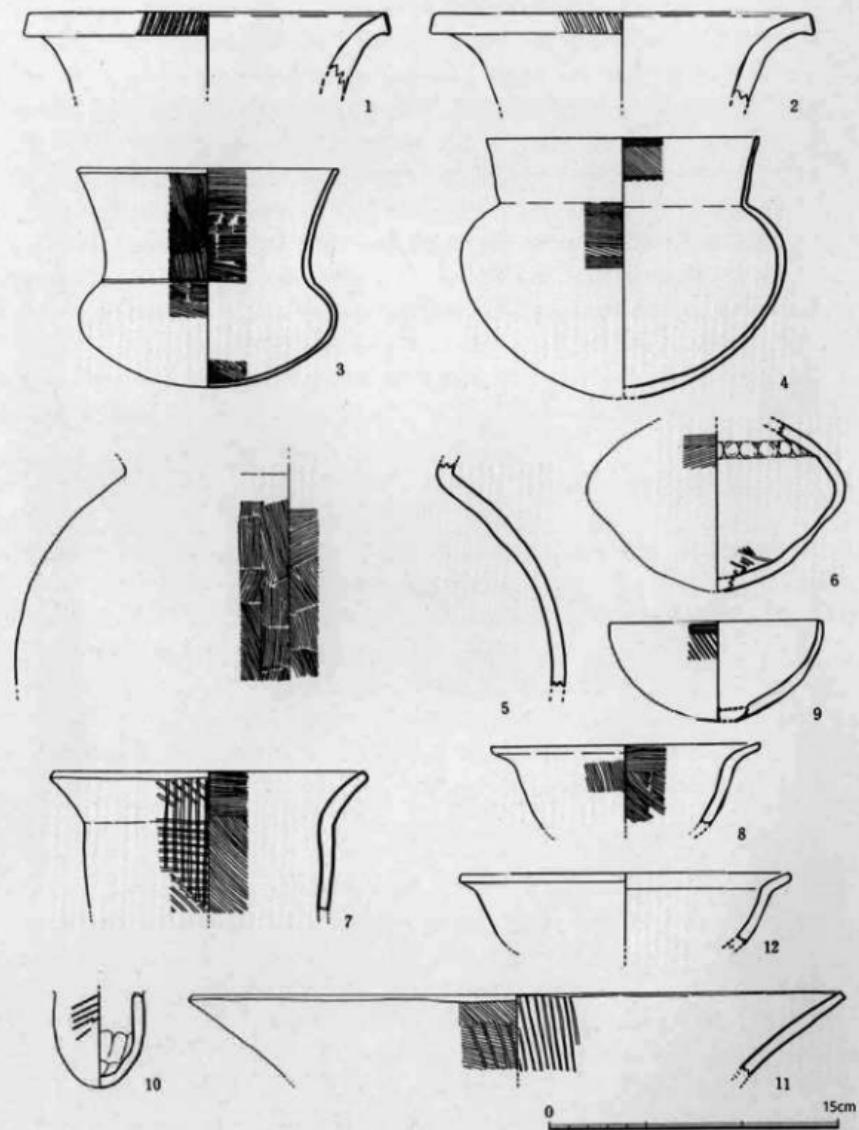
出土 遺物 (第41図、第42図)

豊穴より出土した遺物は豊富である。すでに採集保管されていたが、特徴的な上器を抽出し、図示して説明したい。

(1)(2)は壺の口縁で、口唇部は引延ばされて上下にふくらむ。(1)は口唇部に刻みがつけられ、裏面は刷毛で調整される。(2)の口唇部の刻みは、櫛によりつけられている。(3)は薄手の質の良い壺で口縁と胴部の径は同じか、または口縁部が少し広い。表面は胴部の中程まで刷毛で仕上げられ、その下は底まで指などで仕上げられる。裏面の仕上げは刷毛による。口唇部は外側へややふくらみ、指などで仕上げられる。口縁部は外にそりをもちながら胴部へつながる。つなぎ目は垂直に削られ平らな段がつく。(4)(7)、第42図は變形土器で、胴部が丸くふくらみ、わずかに外反する口縁をもち、頸部は「く」字形になる土器(4・5)と、外反する口縁をもち、胴部のふくらみが顕著でない土器(7)がある。(6)は前者に入るだろう。(4)は、口唇部を指などで仕上げられ、表面は口縁部の上



第40図 第19・20号竪穴実測図



第41図 第19号竪穴（1～9）、20号竪穴（10～12）土器実測図(1)

部、裏面は頭部から中程まで、刷毛で調整される。表面の頭部以下の小部分は刷毛で、それ以下は最終的には指などで調整される。(5)は表裏とも刷毛で調整され、裏面の頭部は指などで整形している。(6)の表面は、最大径部位以上は窓削りの後刷毛で、それ以下は窓削りで仕上げられる。裏面の頭部附近には指圧痕がある。裏面底部附近は粗い窓削りがなされ、他は指などで調整される。(7)は表面を叩きで整形した後、縦位の窓削りで仕上げ、裏面は刷毛で調整している。第42図は大型の變形土器で、や、内ぞりのある外反した口縁をもち、胴部はわずかにふくらみをもち、底部は丸底に近いと思われる。口縁下と底部近い胴部に一条づつの突帯がある。口唇部と突帯上には叩き目状のものがあり、口縁部と突帯の上下約10cmは櫛で整形され、それ以外の部分は叩きで整形されている。底に近い部分は叩きで整形の後、指などで仕上げられ、部分的に櫛も使用されている。裏面は櫛による整形である。(8)(9)は鉢形土器である。(8)は外反する口縁をもち、表裏とも刷毛で調整されている。(9)は口縁附近を指などで調整し、表面はそれ以下を小部分刷毛で調整する。

以上の出土土器を見た場合、全体として弥生終末期の様相を示しているが、(3)の様に土師器の様な堆が存在しているのが特徴的である。

(西 健一郎)

14. 第20号竪穴 (図版第九、第40図)

19号竪穴の南東に近接してある。上部は大部分削平されて、竪穴壁は南西角の一部と、西壁の南角近い小部分を残存するのみである。北東角附近は最近の溝により、南東角附近は21号竪穴により切取られている。西壁は約2.7mあると思われ、主軸は推定約3.7mの方向をN-27°-Eにとる長方形プランの竪穴であろう。ビットは5個あり、南壁中央寄りのビットは、棟持柱穴と思われる。北西側の方形に近いビットは、この竪穴とは直接関係がない。このビットを角として、この竪穴の床面より、さらにくぼみが認められる。このくぼみと19号竪穴との関係は不明であり、19号と20号竪穴との関係も不明である。西壁の外側では、焼土（点で示す）、炭化物（点線で囲む）が散見されたが、床面には全く認められなかった。

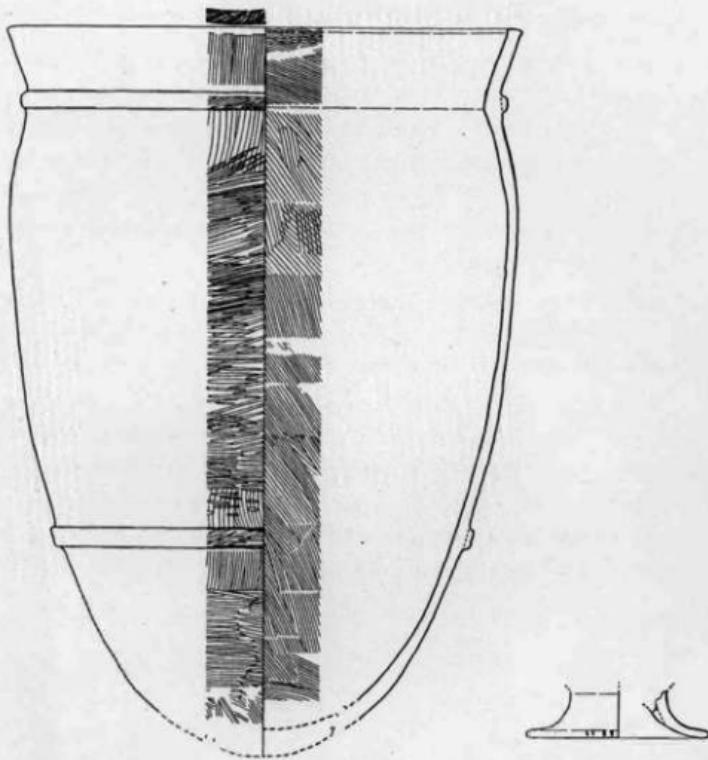
出 土 遺 物 (第41図)

竪穴内より出土した遺物は少量であった。(10)は西壁中央寄りのビット附近から出土した手づくね土器で、表面には叩き目があり、裏面の底部附近には指圧痕がある。口縁は外反すると思われ、焼成悪くもろい。東南角附近から出土した浅鉢があるが、ぼろぼろで図示できない。器形は21号竪穴の浅鉢と大差ない。(11)は北西側ビットより出土した高壺の口縁片で、表裏とも暗文がある。口唇部の内外が少しふくらみ、上部が少し凹み、やや外ぞりになった器形で壺下半分がない。(12)は南壁中央寄りのビットより出土した浅鉢で、焼成悪く損傷著るしい。

乏しい資料からではあるが、出土遺物は弥生終末期に近い頃に所属すると思われる。

その他、第43図の脚台付鉢の脚台部分が、竪穴西側の最近の溝より出土している。脚台の先端には刻み目がついている。20号竪穴の土器と、時期的な差異はほとんどない。

(西 健一郎)



第42図 第19号竪穴土器実測図(2)

第43図 第20号竪穴西側溝土器実測図

15. 第21号竪穴 (図版第11、第44図)

発掘区域の東側、20号竪穴の南に、20号を切り込んで21号竪穴が存在する。主軸線の方位はN—36°—Eである。東北隅壁は溝によって破壊され、又20号竪穴の西側を南北に走る小溝が東にまがり21号竪穴は尖端で切断されている。両溝は最近の耕作用の溝である。地下げが行なわれている為、竪穴はほとんど削平されて、壁高は10cm以内で特に南壁は確認できない。他の三壁の遺存状態は、北壁2.18m、東壁1.16m、西壁3.86mと悪い。復元すると南壁は推定約0.4m南に延び、略々4.26m × 3.2mの南北方向に長い不整四辺形プランが想定される。竪穴南下方に径80cm深さ16cmのレンズ状の窪みがあり、脚部を欠いた高壙（45図10）が上圧で碎けた状態で発見され、壺形土器（45図2）とともに竪穴の年代決定に有力な資料である。薄い炭化材片が床面に密着していたが、焼土は発見されなかった。

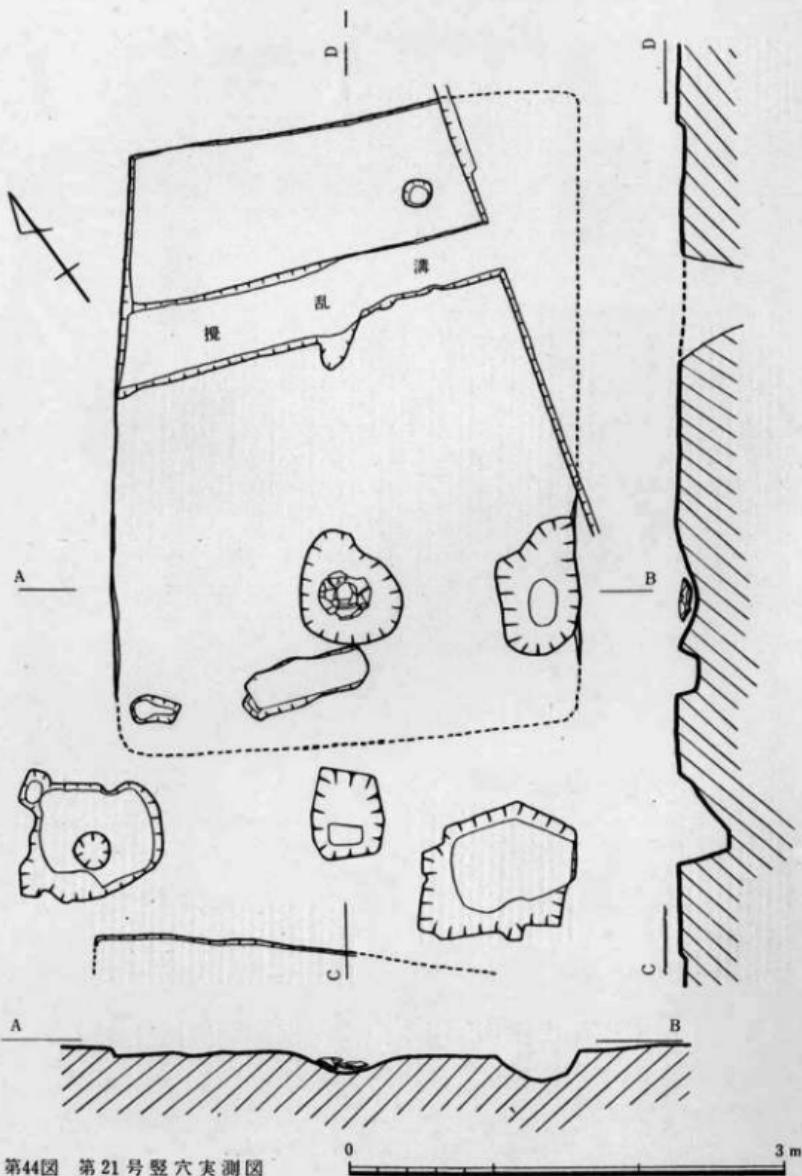
出土遺物(第45図)

竪穴内の遺物の量は少ないが、甌、壺、高坏、鉢、器台の五種が出上している。變形土器(3)は外反気味に直行する口縁端を上方に引き延ばしている。壺形土器(1、2)はわずかに外反する円筒状の口頭部を有している。(1)は肩は張らず、その上部は細い叩きの上を櫛でなで調整し口縁端は丸味を帯び、焼成が悪くもろい。(2)は球状の体部を有し内外面とも櫛を使い、口縁部上端はやや窪み外側を引き延ばしている。高坏(9、10、11、12)は坏部と脚部が別々に出土し、(10)は竪穴内寄りの窪みに据えられた状態で発見され口径約35cmの大形品である。中位の接合部は内面はわずかに段状を示すが外面は明瞭なカーブの変換点を有しない。

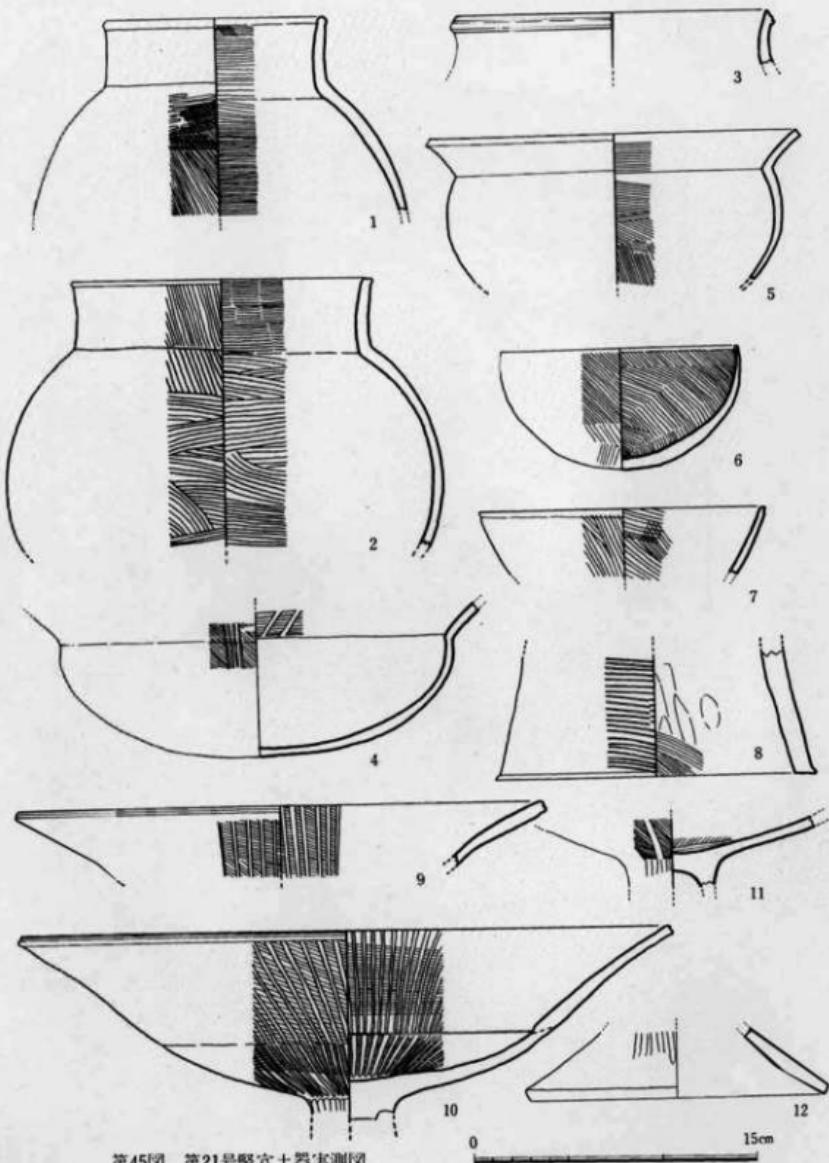
坏部内外面とも斜方向の櫛目の上を縱方向のヘラ削りすることにより華麗な暗文に仕上げ焼きしまりもよく優品である。(9)も同様に暗文に仕上げ、ヘラ削りの部分に丹を塗った痕跡がみられる。(9)、(10)は口縁端に一本の沈線を有している。(11)は(10)の上から出土し、櫛目の上をヘラで部分的に削っている。

鉢形土器には(4、5、6、7)がある。口縁部が「く字状」に外反する大形のものと、小形で底部から抜がったままのものがある。(4)は櫛目をヘラで部分的に削っている。(5)は(4)に比して底が深く短かい脚が付く可能性がある。(6)、(7)は内外面とも櫛目で調整し、特に(6)は内面をクモの巣状に仕上げている。器台(8)は外面に叩きを有し内面はヘラで粗くけずり、下端を刷毛で調整している。胎土、焼成がわるくもろい土器である。出土遺物より考えて本竪穴の時期は弥生時代最終末期と推察される。

(藤口健二)



第44図 第21号竪穴実測図

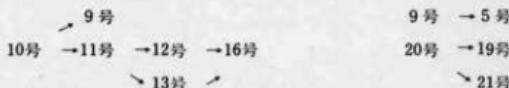


第45図 第21号竪穴土器実測図

第Ⅲ章 総括

1. 竪穴の構造と特色

発掘調査を行った竪穴は16個である。そのなかで重複関係によって先後関係を明瞭にできたのは11個である。これを図式で示せば次のようになる。



No.	大きさ (cm)		長軸方位	が	貯藏穴	ベッド	備考
	長辺	短辺					
1号	555	400	N 41° E	○	○		
2号	580	340	N 46° E	○	○	○	
3号	510	380	N 35° E				
4号	300	300 (+)					
5号	340	250					
6号	300 (+) × 450						未掘
7号	350 (+) × 350						未掘
8号	?	?					未掘
9号	90 (+)	190 (+)					
10号	600	400	N 55° E		○	○	
11号	600	420	N 65° W	○	○	○	
12号	370	300	N 60° W				
13号	390	280	N 40° W				
14号	300 (+)	310					未掘
15号	400 (+)	150 (+)					未掘
16号	430	360	N 53° E				
17号	380	230	N 36° E	○			
18号	560	500	N 46° E	○			
19号	370 (+)	200 (+)	N 40° E				
20号	370	270	N 27° E				
21号	426	320	N 36° E				
22号	480	× 290 (+)					未掘

竪穴はいずれも長方形プランをもち、一方の短辺にそったところにL字状ベッドをつくったものが3個ある（第2・10・11号）。また炉ははゞ竪穴の中央部にあるが、炉の存在はすべての竪穴に確認されたわけではない。発掘区域における竪穴の構造を整理してみれば表のようになる。

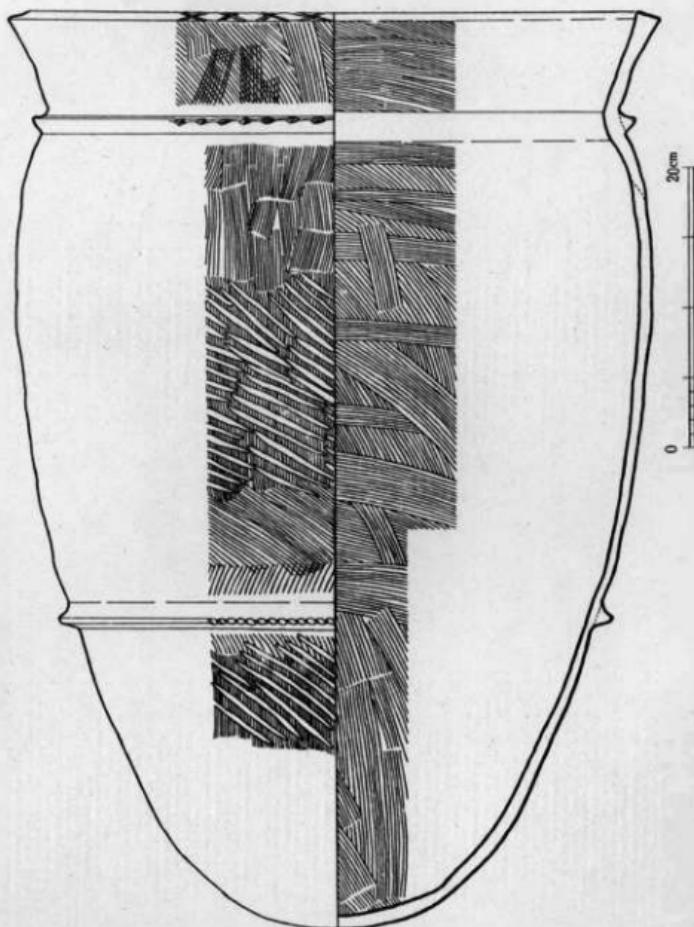
竪穴の分布からみると竪穴の長軸方位は北東一南西と東南一北西の二種に大別される。しかしこれは時期差としてとらえられるほどの明瞭な意味はない。むしろ二種の直交する方位の在り方は、家屋構造における入口の選定とか、わるものであろう。また家屋構造の復原を考える場合に必要な柱穴の配列は必ずしも明瞭でない。しかし長軸方向に棟をおく切妻構造であろうことは推察できよう。柱の配置には第18号竪穴に示されるように竪穴内部に四本柱を配するものと、第16号竪穴に示されるように長軸線上に一列に四本の柱を配し、両端の柱は竪穴の外にあって棟持柱を形成するもの、二方式があったようである。しかし柱穴の不明瞭な竪穴もあって、家屋構造を細部にわたるまで知ることはできず、この点将来の検討に待たねばならない。

さらにこの遺跡ではいかにも住居跡とするにふさわしい大きなものと、住居跡とするよりもそれと付属する一種の倉庫か工房のようなものではなかろうかと思われる小形のもの、二種に分つことができる。これが各竪穴の報告で住居跡という名称をさけた所以でもある。そうして後述するように土器の検討から細分してゆくと、同時に存在した竪穴は少くとも3個以上であったと思われる。竪穴個々の時期決定は後述する土器の検討によって最終的にきめられるが、総括的にいえば弥生終末期に主体があり、一部土師器の最古様式期に及んでいるということができる。（小田富士雄）

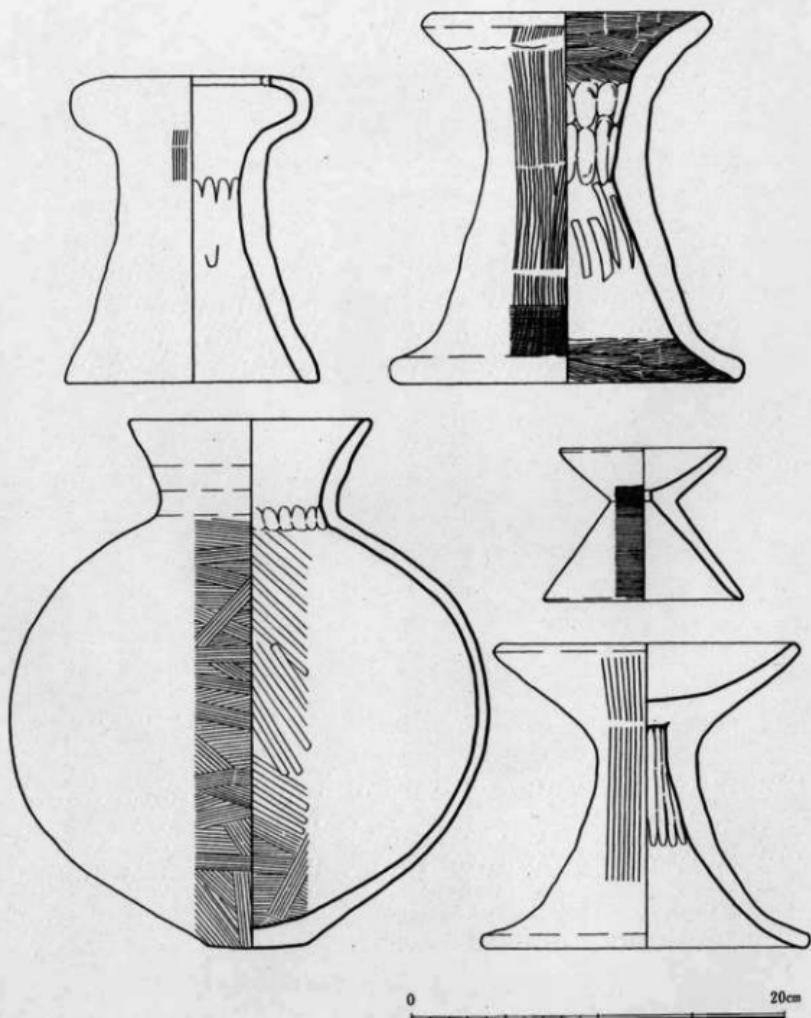
2. 弥生土器から土師器へ（別添付図参照）

近年、古墳発見の問題をめぐって弥生終末期から古墳時代初期の墳墓研究はにわかに活発になってきた。しかし九州地方における考古学上の時期決定に最も基本となる土器研究の面で両時期の区分を明瞭にすることを目的とする調査はほとんど行われていない。北九州における弥生時代の土器編年は前、中期にあっては好資料に恵まれ、今日ほど完成に近い状況にあるといつてもよい。しかし後期の土器編年には組合せを考える上にも必ずしも好遺跡に恵まれてはいなかった。大分県安国寺遺跡⁽¹⁾、熊本県野辺田遺跡⁽²⁾、下前原遺跡⁽³⁾などの重要な調査があったが、安国寺遺跡は東九州における終末期の好資料ではあるが、北九州では様相がかなり異っていることが予想されていた。また野辺田、下前原両遺跡は中部九州における重要な遺跡であって、すでに「野辺田式」なる形式名が流行しているが、遺跡、遺物の詳細な検討もなされておらず、報告書も未刊があるので実体は不明瞭である。⁽⁴⁾

北九州では古く森本六爾氏が後期に東郷式を立てられ、更に小林行雄氏はこれを修正して、後期（第三様式）に高三瀬式を提唱し、筑後高三瀬、筑前西新町の土器をあてられた。そうして東郷式は土師器の古い形式に下げられた。その後、杉原莊介氏は1940年の遠賀川調査をもとにして後期に伊佐座式、水巻町式の二形式を提唱され⁽⁵⁾、ついで1950年には終末の形式として雜飼腰式を立て、後期を三分する案を示したのであった⁽⁶⁾。しかしながら伊佐座、水巻町の両形式も川床における再堆



第46図 西新式斐形土器 実測図（福岡市今宿出土）



第47图 雜鉤限出土土器実測図

積の可能性が懸念され、報告書に示されたところをみても異形式土器の混入があつて標準遺跡とするには必ずしも最適の状況ではない。また雑駒隈式にいたっては具体的に資料も提示されていない。また森貞次郎氏は1955年に後期を三分することを示されたが¹⁹、この段階では各時期における資料も学術発掘によって厳密な意味での組みあわせを提起できる状況ではなかった。さらに1966年には高三瀧一下大隈一西新の三期分類を提唱された。²⁰この間、杉原莊介氏は1961年には雑駒隈を撤回して再び伊佐座一水巻町の二期分類法をとられ、今日に及んでいる²¹。杉原氏の伊佐座式は長崎県原の辻遺跡上層資料と同一視する意向のようである²²。その後、北九州では福岡市弥永原遺跡の調査があつて後期前半の好資料を得たが、未だ詳細は公表されていない²³。このようにみてくると、これまで北九州の弥生後期の土器編年は厳密な意味での好資料に基づいたというよりも、そのような意味での最適の調査に恵まれず、形式名は提唱されながら実体は不明瞭な憾みがあった。いわば北九州における弥生後期土器の編年は多分に仮説的段階としての性格をもっている現状にあるといえよう。

以上のような研究史を参考するならば今回調査した狐塚遺跡は弥生終末期を主体とする土器資料を豊富に提供し、組みあわせも確認できた点で、北九州における西新时期に相当する文化期の実態と土器編年に画期的成果をもたらしたと云っても過言ではない。狐塚遺跡における土器編年には、先ず重複した竪穴によって確実な先後関係をつかみ、次に各竪穴における土器の組みあわせと整形技法の観察を試みた。それによって編年の定まった土器資料を重複していない竪穴の土器資料と対照して全竪穴の編年上の位置を決定する方法をとったのである。この作業の基本となったのは竪穴の重複関係にみられる10号→11号→12号→16号の時間的推移であった。さらにこれにかなり多くの土器が出土して注意すべき組みあわせがみられた1号、2号竪穴を加えて編年の骨子がほくできあがったのである。かくして大別して三期の編年的分類ができるが、

第Ⅰ期は11号竪穴資料を中心にし、18号竪穴資料で補足した。10号竪穴の成立は時間的には11号竪穴より以前であるが、土器資料では11号竪穴と同じ様相が示されていて同一文化期におけるなかでの時間差とみられる。器種の組みあわせは壺、甕、鉢、高环、器台などである。壺は平底倒卵形胴に外反する口頭部がつき、口縁、肩に刻目を配する。甕は平底或は丸底長胴に短く反転する口縁がつく。肩に貼付帯をめぐらすものがあり、口縁、肩の帶に刻目或は交叉する刻目を配する。整形には叩きを施し、次に細かな刷毛目調整で仕上げるが、壺は多く叩きの技法はみられない。鉢には平底で口縁が外反するものと、丸底で底部から上方に広がったまゝに終るものがあり、時に脚台付や無頸壺のような形態のものもみられる。刷毛目調整や撫で仕上げの手法が施されるが、器面下半部の調整に削りの手法があらわれるのは注目される。高环は環部の中ほどで接合部が棱をつくつてさらに外反し、环と脚台には細かい刷毛目調整、脚部に距撫での手法がみられる。器台は叩き手法の仕上げで、単独で丸底土器の台となるものと、上面を斜面に仕上げて三個以上組みあわせて使用したと思われるもの（筒形器台と称されるもの）がある。

第Ⅱ期は12号竪穴と2号竪穴の資料を中心とりあげられる。両者とも壺、甕、鉢、高环、器台の組みあわせで、器形上からも第Ⅰ期の繼承によって成立している。しかし、詳細に検討すると2号竪穴資料には櫛目文土器の影響、粗い刷毛目調整、削り手法の増加などが目立ち、器形上にも直

口の甕、丸底壺などがあらわれて土師器への漸移的傾向がみられるので、大勢上は12号竪穴資料と平行するけれども、や、新しい時代へ移行する要素が加わってきているということになる。したがって12号竪穴を2号竪穴より若干先行するものとして区分を設けた。この期の後半において2号竪穴資料には甕、鉢、高环に削りの技法があらわれ、煮沸作業に使用された土製支脚がはじめてその時期を確認できたことの意義も大きい。編年図には21号竪穴資料を補足した。特に甕、鉢に東九州系の櫛目波状文が導入されていることは第Ⅱ期にのみ指摘される特色である。

第Ⅲ期は1号竪穴資料を中心に16号、19号竪穴資料を補足した。甕、甕には第Ⅱ期からの繼承がみられるが器壁は一段とうすい仕上げにす、み、鉢、高环、器台などには前時期からの繼承があるが、高环の环上半部は湾曲度が消えて直線的に延びる明らかに古式土師器の形態を備えたものが出現する。特に薄手丸底壺の出現はその精選された胎土、器形から明らかに第Ⅱ期と一線を画するものである。この丸底壺には口縁がわずかに外反する無頸壺と、頸部の発達した長頸壺がある。前者は箝研磨、後者は細かい刷毛目調整の仕上げである。しかしながら古式土師器に特有のいわゆる小形丸底壺とは異なるものである。以上のようにこの時期の組みあわせには弥生終末期と区別できないほどの器種のものと、古式土師器として認識せざるをえない器種が共存する在り方が確認できるのである。したがってこの時期をもって最古式の土師器文化期に認定すべきであろう。

× × ×

狐塚遺跡の資料検討の結果、弥生終末期として第Ⅰ期、第Ⅱ期を設定し、それに接続する最古期の土師器文化として第Ⅲ期を設定した。これはそれぞれ上北島第Ⅰ式、第Ⅱ式、第Ⅲ式として形式設定できよう。これをこれまでの編年体系と対比すれば、北九州における弥生終末期におかれる西新式に第Ⅰ式、第Ⅱ式があてられる。第Ⅲ式は最古の土師器として認識することができる。この遺跡では甕の形態にいわゆる高三溝式の名称で認識されている逆「く」字形の二重口縁形成につながるもののが一点もなかったことは注目される。従来西新式の名称で知られている卵形胴に外反する口縁部をつけ、刻目を配する形態のものが主流をなしている。以上を要約して発掘した竪穴の編年的位置づけを整理すれば次表のようになる。但し4号及び5号竪穴は奈良時代に下るものであるから除外してある。

上 北 島 狐 塚	I 期			II 期			III 期							
	10	11	12	13	16	19	20	21	17	18	3	2	1	
北 九 州							(+)							有 田 I
畿 内														布 留
関 東														五 領

この資料整理を通じてこれまで各地の弥生終末から古代土器に及ぶ文化期の検討を行ったが、未公表の資料が多いために具体的な資料の提示ができない現状である。したがって今後の公表に待つところ大きいが対比の意味で一応の見通しを述べて今後の検討に資することとする。先ず北九州では福岡市有田遺跡の調査結果から、古式土器として有田Ⅰ式を設定したが、これは弥生時代との間に少くとも一時期を設ける必要があり、この未確認様式こそ北九州の最古式土器になるであろうことを指摘し、それは弥生終末期の要素をかなり継承するものであろうと予想された。狐塚遺跡における上北島Ⅲ式はまさにこの空白を埋める資料である。しかしながら筑後地域の特殊性も考慮されるので、北九州ではさらにこの時期の標準遺跡を別に求める必要がある。1969年に福岡市教委で調査された福岡市拾六町・宮の前遺跡における箱式石棺墓と竪穴住居跡は上北島Ⅰ～Ⅲ式に相当する好資料で報告が期待される。またかつて西新式の位置を占めていた雜飼限式は実体不明のまゝ、撤回されたが、九州大学考古学資料室に保管されている資料による限り、広い地域の整地工事に伴う蒐集品であって少くとも二時期以上にまたがる混入があつて厳密な意味で標準資料とはなし難い。むしろ今回の調査を通してⅡ～Ⅲ期に相当する資料が注意され、それによっても筑後地域と同一にはあつかわれないことが改めて認識されるのである。

東九州では安国寺遺跡があげられるが、こゝではⅡ～Ⅲ期に相当する資料が含まれており、畿内の唐古Ⅴ式から庄内式に通ずる要素が指摘されるので、将来検討の必要がある。中部九州では野辺田遺跡の資料が十分検討されないまゝ、に弥生末期の様式として「野辺田式」なる名称が通用しているが、中間報告によてもこれもⅡ～Ⅲ期にまたがると思われる所以で厳密な検討が望まれる。

狐塚遺跡は筑後の一集落遺跡であるが、以上のようないくつかの検討を通じてみると、九州の弥生終末から土器への移行の実態をうかがう重要な遺跡であり、その占める位置は大きいものがあろう。

(小田富士雄)

註 (1) 九州文化総合研究所編「大分県國東町安国寺弥生式遺跡の調査」1958

(2) 田辺哲夫「野辺田遺跡発掘調査中間報告」(プリント) 1951

(3) 1957年田辺哲夫氏調査

(4) 野部田資料の一部は乙益重隆氏によって註(3)所掲解説の中に第V様式として紹介されている。

(5) 森本六爾「北九州における弥生式土器編年」(京紫史壇第51集) 1930

(6) 小林行雄「弥生式土器聚成図録正編解説」1939

(7) 杉原莊介「遠賀川一成前立屋敷遺跡調査報告書」1943

(8) 杉原莊介「古代前期の文化」(新日本史講座) 1954

(9) 森貞次郎「北九州」(日本考古学講座4) 1955

(10) 森貞次郎「九州」(日本の考古学Ⅲ・弥生時代) 1966

(11) 杉原莊介「日本農耕文化の生成」(日本農耕文化の生成・本文篇) 1961

(12) 水野清一・岡崎敏「豊岐原の辻弥生式遺跡調査概報」(対馬の自然と文化) 1954

(13) 小林行雄・杉原莊介編「弥生式土器集成・本編1」1964

(14) 福岡県教育委員会「福岡県弥永原遺跡調査概報」(福岡県文化財調査報告書第32集) 1965

福岡市教育委員会「福岡市弥永原遺跡調査概要」1967

(15) 福岡市教育委員会「有田遺跡」第3章 I 参照 1968

付 錄 周辺の遺跡・遺物

1. 常用遺跡(図版第13)

狐塚遺跡の南方1.2秆ばかりのところにある低台地の南端を一昨年から地下げしているが、多くの弥生土器が出土している。偶々狐塚遺跡の調査中に壺棺が発見されたとの報に接し現場を踏査した。畠地を約20mの幅にわたって地下げを行っており、切通し面に板付Ⅱb期に相当する壺棺が斜めに埋葬されている状態が観察された。地表下20~80cmの黒色土のなかに含まれている。そのうち露出していたものでは壺棺を鉢で覆うたものがみられた。付近で表採される土器には後述するように夜臼式の新しい形態のものから中期(須玖式)に及ぶ資料があり、住居跡と墳墓が重複する遺跡であることが知られた。計画的な調査が望まれる。(小田富士雄)

出土遺物(第48・49図)

遺物は採土工事の為畠地が1m位切下げられた際に発見されたもので、層位的な発見ではなく、狐塚遺跡調査期間中に一部採取したものである。石器にはサヌカイト製縦型石剣(22)がある。一部に自然面を残し粗雑な加工である。土器は(1・2・3・12)が夜臼式で(3)はやや内傾するII縁部の外側に縦長い刻目を入れ、唐津市汲田貝塚出土例と同様である。(5・6)は板付I式で(6)はII縁の反りが小さく夜臼式に近い形態である。

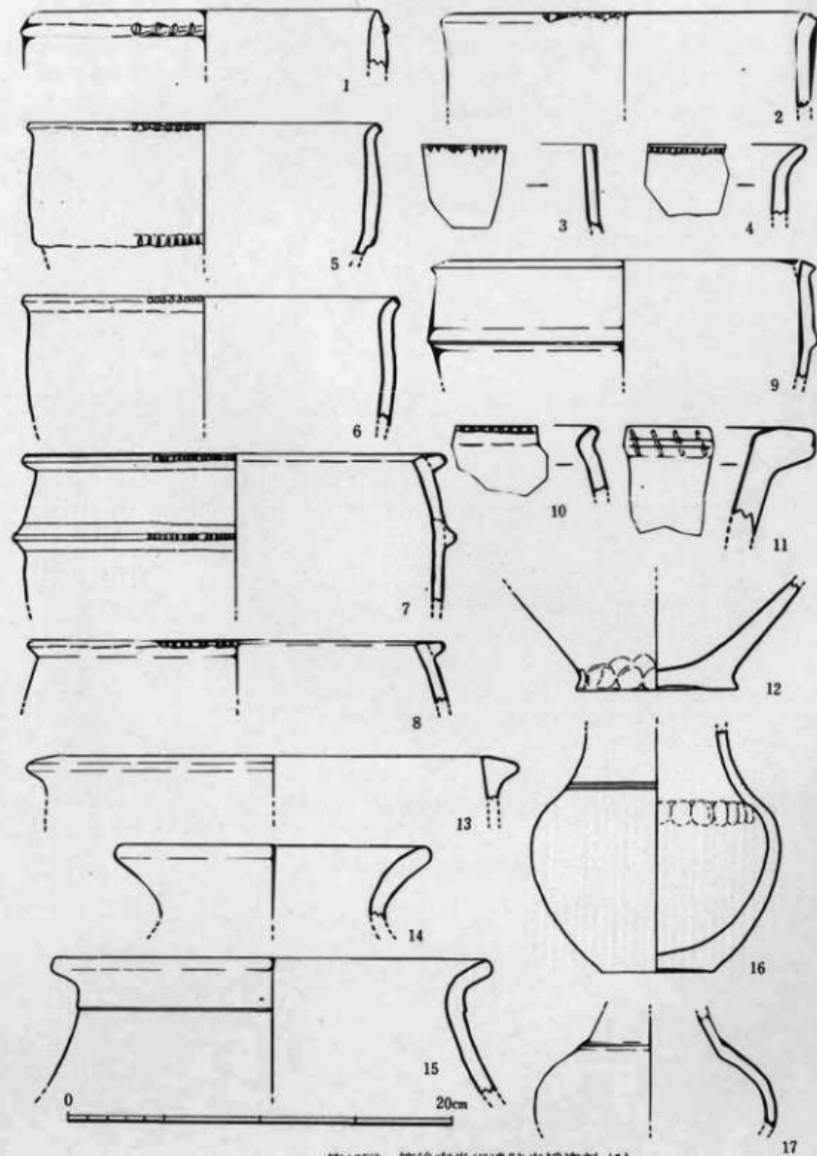
(4・7・8・9・10・11・13・15・16・18・19)は板付II式である。(7・8・9・10・13・16・18・19)は前期末のいわゆる龜の甲式で量的に多く当遺跡の中心的時期を推定させる。

(11)は金海式壺棺の口縁部である。(18)・(19)は鉢形土器で図版13に見えるように壺とセットで小児棺を構成したと考えられる。(17)は器高に比して胴部が張り、肩部に突帯を有する前期末~中期初頭の壺形土器である。(20)は半球状の鉢で、内面はナデによる整形、外面は刷毛による整形である。なお図以外にも八女高校郷土部発掘分に須玖式の大形壺棺が、又地下げした畠地の断面に板付II式らしい三組の小児壺棺が観察された。(20)は筑後市長崎南原出土の滋賀里式土器の文様を有する壺形土器である。

(藤口健二)

2. 裏山遺跡

昭和38年狐塚遺跡の東南1秆ばかりの低台地上に堅穴住居跡が発見され、岩崎光氏によって調査され概報も刊行されている。現地には岩崎氏らの努力で二軒の堅穴住居の復原がなされている。堅穴Iは東西6m・南北3.6m・堅穴IIは東西6.2m・南北4.4mの長方形プランで、一部重複しており、堅穴IIの方が古い。共に中央に炉、壁寄りに方形穴(貯蔵穴であろう)があり、堅穴IIの東壁ぞいにはベッドがある。出土品には壺・甕・鉢・高杯・器台の組みあわせがみられ、堅穴IIから

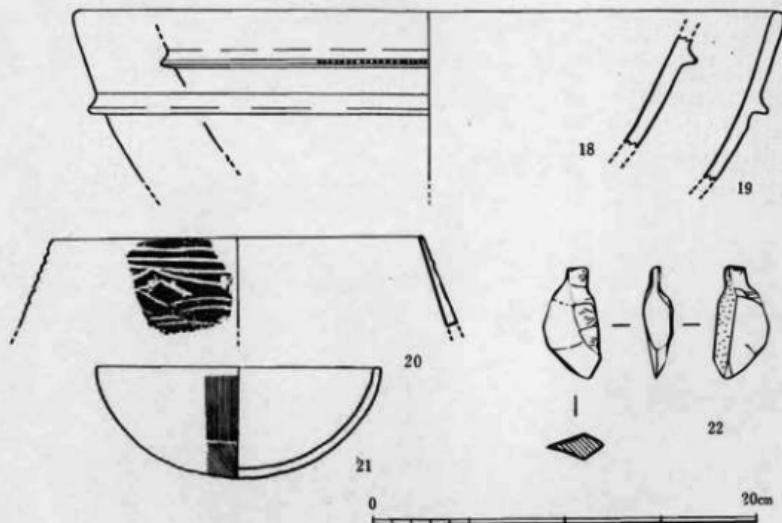


第48図 筑後市常用遺跡表採資料(1)

は17個の青緑色ガラス小玉が発見されている。土器資料の示すところ狐塚遺跡の第Ⅰ～Ⅱ期相当と思われる。本遺跡の下層には縄文早期の穀粒押型文土器の包含がある。狐塚遺跡の成果をもとにして再検討が望まれる遺跡である。

(小田富士雄)

注 岩崎光「裏山遺跡調査概報」筑後市教育委員会1966



第49図 筑後市常用遺跡表採資料(2)

3. 筑後市域の弥生・古墳時代遺物

— 筑後市郷土室資料 —

(A) 筑後市周辺の弥生土器

筑後市中央公民館郷土室に陳列されている土器を中心にして、弥生中期から主には上北島狐塚遺跡と関連する弥生後期後半～終末期のものを取りあげる。出土地、出土年月は下記のとおりである。

第50図-1. 出土地不明

- ◆ 2. 筑後市藏数（住居跡）（岩崎氏所蔵品）
- ◆ 3. 濑高町坂田字大塚 1958年6月24日
- ◆ 4. 筑後市前津 1957年2月
- ◆ 5. 筑後市若菜

- ◆ 6. ◆ 下北島久清
- ◆ 7. 出土地不明
- ◆ 8. 筑後市下北島久清
- ◆ 9. ◆
- ◆ 10. 筑後市前津 1956年1月8日

第51図-1. 八女市龜の甲(岩崎氏所蔵品)

- ◆ 2. 筑後市、九州農業試験場筑後分場果樹園内
- ◆ 3. 筑後市若菜字森防 1955年12月22日
- ◆ 4. 出土地不明

第50図-1、2は袋状口縁を有する細頭壺で2は弥生中期後半、1は後期前半に属する。1は口縁部に不明瞭な棱をもち、頸部は比較的短く肩部へとづく。肩には2条の凸帯を持ち、胴部に一条の凸帯をめぐらしている。口縁部は横になでて調整するが、全体としてはへらでなでて整形している。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬い。2は全面(外部)に丹塗りをほどこし、胎土も良質の粘土を用いている。口縁は棱をつくらず丸みをおび、口縁直下に一条の三角凸帯をめぐらし、頸は長く胴部につづいている。胴は扁球形を呈する典型的な袋状口縁の細頭壺である。

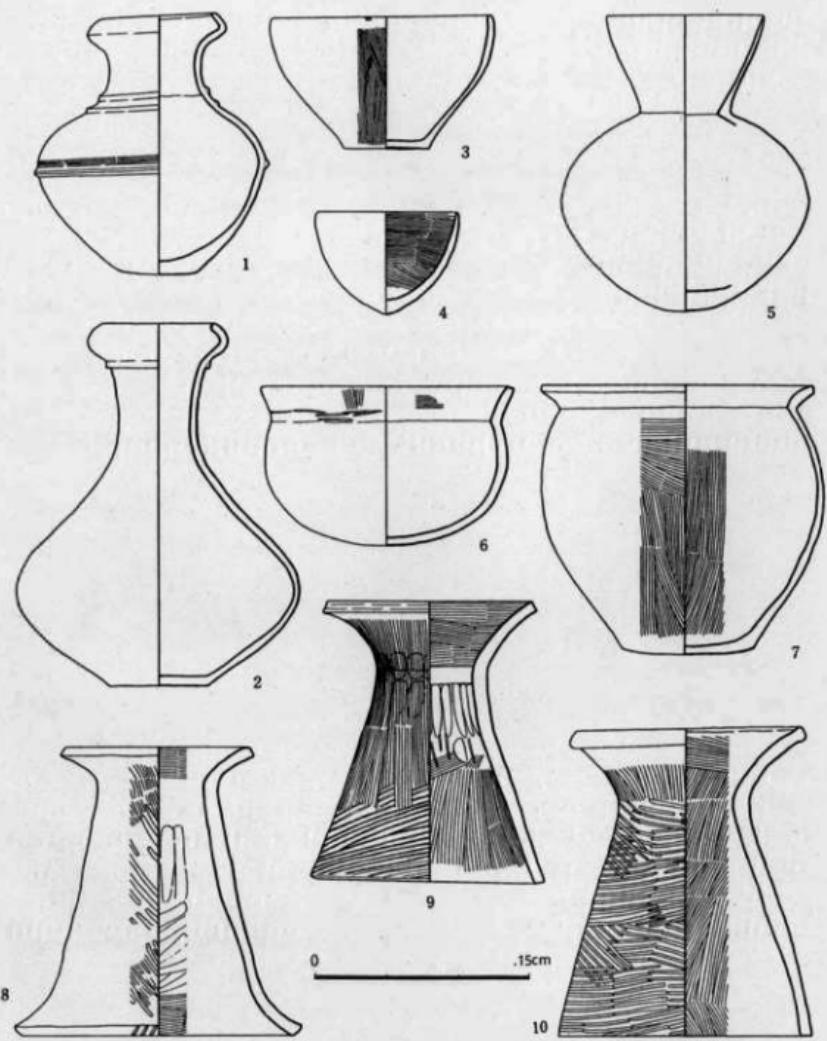
第51図-1は袋状口縁をもつ大形の壺である。肩に2条の凸帯をめぐらし、胴は大きく張ると思われるが、胴部以下はない。内外面ともに粗い刷毛で調整するが、口縁部はなでている。時期は後期前半に属するものである。

第50図-3は後期前半に属する鉢形土器である。内面は黄褐色を呈するが、外面は火を受けて黒色を呈している。胎土中には細かい砂粒を含み、焼成はやや堅緻である。外面は刷毛で縱方向、又は斜めに調整を施している。

第51図-7は後期後半の壺であるが、この種の土器が、終末期の前段階のもので、福岡市弥永原出土土器と同時期に属すると考えられる。口縁は外反し、胴径は口縁径よりわずかに大きい。底部は不安定な感じを与える平底である。口縁から肩にかけては横になで、胴上部は、横方向又は斜行して刷毛で調整し、下部はやや斜行して縱方向に刷毛で調整している。

第51図-3は終末期の壺形土器で、今回、2号竪穴より出土した土器に類品がある。(第10図-8参照)、大形品であり、口縁径14cm、器高35.2cmを計る。口縁はわずかに外反し、胴は卵形をなし胴上部に最大径がある。口縁部は円外ともに横になでて調整し、外面の胴上半分は叩目を残し、その上に部分的に粗い刷毛目がある。下半分は粗い刷毛で調整している。内面もあらい刷毛で調整し底部は指でおさえて整形している。器壁は厚く重厚な感じを与える。

第51図-4は、口縁部は外反し、肩と胴中央部に凸帯をめぐらし、口唇部と胴凸帯に刻目をもった形の終末期の壺の完形品である。今回の調査では完形品の出土はないが類品が、2、3、11、12号竪穴等より出土している。口縁部は斜行する粗い刷毛で調整するが、口唇直下は横になでて刷毛目を消している。胴部も粗い刷毛で斜めに調整する。内面は全面に横方向に粗い刷毛で調整し、部分

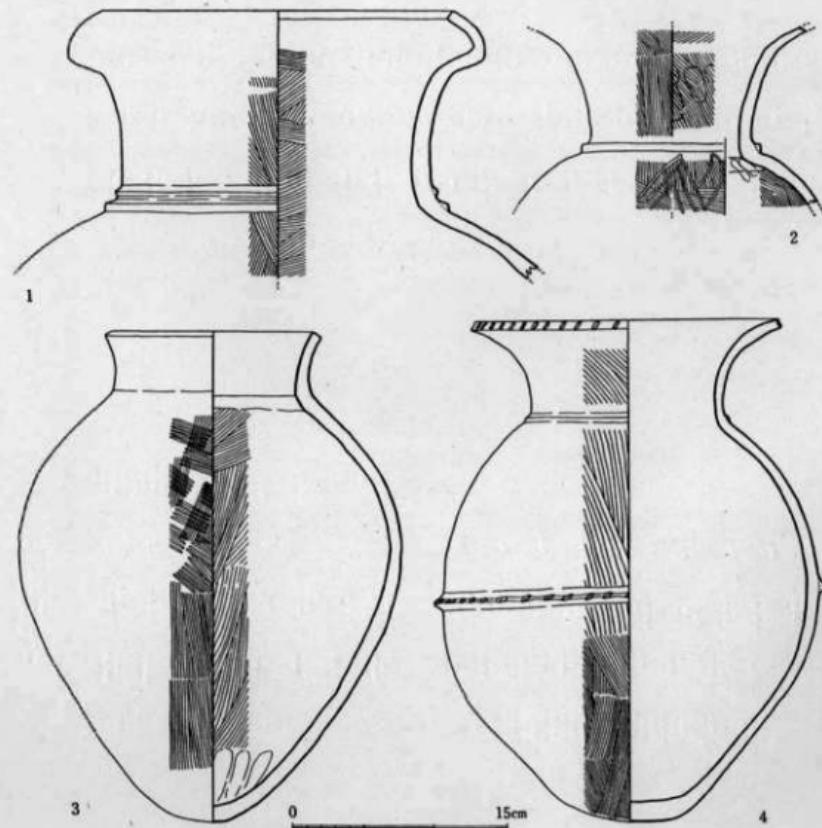


第50図 弥生土器実測図(1)

的であるがへらで縦に削っているところもある。底部は一部に棱がつくところがあり、平底のおもかげを残しているが丸底といえる。

第51図-2は、口縁の一部と胴部以下を欠いている。口縁は外半し、肩部に一条の三角凸帯をめぐらし、その上下を横になでて刷毛目を消している。凸帯下の肩部にへら描の線刻があるが、何を描いているかはわからない。内面は、口縁、肩を指でおさえた後刷毛で調整し、その後、部分的には横になでて刷毛目を消している。終末期に属するものである。

第50図-6は終末期に属する鉢形土器で、今回の調査においても類品が多く出土している。外反する口縁をもち、胴はゆるやかに張り、底は丸底を呈する。全面に叩き整形のあとなでて叩目を消し



第51図 弥生土器実測図(2)

ているが、くびれ部には印目が残っている。外面の口縁部は縦方向に刷毛で調整した後、横になじて刷毛目を消している。口縁内部は横方向の刷毛目をなして消し、内面は指でなじて調整している。第50図-4は、小形の壺で終末期に属する。口縁は丸みをおびて薄くなり、底は少し尖りぎみである。外面はへらで縦方向に削っているが、口縁部のみは横方向になじていている。内面はゆるく斜行する刷毛目がある。

第50図-8・9・10は器台で少しづつ形態が異なるが、時期はすべて終末期に属する。8は、口縁脚部とともに外に開き、脚底部には刻目をもつ。外面は口縁下に縦方向の刷毛目があるが、あとは印目が全面に残っている。部分的には印の上をよこになじてているところもある。内面の口縁部は櫛で横方向に調整し、胴上部は指でおさえ、下部はへらで横に削り、脚部は刷毛で横方向に調整している。9は、口縁は外反する。外面の口縁は横になじ、頸部は指でおさえている。胴上半は縦方向に刷毛で調整し、下半部の印目の上にまで部分的にはのびているところもある。下半部はゆるく斜行する横方向の印目がある。内面の口縁部は横方向の刷毛目が施され、頸以下はへらで削った後、下部では縦方向の刷毛目がある。10は、口縁は外反し、口縁下は縦方向の刷毛目があるが、口縁直下はよこになじて刷毛目を消している。頸部以下は全面に横方向の印目が残っている。内面は全面に刷毛で調整をしているが、口縁直下は横になじて刷毛目を消している。

第50図-5は、わずかに内湾する、薄手でやや長い口縁部をもち、中央部でやや張るが球形に近い胴部をもつ、細頸の壺であるが、古式に属する土師器である。

(橋口達也)

注 (1) 福岡市教委「福岡市弥永原遺跡調査概要」1967

(B) 筑後市周辺の土師器

出 土 地	発見年月日
(1) 筑後市若菜字森防	1955年12月23日
(2) *	1961年12月 (大崎一郎方出土)
(3) *	1958年1月 (*)
(4) 筑後市若菜字経塚	1955年1月9日
(5) * 若菜字森防	1958年2月 (橋本種藏方出土)
(6) * 和泉	1957年2月16日

(1)は菱形土器である。口縁部径13.3cm、器高14.2cmを計る。外反した短かい口頸部を有し、口唇部は丸くなる。これに丸い肩部が続き、球状の胴部に丸底がつく。頸部で厚くなり、内側には明瞭な稜がはいる。器壁は整っており、外面は研磨している。内面はへら削りを施していて、口縁部はその上を横方向になじていている。外面も同様にへらで削っているが、上半部はその上を部分的に縦方向にハケでなじていている。口縁部は横なじで仕上げている。色調は淡褐色を呈し、胎土には砂粒を含

んでいる。

胴部下半には黒うるしを塗布していたような形跡が認められる。

(2)は一部に丹塗りの痕跡が認められる壺形土器である。丸い胴部以外に丸く折れた口頭部をもつ厚手の完形土器である。胴部最大幅部と底部の中間に焼成後器壁外面より穿孔した孔をもつ。底部は丸底である。口縁部は外に開いており、口唇部がわずかに平らたくなって、稜がはいる。口縁部はまるく頭部に統き、そのまま肩部に移行する。胴部はまるく同じ傾きで底部まで統く。胴部最大幅は中央部にみられる。

土器は確認できるだけでも4カ所の接合が認められる。すなわち板状の粘土帯を積み重ねて形をつくりあげ、全体を指あてで整え、内面はその上をヘラで削って成形している。そのために内面底部には指圧痕が残り、胴部にはヘラ削りのあとがみられる。外面は最初に指でおさえ、ヘラで成形し、最後に刷毛で器壁を調整している。全面に短かい刷毛目が施されている。また口縁部には回転に伴なった水引きによる横なでが施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には数多くの砂粒を含み、表面は割合いなめらかである。一部に丹塗りの痕跡が認められる非常に焼成のよい土器である。出土状況がはっきりしないけれども4世紀後半代のものであると考えられる。

(3)は高坏で、坏上部と脚部の開きを欠失している。坏部は二段に折れ、口縁が聞くタイプのものであるが、欠失のために口縁は観察することができない。坏部は斜めに開き、それに統いて2・3cm真直ぐ立ち上がり、その上に口縁が外に開いている。脚部は筒状の部分から急に折れており、裾部は幾分内傾している。筒状の部分は内側が削られずに柱状となり裾部のみが開いている。

製作技法は、粘土帯の積み重ねであるが、接合面は杯部下半に1カ所認められるだけで、あとは不明瞭である。全体の形を整えた後、坏部内面は櫛で横方向になでて調整した上をヘラでみがいでいる。外面は櫛目がほとんど認められず、わずかに外に折れるところに縱方向に短かい約5mmの長さの櫛目がみられる。器壁はヘラで削って成形し、指なでによって仕上げている。脚部は全面を縱方向に櫛で成形し、柱状の部分は規則正しく縱方向にヘラでみがいでいる。裾部は櫛目だけで、ヘラを使用していない。裾部の内面は櫛を立てて回転させ削りとっている。そのためにくもの巣状の櫛目が認められる。櫛は内外面とも1種類の使用である。

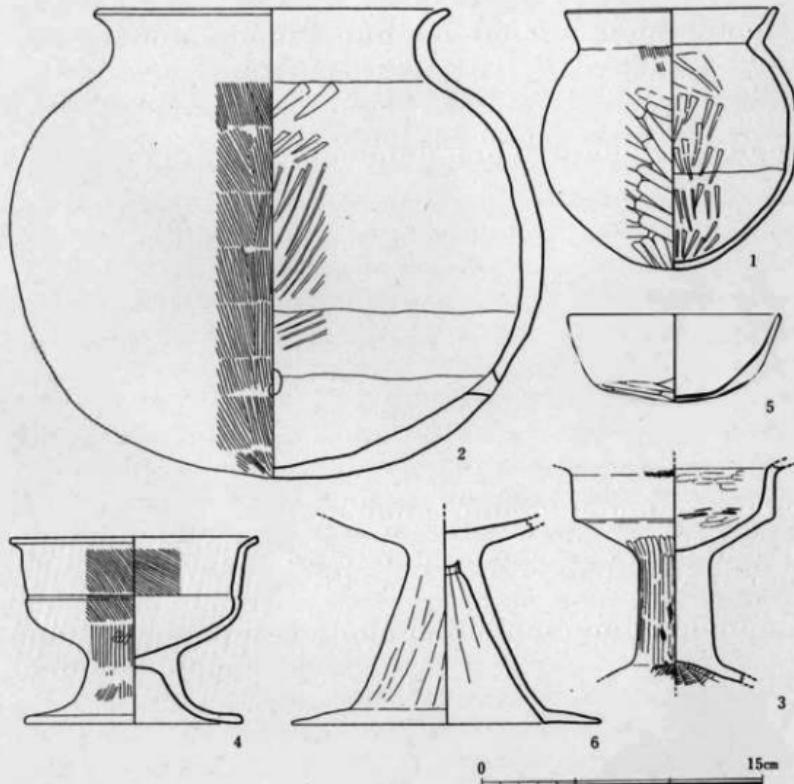
色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を含まず精製した良好のものである。焼成も非常に良好である。(2)の壺形土器と同一地からの出土で、技法には異なりがみられるが、その形からしても同一時期のものとして間違いない。

(4)は高坏状のものであるが、通常のものとは形を異にしている。低い脚に鉢を乗せたような恰好をしている。口縁部径13.1cm、高さ10.2cm、裾端径11.5cm、脚の高さ3.5cmを計る。口縁部は短かく外弯し、傾きを変えて下へ統き、沈線をもち、そこで一担張りそのまま底へ流れる。それに脚がつく。内面は口縁より中央部まで櫛を使用し、外面は全面櫛で整形している。

(5)は壺形土器である。ほど球面にそって立ち上がり、それに比して平らな底面を形成している。その傾きの接点はヘラ削りのあるなしによって決定する。径11.3cm、深さ4.8cmで口唇部内側が丸みをもっている。

内外面とも一応ヘラで成形しているが、内面底部は指でおさえ、上半部は横に刷毛でなでて仕上げている。外面底部はヘラ削りのまゝにしているが、上半部は内面と同じく横方向に刷毛でなでている。刷毛は内外とも同種のものを使用している。焼成は良好である。類似のものが11号住居址から出土しているが、それに統く時期のものであると考える。すなわち初期の土師器ということができる。

(6)は高壺である。壺部を欠失しているが、幅での径16.4cm、脚部の高さ 9.7cm、くびれの部分で径 3.8cmを計る。壺部は途中で一段折れて、なゝめ上方へ直線で延びるタイプのものと考えられる。脚部は筒状になっており、下方に向って拡がり、稜をもって折れ、裾部に統く。裾部底面は平らになって脚を安定したものにしている。



第52図 土 師 器 実 測 図

その製作技法は環部と脚部とが接合されたもので、その為に筒部の内側に粘土の張り出しが認められる。器壁の整形にはヘラが使用されており、筒部の内外面とも縦方向のヘラ削り痕がみられる。環部と脚部の外面はその上をなでによって仕上げている。

脚部の特徴、すなわち斜め下方に自然に拡がり裾部が横へ開くタイプは関東の和泉式土器に類似している。
(佐田 茂)

(C) 筑後市周辺の須恵器

第53図は筑後市中央公民館郷土室所蔵の須恵器資料の一例である。資料には古墳時代から歴史時代のものまであり、今日ではすでにその出土状況を知ることは困難となっているばかりか、中には出土地の不明なもの、あるいは出土した遺跡の性格が判然としないものも含まれている。以下出土地域ごとに叙述する。

筑後市広川町知徳古墳出土資料（53図1）

环の口径 8.4cm を測るやや小形の蓋環である。蓋受け立ち上りはかなり高いが全体として古式の特徴はすでに失なわれている。暗灰色を呈し精良な粘土を使用している。外面は入念なナデによって仕上げられておりヘラ削りを示す痕跡は見られない。蓋・身とも外面中央部にヘラ記号を有する。須恵器第Ⅲ型式後半（六世紀中ごろ）に属するものであろう。

筑後市欠塚古墳出土資料（53図3）

中央部の窪んだ高いつまみをもつ蓋で、高环に付属するものとみられる。口径11.6cm、高さ 5.5 cm である。天井部には入念なヘラ削りがほどこされており、体部との境いには鈍い段が形づくられて垂直に近く下降し口縁にいたる。口縁部の仕上げは古式の特徴を残すものであり、第Ⅱ型式（六世紀前半）に相当しよう。

山門郡平田古墳出土資料（53図7）

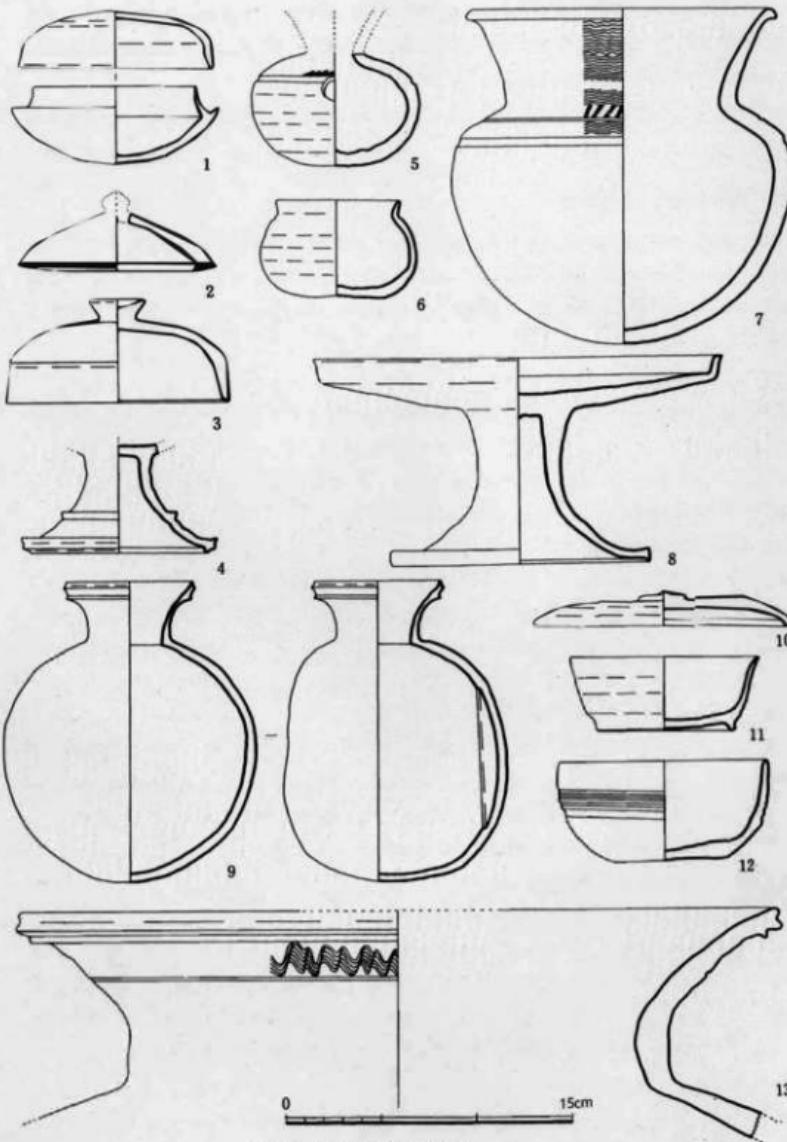
口径15.4cm、高18cmの蓋である。内外面とも叩きをすり消しており、頸部と肩部には櫛描波状文・刺突文で装飾している。波状文は整美なものではない。頸部に通常めぐらされる沈線は消略されて波状文を一部すり消すことによって表現されている。古式須恵器が次第に変化してゆく過程ということができ、上記高环の蓋と同様の時期が考えられる。

山門郡瀬高町金栗出土資料（53図4・5・8）

(4)は有蓋高环の脚部とみられるが、中央部に突帯を設ける手法はこの地方を含めて北九州地域ではほとんど他に類例をみないものである。(5)の腹とともに時期的には第Ⅲ期より下降するものではないであろう。(8)の高环はいわゆる高盤といわれるものに相当するとみられ、盤部は口唇上面が平坦な断面を示し脚の安定はよい。時期的にはすでに平安時代に降るころのものであろう。灰白色を呈し使用された粘土は精良である。脚内面には成形の際のひねりの痕跡が残っている。

筑後市若菜出土資料（53図2・6・10~13）

(2)は最大径10.4cmで、現在つまみの部分を欠失しているが本来凝室珠形のつまみを有するとみられる。器の厚みがあつく技術的には稚拙である。(12)とともに第V型式に相当しよう。



第53図 須恵器実測図

(10・11)は奈良時代に属する資料である。蓋は扁平な宝珠形つまみをもち口縁部には短かいL字形の突出部をつくって身を受ける。身は低い高台を有し、体部から口縁にかけてなめらかに外弯して器壁の厚みもほぼ一様に仕上げられている。(13)は大甕の口頭部で、口径は46.6cmある。

出土地不明資料 (53図9)

(9)の提瓶は高さ16cmあり、側面の一方に扁平な傾向があらわれている。口縁部にはしっかりした突帯がつくられており、形態的に八女市桑場古墳出土資料に類似している。⁽¹¹⁾時期もほぼ同じころとみてよかろう。

(真野和夫)

注 (1) 小田富士雄「筑後における須恵器の編年」(塚ノ谷窯跡群) 八市教育委員会 1969

狐塚遺跡追補遺物（第54図）

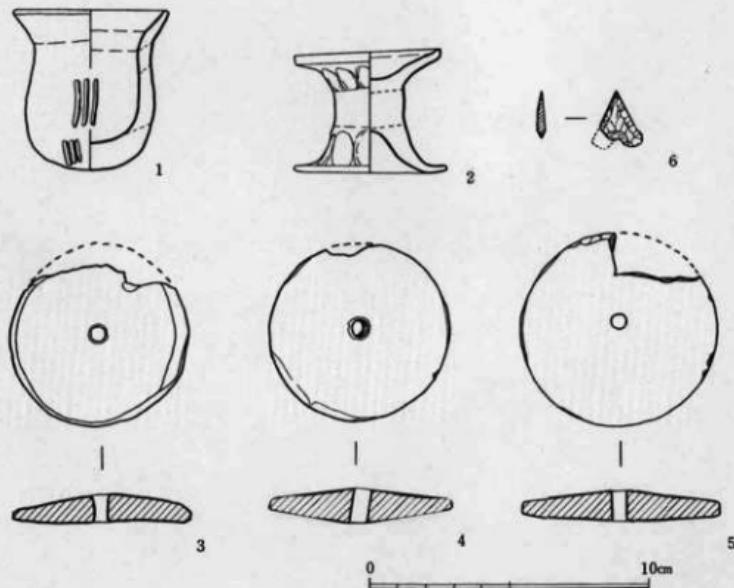
本遺物は今回の調査に地元高校の考古学部員の採取になるもので、詳細な出土地点、他遺物との確実な共伴状態は解らない。1、2（第1号竪穴出土）は手づくねの土器で、胎土は極めて良好である。1は一部に縦横方向の叩き目が、2には指圧成形のあとが残っている。1、2とも第1号竪穴出土と考えてよい。

3、4（第2号竪穴出土）5（第10号竪穴出土）は土製紡錘車で、いずれも穿孔は焼成にさきだって行なわれている。外周の厚さは均一ではなく、3は外円端をヘラでけずっている。

	直 径	現 重 量	復 原 重 量
3	6.4cm	31 g	約35 g
4	6.5cm	38 g	約38 g
5	7 cm	41.5 g	約45 g

径、現重量、復元重量は、表のごとくであり、断面の形態は板付遺跡出土例（前期）と相似するが、径はより大となり、重量は弥生時代の紡錘車の中では重い部類にはいる。弥生時代終末期前後の紡錘車の好例である。

6はサヌカイト製の石鏡で第12号竪穴南側ピット中よりの出土であり、竪穴の時期より先行する可能性がつよいようである。（藤口健二）



第54図 追補遺物実測図

編 集 後 記

昨年5月に発掘調査を終了して以来、まもなく九州大学の紛争が始まり、過激派学生達による学内封鎖が続き、機動隊導入によって10月14日に封鎖が解かれるまで5ヶ月にわたって研究をストップさせられるという異常事態のなかにあった。この間発掘資料などに被害をうけるのではないかという懸念もあったが、幸いにも無事に過ぎ、学内整備などがあって、実際に遺物整理に入ったのは12月になってからであった。おくれた授業をとりもどすべく、教官も学生もあわただしいなかにあって、整理のすゝむにつれて数回にわたって研究室内での討論を試みた。参加者全員、弥生時代終末期の空白を埋めようとする作業によく協力して限られた期間内に本書のような成果をまとめることができた。また毎回にわたる討論には森貞次郎先生にも御参加いたゞき、北九州の弥生土器編年になたずさわってこられたこれまでの研究史をはじめ、各地の弥生土器討論にも多くの助言をいたゞいたことは本書をまとめる上にきわめて有益であった。狐塚遺跡は弥生終末期の一集落跡にすぎないが、この調査を機に、これまで曖昧なまゝにされている九州各地の弥生終末期の資料をとりあげて比較検討を加え、前むきに解決をはかるとする姿勢をとろうとしたものであった。本書の成果は少くとも将来、筑後地域における弥生終末期研究の指針となるであろう。今回の整理を通じて九州各地域における現状と問題点を確認することができたと信ずる。またこの討論に参加した諸君のなかからさらに各地のこの時期をとりあげ、問題を発展させるであろうことをも期待している。

今回の調査には前半を佐田茂君、後半を橋口達也君が諸般の世話をあたり、整理までの推進役となつた。また遺物の復原、撮影の準備には橋口君があたり、原稿の最終整理には木村幾多郎君、西健一郎君、図面の最終整理には藤口健二君の助力を得た。かくして考古学研究室の参加学生一同協力して編者の意図を理解し、よく支持していたゞいて成ったのが本書である。こゝに多くの人々の協力によって出来上った経緯を記して感謝申しあげる次第である。(1970・3・25 小田富士雄)

狐塚遺跡

—福岡県筑後市上北島集落遺跡の調査—

昭和45年3月31日発行

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市舞鶴1丁目2の5

図 版

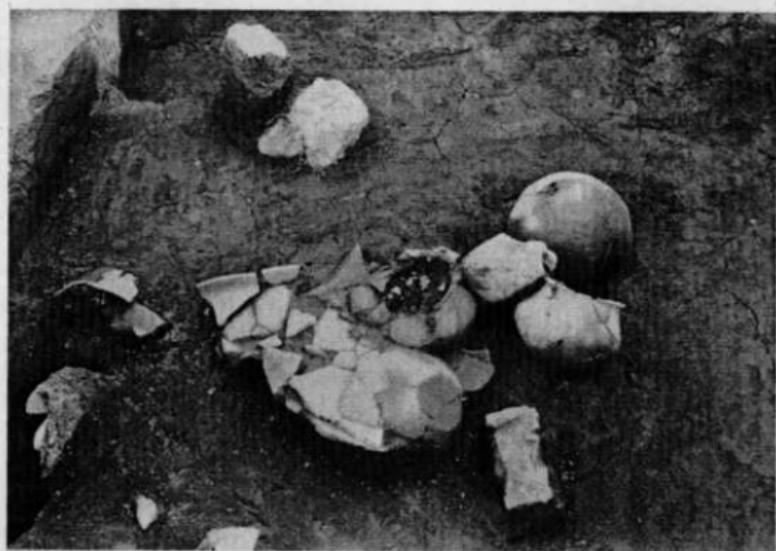
PLATES



図版第一 道路全景（南より）



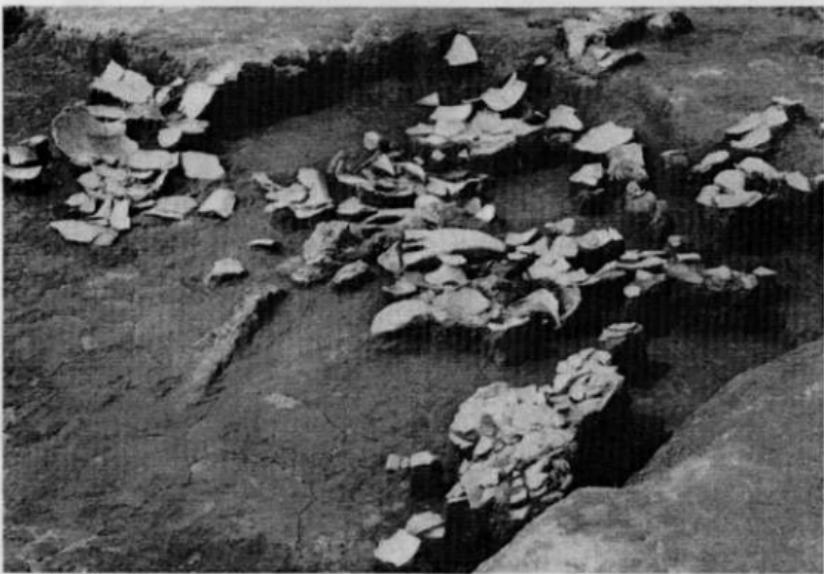
第1号竪穴全景 (南より)



方形穴内遺物出土状態 (北東より)



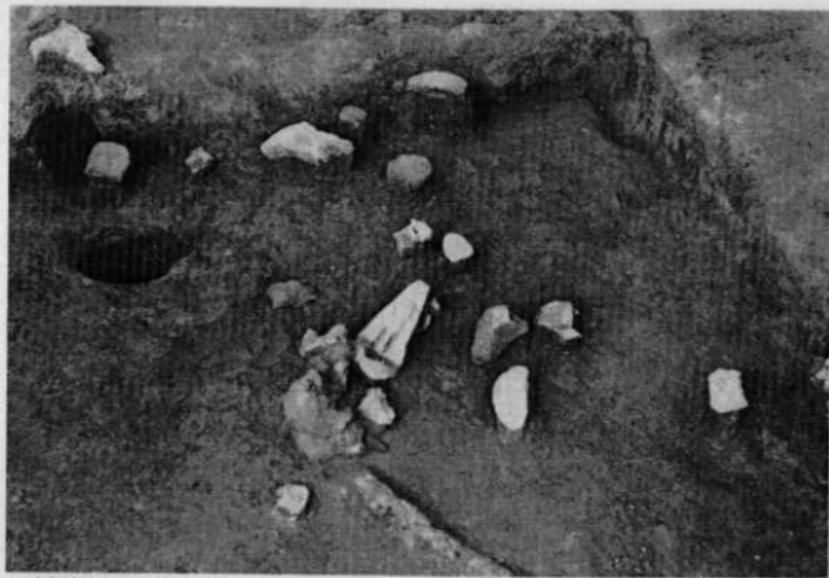
第2号竪穴全景（南西より）



遺物出土状態（南より）



土製支脚及び土器の出土状態（東南より）



土製支脚のみの出土状態（南より）

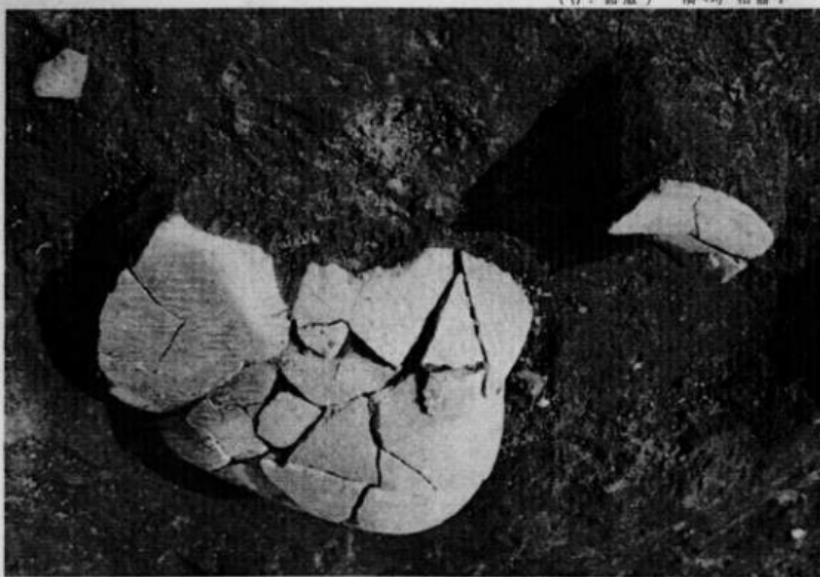


第3号竪穴全景 (東より)

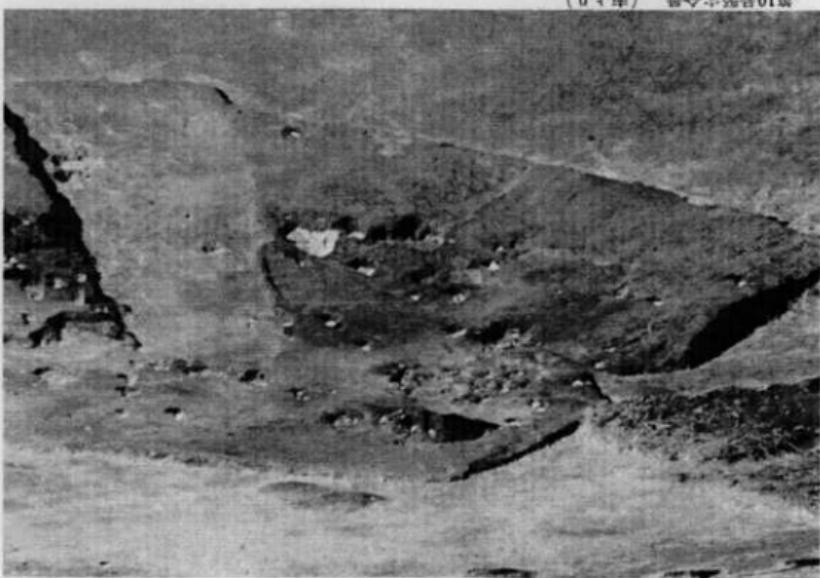


第4・5・9号竪穴全景 (南西より)

(0: 距離) 捕食場 相機下



第10号蒙古全量 (周 2.9)



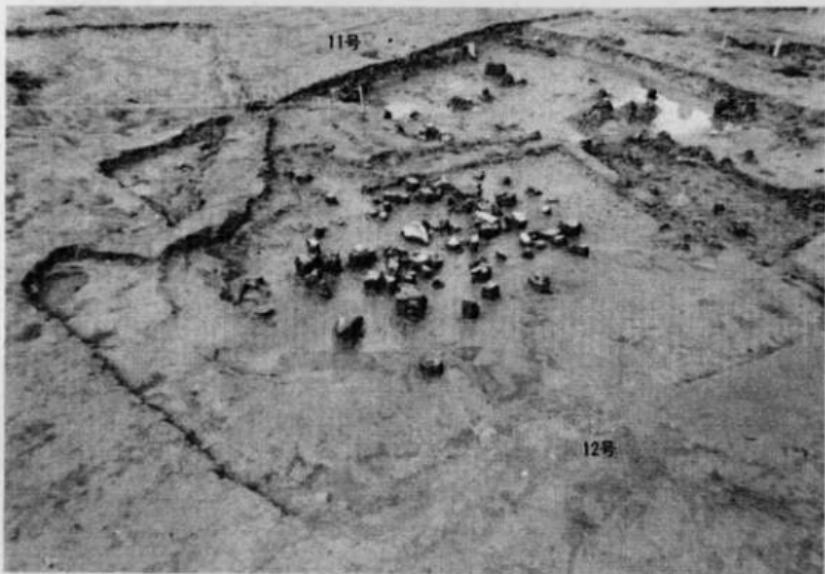
10號蒙古

大遺物圖

第11、
12号
堅穴



第10・11・12・16号堅穴全景 (南より)



第11・12号堅穴全景 (北東より)



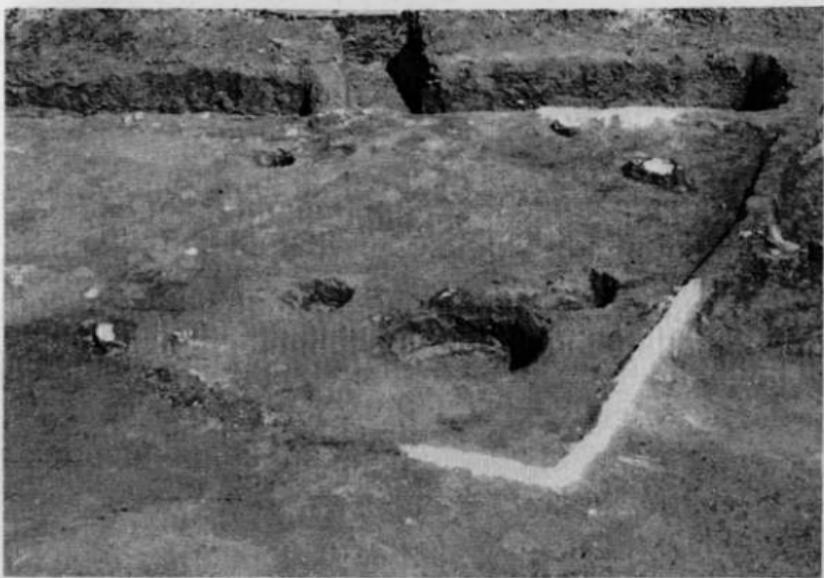
土器出土状態（北より）



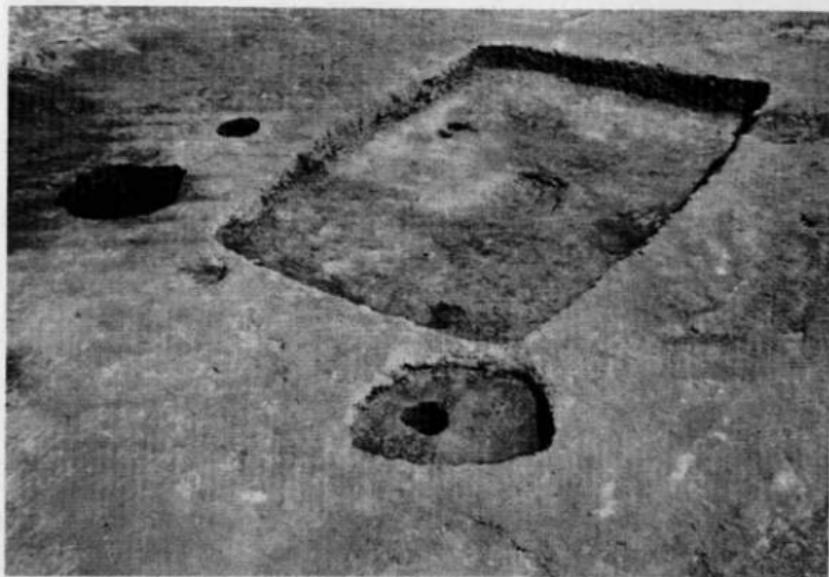
横目波状文のある鉢出土状態（北より）



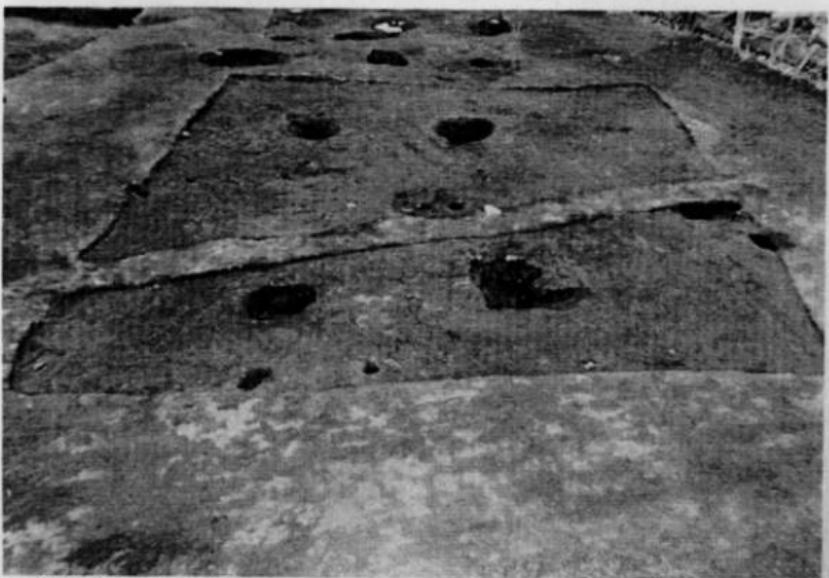
第13・16号竪穴全景 (南西より)



第20号竪穴全景 (西より)



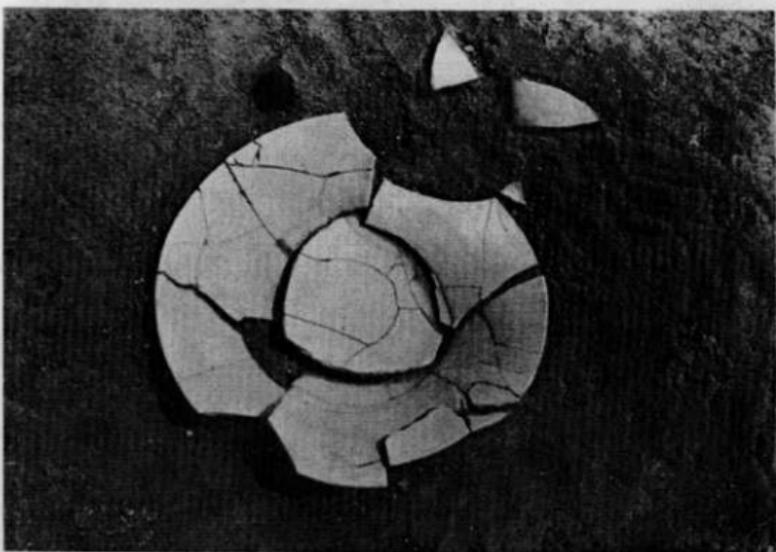
第17号竪穴全景（南より）



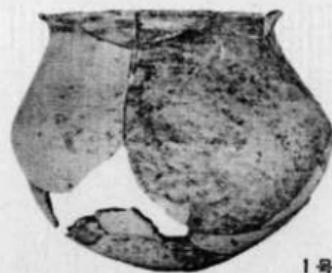
第18号竪穴全景（南西より）



第21号竪穴全景 (南西より)



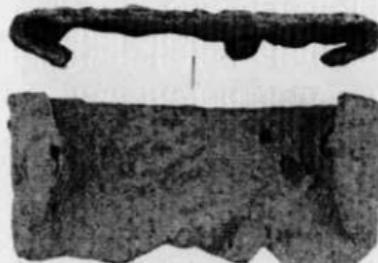
高环出土状態 (南より)



1号



1号



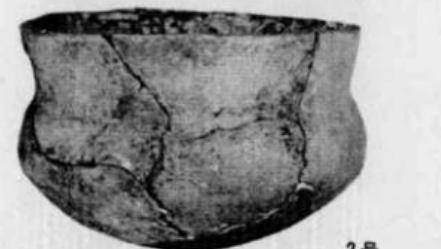
1号(鐵製鋤先)



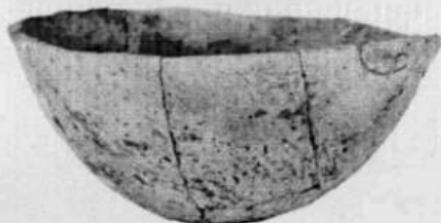
2号



2号



2号



2号



2号



2号



2号



2号



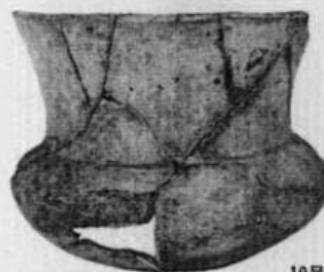
12号



2号



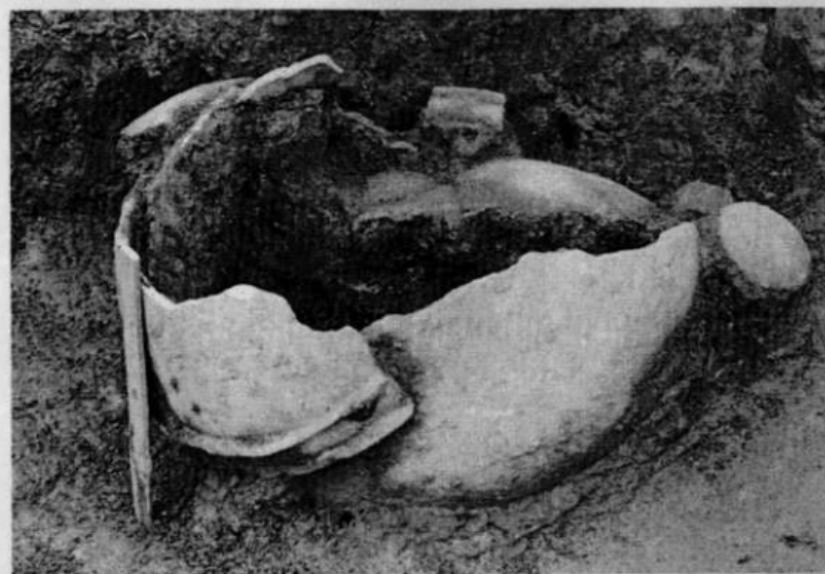
21号



19号



地下げ工事断面にあらわれた壺棺埋没状況



発掘された壺棺